

大宰府史跡

昭和60年度発掘調査概報



昭和61年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和60年度発掘調査概報

昭和61年3月

九州歴史資料館

序

昭和60年度は第三次五ヶ年計画の4年次にあたる。この計画では観世音寺地区土地区画整理事業に対する遺構確認のための調査を兼ねて大宰府条坊制の解明を主な目的として進めている。しかしながらこれまでに報告してきたように、未だ条坊制に関する顕著な遺構は確認できていない。今年度も引き続き県道南側の地域について調査を実施したが、条坊制に関する明確な遺構は検出されていない。むしろ第96次調査の項で報告するように、これまで五条路に推定されてきた県道山家～関屋線の道路下にも確実に建物遺構が存在していることが明らかとなり、従来の復原案にまたひとつ否定的な材料をもたらす結果となった。したがって今後はこれまでの発掘調査結果をもとにして新たな視点をもって研究を進めていかなければならないと考えている。

ご指導を賜わっている大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位に深甚の謝意を表するとともに今後一層のご指導をお願いする次第である。

昭和61年3月31日

九州歴史資料館長 田村圓澄

例 言

1. 本概報は昭和60年度に福岡県が国庫補助金を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第94次調査は昭和59年度に行った調査であるが、未報告であるので併せて報告する。また第97・98次調査については出土遺物整理および調査継続中であるので、その報告については次年度にゆずる。
2. 遺構実測図は国土調査法第II座標系を基に基準点を設け、これを基に作製した。
(昭和51年度発掘調査概報参照)
3. 検出遺構および木簡については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。
4. 遺構・遺物の写真は九州歴史資料館学芸一課の石丸洋の撮影による。
5. 本概報の執筆・編集は九州歴史資料館調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、赤司善彦が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目 次

序	
I 調査計画	1
II 調査経過	2
1 概 要	2
2 第94次調査	4
検出遺構	4
出土遺物	9
小 結	27
3 第95次調査	29
検出遺構	30
出土遺物	32
弥生時代の遺構・遺物	35
小 結	37
4 第96次調査	39
検出遺構	39
出土遺物	44
弥生時代の遺構・遺物	54
小 結	58
III 結 語	63
1 政庁前面域における区割について	63
2 大楠地区建物配置の変遷	68

挿 図 目 次

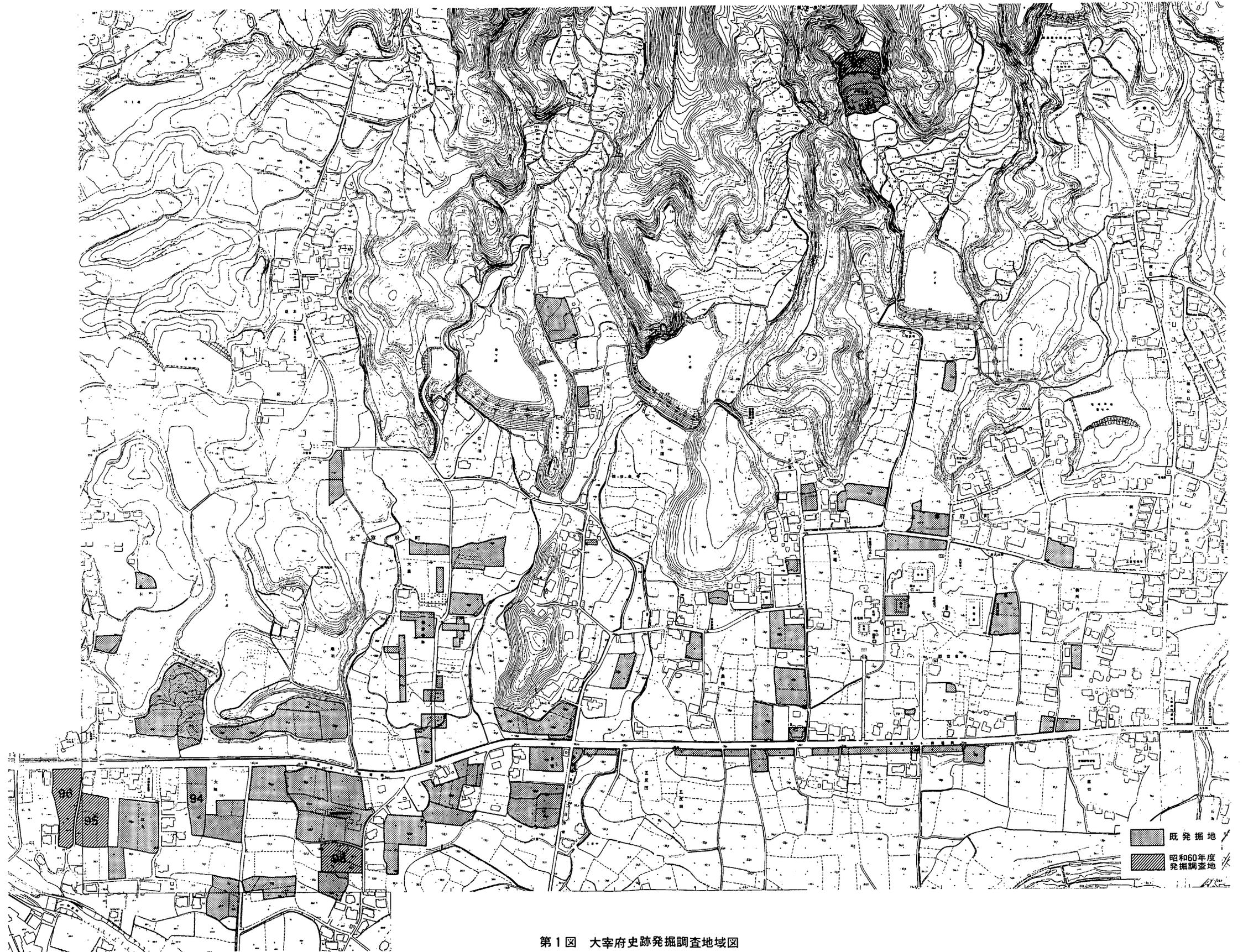
第1図	大宰府史跡発掘調査地域図	折り込み
第2図	第94次調査遺構配置図	折り込み
第3図	SE2715・2720・2725・2730・2735・2740実測図	7
第4図	SD2680最下層出土土器実測図	10
第5図	SD2680下層出土土器実測図	12
第6図	SD2680上層出土土器実測図	13
第7図	SD2700・2705・2710出土土器・陶磁器実測図	15
第8図	SE2715・2720・2730・2735・2740・出土土器・陶磁器実測図	18
第9図	SK2723・SX2747出土土器・陶磁器実測図	20
第10図	灰褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図	22
第11図	暗褐色土層出土硯実測図	24
第12図	暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図	25
第13図	軒平瓦拓影・実測図	27
第14図	SE2720出土木製漆塗蓋実測図	27
第15図	第95次調査遺構配置図	29
第16図	SK2771・2772・2773・2774・2775・2776実測図	31
第17図	SD2760上層出土土器実測図	32
第18図	SK2775・2780・2781出土土器実測図	33
第19図	灰褐色土層出土土器実測図	35
第20図	SD2760下層出土土器実測図	36
第21図	第96次調査遺構配置図	折り込み
第22図	SB2820・2825・2830柱掘形断面図	40
第23図	SE2845実測図	42
第24図	SB2825出土土器実測図	43
第26図	SD2817・2819出土土器・陶磁器実測図	45
第27図	SE2845出土土器・陶磁器実測図(1)	47
第28図	SE2845出土土器・陶磁器実測図(2)	48
第29図	SK2807・2813・2821・2838出土土器・陶磁器実測図	49
第30図	灰褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図	51
第31図	SE2845出土軒丸瓦拓影・実測図	52

第32図	SE 2845出土木製品実測図	53
第33図	石製品実測図	54
第34図	SD 2760西壁土層図	55
第35図	SX 2815実測図	56
第36図	SD 2760下層出土土器実測図	57
第37図	第95・96次遺構配置模式図	59
第38図	弥生時代河川流路の想定図(1/6,000)	62
第39図	政庁前面域溝配置模式図	64
第40図	大楠地区主要遺構配置模式図	折り込み
第41図	大楠地区建物変遷図(1)	70
第42図	同 上 (2)	71
第43図	同 上 (3)	72

図 版 目 次

- 図版 1 第94次調査区全景
- 図版 2 第94次調査区北半部全景
- 図版 3 第94次調査区南半部全景
- 図版 4 (上) 溝 SD 2680
(下) 溝 SD 2680土層
- 図版 5 (上) 溝 SD 2700・2705
(下) 溝 SD 2700・2705土層
- 図版 6 (上) 溝 SD 2680・2700間の遺構
(下) 柵状遺構 SX 2701・2703
- 図版 7 (上) 柵状遺構 SX 2714
(下) 掘立柱建物状遺構 SX 2735
- 図版 8 井戸 SE 2715
- 図版 9 (上) 井戸 SE 2720・2725
(下) 井戸 SE 2730
- 図版10 (上) 井戸 SE 2735
(下) 井戸 SE 2740
- 図版11 第95次調査区全景
- 図版12 第95次調査区土壌群
- 図版13 (上) 土壌 SK 2773
(下) 土壌 SK 2774
- 図版14 溝 SD 2760
- 図版15 第96次調査区全景
- 図版16 (上) 第96次調査区北半部全景
(下) 第96次調査区南半部全景
- 図版17 掘立柱建物 SB 2825・2820
- 図版18 掘立柱建物 SB 2830・柵 SA 2831
- 図版19 (上) 掘立柱建物 SB 2835
(下) 掘立柱建物の配置
- 図版20 掘立柱建物 SB 2820・2830柱掘形
- 図版21 (上) 溝 SD 2840・2817・2760など

- (下) 溝 SD2840 の石組抜き取り痕
- 図版22 (上) 井戸 SE2845
(下) 井戸 SE2845 拡大
- 図版23 溝 SD2760
- 図版24 (上・中) 堰 SX2815
(下) 護岸施設 SX2816
- 図版25 溝 SD2817
- 図版26 第94次調査 SD2680 出土土器
- 図版27 第94次調査 SD2700・2705・2710 出土土器・陶磁器
- 図版28 第94次調査 SE2715・2720・2730・2735・2740、SK2723、SX2747 出土土器・陶磁器
- 図版29 第94次調査 灰褐色土層・暗褐色土層 出土土器・陶磁器
- 図版30 第94次調査 暗褐色土層・暗灰色土層 出土土器
- 図版31 第95次調査 SD2760 上層・SK2774・SK2780・SD2760 下層 出土土器
- 図版32 第95次調査 灰褐色土層 出土土器
- 図版33 第96次調査 SD2817・2819 出土土器・陶磁器
- 図版34 第96次調査 SE2845 出土土器
- 図版35 第96次調査 SE2845、SK2807・2813・2821・2838 出土土器・陶磁器
- 図版36 第96次調査 灰褐色土層 出土土器
- 図版37 第96次調査 灰褐色土層・暗灰色土層 出土土器・陶磁器
- 図版38 第94次調査 出土軒平瓦・木製漆塗蓋・滑石製品・鉄滓
- 図版39 第96次調査 SE2845 出土木製品
- 図版40 第96次調査 出土軒丸瓦・石製品



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

I 調査計画

本年度の発掘調査は昭和57年度を初年度とする第三次五ヶ年計画の第四年次にあたる。この計画では太宰府市が実施している観世音寺地区土地区画整理事業に伴う遺構確認のための事前調査を兼ねて、未だ実態が明らかになっていない大宰府条坊制の遺構についての知見を得ることを主な目的とするとともに計画の後半では観世音寺中枢部および政庁後背地における遺構の実態についても明らかにすることを目的としている。この土地区画整理事業の対象地域は政庁跡前面を東西に走る県道山家～関屋線とその南を流れる御笠川とによってはさまれた、およそ80ヘクタールにおよぶ地域であり、条坊復原案の上では南北は五条から九条にかけて、東西は左郭八坊から右郭八坊にあたる。この地域の一部については過去に発掘調査を行い掘立柱建物などの遺構が存在していることを確認している。その後土地区画整理事業が具体化するに伴い、昭和55年度より積極的に発掘調査を進めてきた。その結果については各年度毎の概報において報告してきたように政庁跡前面地域における遺構の様相をほぼ明らかにすることができた。すなわちこの地域は従来の推定とはかなり異り、大宰府を構成する重要な官衙地域であったことが明らかになった。その範囲は東西384メートル、南北196メートル以上で、その西限は幅14メートルほどの南北大溝によって画されていたものとみられる。さらにこの大溝の西側は昭和59年度の概報で報告したように大宰府官人の居宅跡と推定される遺構を確認している。以上のような調査結果から昭和60年度の発掘調査は計画を大幅に変更し、さらに条坊地区の発掘調査に重点を置くこととした。

この昭和60年度の発掘調査計画については昭和60年5月20、21日両日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会議において了承されたので計画どおり実施することとした。

調査次数	調査地区	調査面積(m ²)	調査期間	備 考
95	9 KKK	1,500	4月～7月	推定金光寺跡
96	6 AYM-C	1,200	8月～11月	右郭五条五坊
97	6 AYQ-A	1,500	12月～2月	〃

II 調査経過

1 概要

昭和60年度の発掘調査は当初の計画では第95次調査として推定金光寺跡について着手する予定であったが、土地区画整理事業の工事日程を勘案した結果、予定を変更して条坊地区の調査を優先することとした。この土地区画整理事業に伴う条坊地区の調査は、これまでに報告してきたように多大の成果をあげ、従来推定していたよりも広範囲にわたって遺構が遺存していることが明らかとなっている。今回報告する第94次調査は昭和59年度の事業として実施したものであるが、この調査においては南北にのびる溝3条が検出され、大宰府条坊制を考える上において有力な手懸りを得ることができた。調査地は政庁中軸線から西へおよそ290メートルの所で、条坊復原案の上では右郭五条四坊にあたる。この調査結果を踏まえて、さらにその西方の地域について調査を行うこととした。この地域はすでに民家がかなり建ち込んでおり、発掘調査地についてかなりの制約を受けたことはいた仕方ないことであった。まず第95次調査として政庁中軸線から西へ430メートルの所の水田について調査を行うこととした。この地点は大部分が右郭五条四坊にあたるが、また六条路と右郭四坊路が交差する地点でもある。この地域は後世の削平によるためか遺構面が浅かったこともあって比較的短期間で調査を終了することができた。検出した主な遺構は南北溝2条などであった。

第95次調査終了とともに6月1日から第96次調査に着手した。調査地は第95次調査地と道路をはさんだ西側隣接地で条坊復原案の上では右郭五条五坊にあたる。調査は排土置き場が確保できないこともあって二回に分けて行うことを余儀なくされた。したがって調査期間も長期にわたり、終了したのは10月の半ばであった。この調査では掘立柱建物3棟、溝2条、および弥生期の溝などを検出した。

今回検出した掘立柱建物のうちSB2825とSB2830は西側妻柱列と西側柱列の柱筋が通っており、同時期の造営と考えられ、また建物が計画的な配置をとっている。さらに建物の位置等から新たな問題を提起することとなった。まずSB2830は南北棟の建物であるが、桁行2間分を検出したのみで、さらに北方へ延びている。桁行5間あるいは7間であるのか不明であるが、いずれにしてもこの建物の大部分は県道山家～関屋線の道路下になる。これと同じような遺構はすでに第90次調査においても知られているが、このことは条坊復原案との間に矛盾を生じることになる。すなわちこの県道は条坊復原案では五条路に比定されている。しかし今回の調査結果から本来ここには道路は存在していなかった可能性がさらに強くなった。次にこれまでの調査によって蔵司前面を南北にのびる溝SD320は府庁域の西を区画するものであり、それと

もに昭和59年度に行った第88・92次調査で検出した建物は柱掘形が小さいことや出土遺物に府庁域内とは異った傾向が見られることからSD320より以西は大宰府官人の居住地域ではないかと推定してきた。しかしながら今回検出した2棟の建物の柱掘形は府庁域内の建物と同様に掘形も大きく、整然とした隅丸方形を呈している。さらに調査地の北にある小学校の校庭からは、かつて「遠賀團印」が出土しており、このことから、この付近を筑前国府に比定する見方もあり、今回検出した遺構の性格については今後の調査の進展をまってさらに検討を行う必要がある。この第96次調査をもって一応土地区画整理事業に伴う事前の遺構確認調査に終止符を打つこととした。10月28日からは年度当初に調査を行う予定であった推定金光寺跡について、これを第97次調査として着手した。この金光寺跡については、これまでに2回発掘調査を行い、5棟の礎石建物を検出している。今回は遺構の北限を確認することを目的とした。

昭和61年1月10日から第98次調査を開始した。この調査は住宅建設に伴う事前調査である。調査地点は政庁南門の西南およそ200メートルの所で、昭和58年度に第85次調査として行った調査地の北側隣接地である。条坊復原案では右郭六条一、二坊にあたる。第85次調査では掘立柱建物1棟、溝10条などを検出している。特に調査地域の東側で検出した南北溝SD2340からは天平六年の紀年銘を有するものをはじめ多量の木簡が出土している。今回の調査では、このSD2340の北延長部について調査を行うとともに溝の西側における遺構の状況について知見を得ることを目的とした。以上が昭和60年度における発掘調査の概要である。これを地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積(m ²)	調査期間	備考
95	6AYM-C	1,060	850401~850529	右郭五条五坊
96	6AYQ-A	2,015	850601~851019	〃
97	9KKK	1,160	851028~860301	推定金光寺跡
98	6AYM-B	800	860110~860305	右郭六条一、二坊

2 第94次調査

既応の調査で政庁前面張出し部の西を限ると推定されている南北大溝SD320の西側については、従来ほとんど知るところがなかった。ところが昭和59年度に実施した第88次・第92次調査によって、SD320の西側にも掘立柱建物の所在が確認された。しかしそれらは柱間間隔や柱掘形などが官衙域検出の建物にくらべ格段に小さいことなどもあって、官衙域の西への延長を意味すると解するよりも、官人の居宅等の性格を与えうると判断した。その際、第92次調査区の西端で南北溝SD2680の東肩の一部を検出したが、SD320とSD2680の間の東西幅がSD2340とSD320で東・西を限られる不丁地区官衙域の東西幅と大略一致するところから、この区域の西を限る溝の可能性が考えられた。第94次調査はこの南北溝SD2680およびその西側の遺構の性格の解明を主な目的として実施した。

調査区は第92次調査区の西に接する水田地1,380㎡で、鏡山猛氏による大宰府条坊復原案の右郭五条三坊に相当する。地番は太宰府市大字観世音寺字大楠330-1番地である。

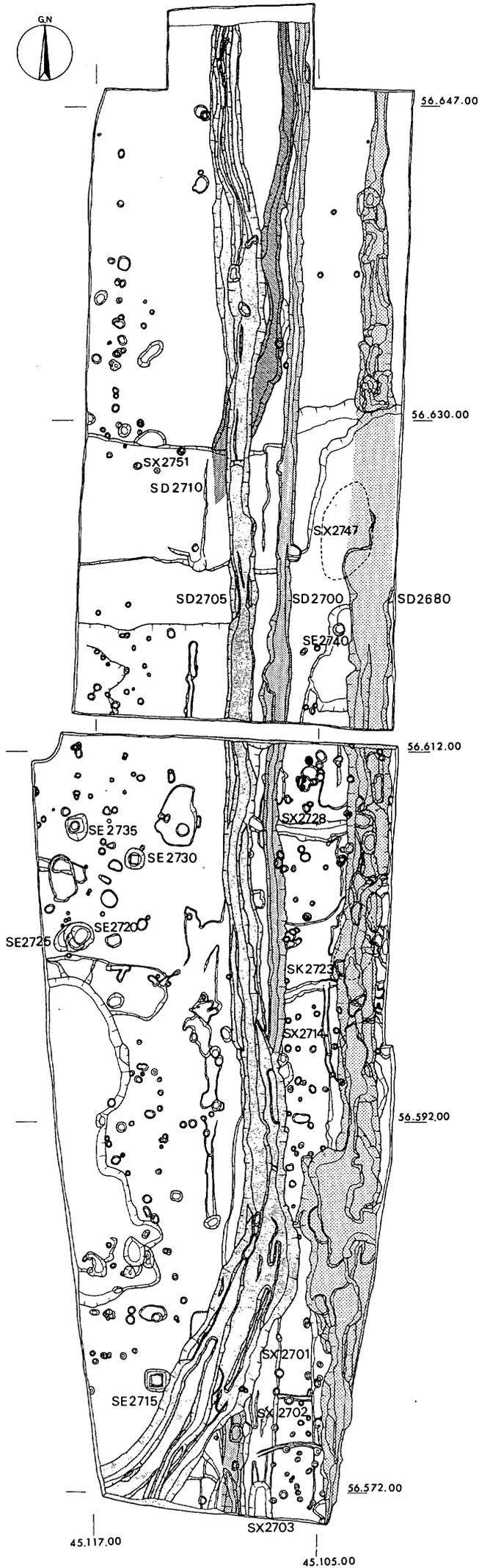
調査は昭和59年12月10日に開始し、翌年4月5日までの約4か月間を要した。調査にあたっては、調査区が南北に細長い地形であり、かつまた排土置き場の都合もあって、南半部・北半部に分けて実施することとした。

南半部の調査は昭和59年12月10日に開始した。12月中に表土・床土の除去作業を終え、翌昭和60年1月8日から遺構面を覆う灰褐色土層の除去にはいった。灰褐色土層は全体に薄く、積雪など天候の不順に悩まされたものの、溝SD2680などの溝や井戸、ピットなどを確認しつつ2月7日に遺構検出を終了した。以後、2月8日に軽気球による空中写真を含めた写真撮影、2月13・14日に実測を行なった。その後、井戸の発掘など若干の補足調査を経て2月22日に南半部の調査を終え、埋め戻しを行った。

北半部の調査は3月4日に開始し、13日に表土・床土の除去作業を終え、14日から遺構の検出にはいった。調査区の北半は床土の直下が遺構面であり、南半も床土と遺構面の間の灰褐色土層が薄かったこともあって、作業は順調に進行し、28日に遺構検出を終了した。3月29・30日に軽気球による空中写真を含めた写真撮影、4月2～5日に実測および若干の補足調査を行ない、5日中に第94次調査のすべてを完了した。

検出遺構

検出した主な遺構は、溝4条、井戸6基、土壇、ピットなどである。その他とした遺構の中には掘立柱建物・柵となる可能性をもつ例が含まれるが、後述のように断定にはいたらなかった。遺構面は北から南へ傾斜し、北半では表土(耕作土)・床土直下の地山面で遺構が検出された。南に向かうに従って床土と遺構面との間に灰褐色土層が挟まるようになり、部分的にはさ



第 2 図 第94次調査遺構配置図

らに暗褐色土層を挟んでいた。また遺構としては取り上げていないが、北半部の中央付近では東西方向にひろがる落ち込みがみられ、上から暗褐色土層・腐植土層が堆積していた。また南半部の西辺中央付近には浅い掘り込みがみられ、上から暗褐色土層・暗灰色土層が堆積していた。その北側、南半部の北西の井戸の分布する一帯は灰褐色土層の下に埋め土と思われる茶褐色土層が認められ、遺構はその面から掘り込まれていた。

以下、主要な遺構について説明することにする。

溝

SD2680 第92次調査区の南半部西端でその東肩の一部を検出していた南北溝で、本次調査区の東端に沿って位置する南北長77.75m分を発掘した。南半部中央付近では西肩部が崩壊し、北半部中央付近では暗褐色土層・腐植土層の堆積からなる東西方向の落ち込みによって削り取られるなど、溝の残存状態は必ずしも良くない。比較的残りの良い南半部の崩壊部分の南側でみると、溝肩部幅約3.8m、底部幅約0.6m、深さ約0.9mをはかる。崩壊部分の北側でみると、溝は肩部幅2.05m、深さ0.75mに減じている。この部分では溝は二段掘りになっていて、肩部の上端から約0.5mの深さまでは緩やかに傾斜するが、そこからさらに上端幅0.4m、下端幅0.26m、深さ0.28mの直立気味の壁をもつ溝が掘られている。これは残りが良くないものの南半部では各所で認められ、SD2680が本来二段掘りの溝であったことを示している。溝は意図的な埋め土と判断される厚さ15～20cmほどの茶褐色を呈する黄色粘土混じりの層を挟んで、上下2層に大別できる。上層は暗茶褐色土層、下層は暗灰色砂質土層を主体としている。下層の下部は全体に薄い茶褐色砂層がみられ、最下層をなす。これが部分的には上述の下段の細い溝をなしている。溝は南流し、南北では約0.9mの高低差がある。溝底の高くなる北端部では溝は肩部幅0.7m、底部幅0.5mと細くなり、深さも約0.08mをはかるにすぎなくなる。北半部の北辺は表土直下が地山で、柱穴などの遺構も少なく、全体に削平を受けたのであろう。

SD2700 SD2680の西で検出した南北溝で、心心で約4.2mの間隔をもって位置する。さらにその西に位置する南北溝SD2705・2710とともにSD2680を削り取る北半部の東西方向の落ち込みを切り込んで構築しており、南半部ではSD2705によって切られている。すぐ西側を並走するSD2710とも部分的に切り合いがみられ、それに後出する。したがって、4条の溝はSD2680→SD2710→SD2700→SD2705の順序に構築されている。ただSD2705・2710が南に向うにしたがって大きく西南に向きを変えるのに対し、SD2700は調査区内をほぼ南北に貫流する。この点はSD2680に通じ、その東側の官人居住区の拡張にともなう、SD2680の移転の可能性もっている。溝幅はほぼ一定していて、肩部幅0.8～1.0m前後、底部幅0.4～0.5mをはかる。北端と南端の比高差は約0.25mで南に緩やかに傾斜する。0.2～0.4m前後の深さがある。

SD2705 SD2700の西に位置する南北溝で、心心で約4.1mの間隔をもつが、南に向かうにしたがってわずかに東へと振れ、SD2700を切った後に流れを西南に変える。SD2680・2700と

比較して規格性に劣るものがある。南半部の西南近くでは部分的に溝幅が4mを越える部分もあるが、これは氾濫によって流路の変更が生じたためと考えられる。本来の流路は調査区の中央付近に良く残っていて、北半部南端では肩部幅1.44m、底部幅1.14m、深さ0.4mをはかる。調査区の両端で溝底に0.47mの比高差があり、緩やかに南流している。

SD2710 SD2700に西接する溝で、それに先行する。北半部の北半では南北方向をとるが、南に向かうにしたがって西南へ流れを変える。溝底が浅いために北半部の中ほどで消える。北端で肩部幅0.48m、底部幅0.25m、深さ0.16mをはかる。南へ約17mは同じ幅であるが、SD2700に切られる部分では肩部幅約2.3m、底部幅約1.7mほどに広がる。溝底はほぼ水平につくられている。

井戸

SE2715 SD2705の西側に位置し、掘形の一部を切られていた。上面で長軸1.36m、短軸1.2mをはかる隅丸長方形プランの掘形が認められた。掘形の内部から、投げ込まれたような状態で、多量の土師器・青磁・瓦・石を検出した。ことに瓦は井戸側の外に沿って並ぶように立つものもあったが、これらの投棄は井戸側の内部にもおよび、裏込めなどの意図的なものとは考えられなかった。井戸側は方形縦板で、板材の残りは良かったが、発掘の途中に崩壊したため下部については不明である。側は四隅に打ち込んだ径4～6cmほどの丸太材を用いた隅柱、一部残存していないが上下二段の横棧、内法長50～55cmの縦板(東辺5枚、他の三辺3枚)で構成される。確認した側は一段分深さ70cmであるが、さらに深くなる。主軸をほぼ南北、N30'Eにとる。大宰府検出井戸分類のII-A類に属する。

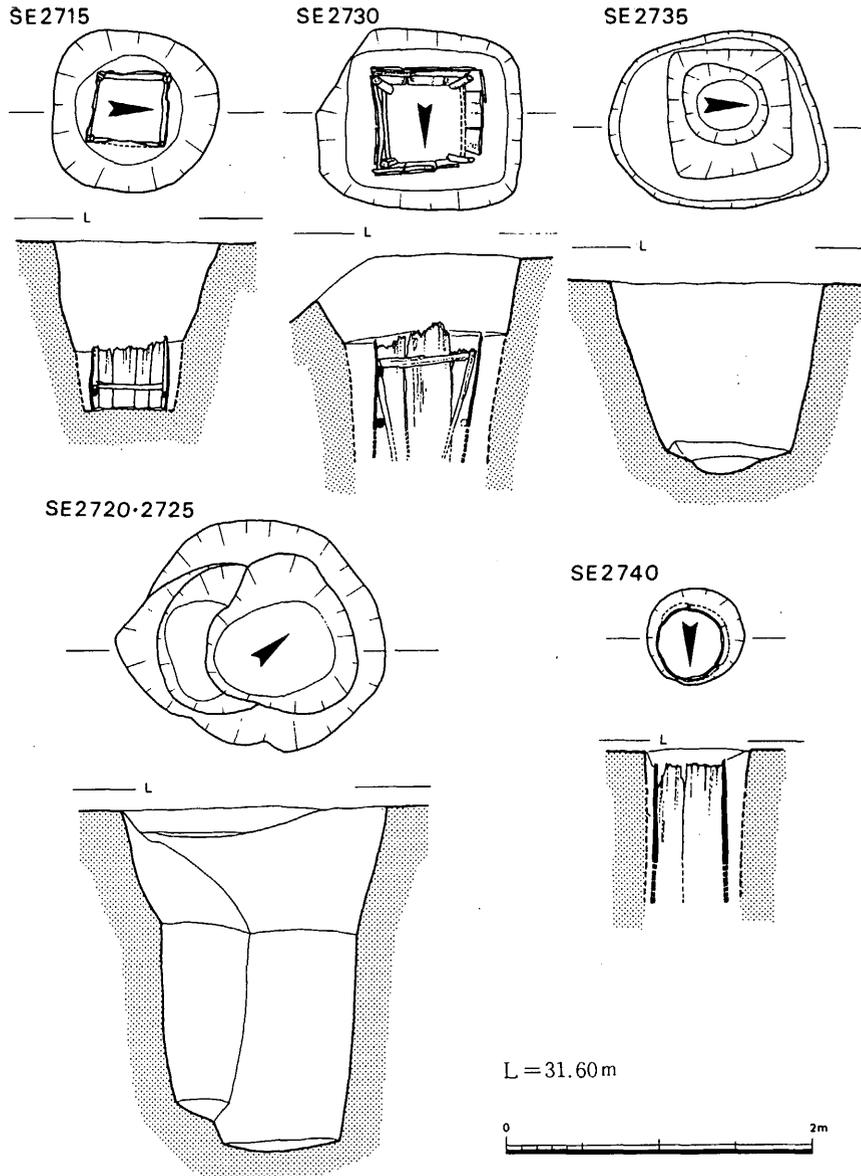
SE2720 SE2715の北約24mに位置する。掘形は上面でSE2725と分離できたが、両者を合わせて径約1.8mの円形プランを呈していた。SE2725を切っている。約0.8mの深さで本来の形状が認められ、径1.0～1.1mの円形プランをなす。深さは2.28mをはかる。底部が0.6～0.8mの不正円形であることから、円形の井戸側が据えられていたと推定できるが、遺存していなかった。

SE2725 SE2720に切られた井戸で、径約1m、深さ2.08mに復元される井戸掘形が残るが、側は遺存していなかった。底面が不正形ながら径0.7mほどの円形を呈することから、円形の井戸側が据えられていたと推定できる。

SE2730 SE2720の北東約5mに位置する。掘形は上面で径1.07～1.10mの不正円形を呈する。掘形上面から約0.7mで方形縦板で組まれた井戸側を検出した。四隅に隅柱が立てられているが、東南のみが角柱で、他の3本は自然木を利用していた。隅木には柄穴が設けられ、先端を尖がらせた横棧を差し込み、固定している。横棧は東西には角材、南北には自然木を用いている。横棧の内法長は東西39・41cm、南北42・46cmをはかる。縦板は残存長約40cmをはかり、掘形上面から底面までの深さは1.10mである。大宰府検出井戸分類のII-A類に属する。

SE2735 SE2730の北西で検出した。井戸掘形は長軸1.36m、短軸1.18mのやや角張った長

円形プランを呈するが、底面が0.8m前後の方形プランであることからみて、本来は一辺1.2mほどの隅丸方形をなすのであろう。底面の中央には上端で0.5~0.56mの丸底をなす円形の掘り込みがみられる。方形縦板と曲物からなる井戸側が据えられていたと推定されるが、わずかに木質を残すのみであった。主軸をN3°30'Wにとる。



第3図 SE2715・2720・2725・2730・2735・2740実測図

SE2740 北半部で検出した井戸で、前述の5基と異なり、SD2700の東に位置する。直径0.65mの円形プランの井戸掘形の中に、一木を刳り抜きにした直径44～48cmの円形の井戸側が据えられている。側は3～4cmの厚さを残して刳り抜かれているが、一木をそのまま刳り抜いたのではない。現状では4枚の縦板状となっているが、隣り合う板材に厚さの違いがみられる点、適当に四分割した上でそれぞれを削り込んだものと思われる。掘形の上端から0.75m、残存する側の上端から64cmまで掘り下げたが、側の残存状態の悪さと湧水の激しさのため、完掘にいたらなかった。

土壙

SK2723 南半部で検出した土壙で、SD2680の埋土に切り込んでいる。上面では長軸約4.2m、短軸約2.5mの長円形を呈していたが、底面付近は不正円形となる。深さ約0.45m。なお、SD2680の埋土の除去にともない実測図には表現されていないため、範囲を点線で表現している。

保土穴

SX2751 北半部を東西に横切る落ち込みの埋土上面で検出した。径14cm、深さ5cmほどの摺鉢形の保土穴で、その周囲は径28～30cm、厚さ5cm前後が焼けて赤変していた。付近で同じような保土穴が1個検出されている。

その他の遺構

SX2701・2703 南半部の東南隅近くに位置する柱穴群で、SX2701はSD2680の西肩部に沿うように南北に並んでいる。一見して柵を思わせるが、その間隔は0.8～2.9mと大きく相違している。SX2703もほぼ南北に並び柵を思わせる。柱間間隔は一か所を除き約2mである。SX2703の間隔を参考にすれば、SX2701も2mの間隔で柱穴をひらうことができる。両者は基壇状に削り出された平坦面の東端沿いおよび西端にかかって位置し、無関係ではない可能性がある。しかしSX2701が主軸をN1°E、SX2703はN1°45'Wにとるため、両者は北に向かうにしたがって間隔をせばめている。基壇状平坦面は北で幅約1.7m、南で約2.3mをはかる。以上のようにSX2701・2703は主軸の相違とそれにもなって北に向かうにしたがって接近する点から別遺構とも思われる。ここではそれぞれを柵的な遺構として別個に考えておく。

SX2714 南半部の中央近く、SD2680とSD2700の間に位置する柱穴群で、南北に4条が柵状に並ぶ。SX2701・2703との間が両溝によって不明であるが、方向からみると、SD2700の東肩から2条目の柱列はSX2701の延長である可能性をもっている。

SX2728 南半部の北東隅に位置する。SD2680に後出し、その埋土に切り込んでいる部分があり、実測図には表現されていないが2個の関連する柱穴が検出されている。それからみて東西棟の掘立柱建物かとも思われるが、柱間が不揃いのため、建物としての判断を避けている。東西棟の建物と考えた場合、東側の妻の柱間間隔は南から270・255cmをはかる。これに対し南側柱列の柱間は西から195・175cmほどに考えられる。西から2・3番目の柱穴の底には礎板状の

敷石が認められる。南第2列では西から220・165cmにそれぞれ柱穴が配され、西から2番目の柱穴には敷石がみられる。この柱穴は南にややズレている。南第3列は妻のみに柱穴があり、他は認められなかった。また北半部では関連する柱穴は検出されていない。これらから判断すると、主軸をN²15'Wにとり、南側に廂のつく梁行3間×桁行3間以上の東西棟建物となる可能性がある。しかしながら、検出部分についてはすべての柱間間隔が相違している点からみて、建物と判断するには尚早と考え、不明遺構としておく。柱穴出土の遺物からみて9世紀後半代のものとみられる。

出土遺物

SD2680出土土器(第4～6図、図版26)

SD2680からは本次調査区ではもっとも多くの遺物が出土した。多くは土器・瓦類で、それらは前述のように、上層・下層・最下層に分離できる。最下層からの出土量は少ない。

最下層出土土器

須恵器

蓋(1・2) 図示した蓋はいずれも身受けの返りをもっているが、返りをもたない破片も出土している。1の外天井部はへら切り離しのままであるが、2はへら削りされている。2には撮がつくが、1は不明である。

杯(3) へら切り未調整の外底部に、径8.5cmの高台を有する。底部と外部との変換部には比較的明瞭に稜が走る。軟質の焼成のため、体部の器面が磨滅しているが、わずかにヨコナデが認められる。

鉢(4) 大形の鉢で、口径41.6cm、胴部最大径43.6cm、器高29.2cmに復原される。内外ともに体部下半には叩きがみられ、外面は格子状文、内面は同心円文が施されている。

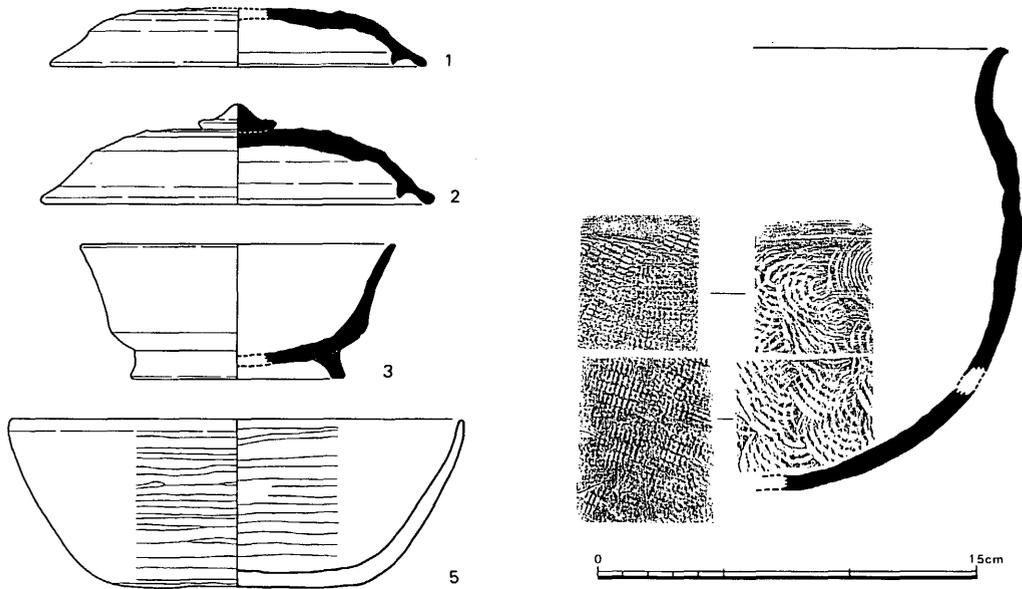
土師器

椀(5) 3分の2ほど残る椀で、口径17.8cm、器高6.7cm、底径9.8cmを測る。器肉は0.4～0.7cmの厚さをもつ。へら切り後平坦に調整された外底をもつ底部から、体部が直線状に立ち上がるが、口縁部付近でやや内彎する。体部は内外面ともにヨコ方向のていねいなへらミガキが施されている。口縁端部はヨコナデのままである。精良な胎土を用い、淡い赤茶色を呈する。大宰府では第43次調査(観世音寺大房跡)の小ピットSK1106、本次調査区に東接する第92次調査区の地鎮遺構と判断されるSX2670から類例が出土していて、奈良時代前半頃の時期に考えている。

下層出土土器

須恵器

蓋(6・7) 最下層同様、身受けに返りをもつ例を図示しているが、小片の中に返りをもたな



第4図 SD2680最下層出土土器実測図

い例が含まれている。6は口径10.4cmの小形の蓋で、外天井部はへら切り未調整のままであるが、内天井をナデ、他をヨコナデで調整している。7も同様の調整であるが、外天井部はへら削りされている。6には撮がつかない。7は外天井部の中心付近がやや平滑化していて、撮がついていた可能性もっている。

杯(8~13) 8~11は有高台の杯である。いずれも外底部はへら切り離しのままで、外端に裾広がり低い高台を付けている。体部の内外面、内底部はヨコナデ・ナデで調整を加えている。体部は9・11が直線的に立ち上がるが、これらを含めて体部に丸味がみられる。12・13は無高台の杯で、へら切り離しのままの外底部から体部が直線的に立ち上がる。体部は内外面ともにヨコナデされ、13の体部はわずかに内彎する。内底部はナデで調整されている。

碗(14) 無高台の碗で、焼きひずみのためやや歪んだ器形をしているが、口径18.0cm、器高6.1cmに復原される大形のものである。内底をナデ、体部をヨコナデで仕上げているが、径13.9cmに復原される外底部にはていねいなカキ目調整がみられる。内底には「ナ」状のへら記号が認められる。胎土に砂粒が目立つが、堅緻に焼成され、黒灰色を呈している。

壺(15~17) 15・16は長頸壺の口頸部片である。15の口頸部はほぼ完存するが、その内面およびわずかに残る胴部内面には一面に漆が付着している。16は口縁部を欠くが、15と同様に内面の全体に漆が付着し、口縁部欠損面にも被膜がみられるので、意図的に打ち欠いて使用したと考えられる。いずれも内外面ともにヨコナデで調整されているが、15はわずかながら歪みがみられる。17は類例の少ない器形の短頸の壺で、口径12.4cm、器高16.9cm、底径12.0cmをはか

る。最大径17.3cmをはかる円筒状の胴部の上端がすばまり、そこに外反する頸の短い口縁が付く形態をとっている。胴部外面は回転ヘラ削りのままであるが、肩部から内面にかけてヨコナデで調整している。

甕(18) 口径20cmに復原される甕の口縁部の小片で、頸部外面、肩部内外面に叩きないしその痕跡がみられる。頸部外面のそれは刷毛目状工具の当りかもしれないが、わずかに凹凸を残す程度までにヨコナデで消されている。肩部外面の格子状叩きも強いヨコナデまたは細かいカキ目でほとんど消されている。内面の叩きは弧状の一部が残るのみである。

土師器

杯(19) 口径13.2cm、器高3.9cmをはかる杯で、底部は7.7cmとやや大きい。外底部はヘラ切り離しのままであるが、他の部分は器面の磨滅のため調整不明である。淡い赤茶～茶灰色を呈する。

甕(20・21) 20は口径11.8cmに復原される小形の甕で、二か所に把手がつくと推定される。体部からわずかに引き出された口縁部はヨコナデしているが、体部の外面は目の粗い刷毛目の調整、内面は雑にヘラ削りをしており、全体に仕上げの粗い土器である。21も口径16.3cmの小形の甕で、ヨコナデで仕上げられた口縁部にわずかながら歪みがみられる。口縁部をわずかに肥厚させ、外反させている。体部の外面には格子目の叩きがあり、「 \boxtimes 」状のヘラ記号がみられる。内面は下から上へのタテ方向のヘラ削りで調整している。きわめて硬質に焼成され、淡い赤灰色を呈している。

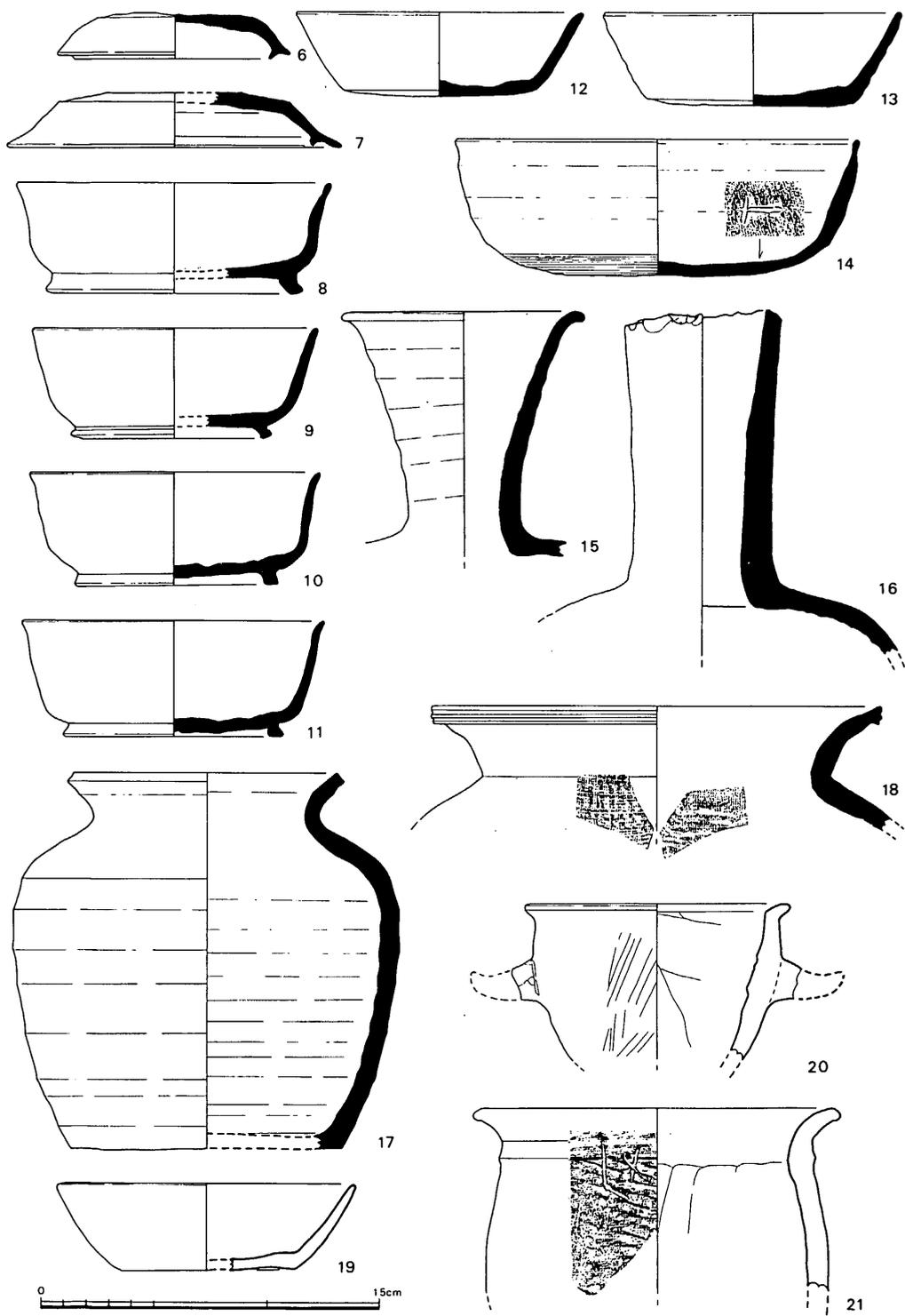
上層出土土器

須恵器

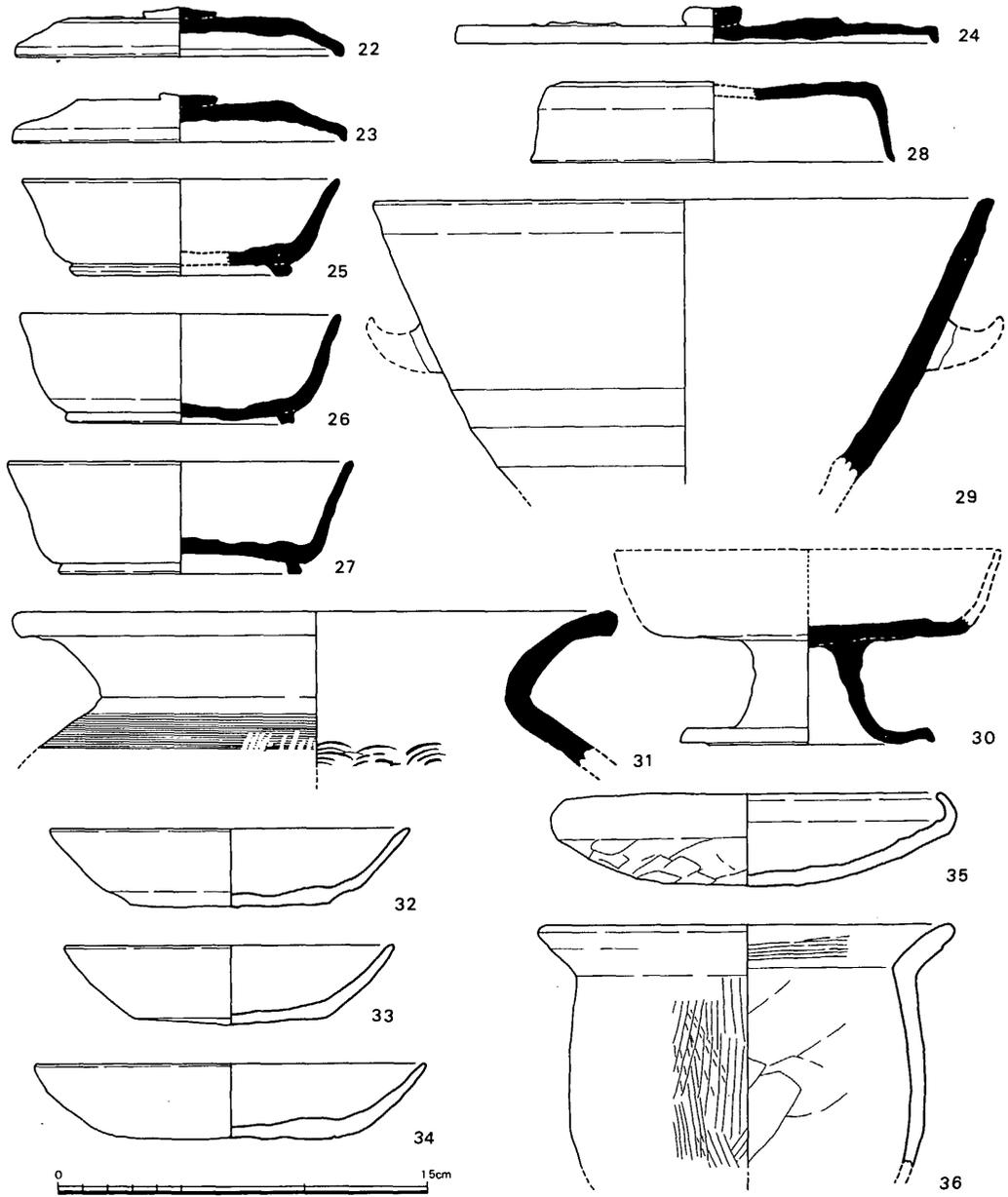
蓋(22~24) いずれも身受けに返りをもたないタイプの杯蓋である。22・23はほぼ同大の蓋で、ヘラ切り未調整の外天井部の中央に撮を付けている。体部・内底部はヨコナデで仕上げら

SD2680

	口径	器高	底径・高台径
1	14.9	2.3	
2	15.6	4.0	
3	12.5	5.4	8.5
4	41.6	(29.2)	
5	17.8	6.7	9.8
6	10.4	2.0	
7	14.9		
8	13.9	5.0	11.4
9	12.6	5.0	8.9
10	12.9	5.1	9.0
11	13.4	5.2	9.7
12	12.8	3.8	8.6
13	13.3	4.2	9.2
14	18.0	6.1	13.9
15	10.9		
16			
17	12.4	16.9	12.0
18	20.0		
19	13.2	3.9	7.7
20	11.8		
21	16.3		
22	13.3	2.0	
23	13.6	2.0	
24	19.7	1.5	
25	12.8	4.0	9.0
26	13.0	4.5	9.2
27	14.0	4.6	9.8
28	14.8	3.3	
29	25.2		
30			10.3
31	24.5		
32	14.6	3.2	8.1
33	13.4	3.3	7.8
34	16.0	3.1	8.7
35	15.3	3.8	15.8
36	17.0		



第 5 图 SD2680下層出土土器実測図



第6図 SD2680上層出土土器実測図

れているが、22には外天井部と体部の境付近にへラ削りがみられる。24は口径17.9cmをはかる大形の蓋で、ほぼ平坦につくられている。外天井部は未調整のまま撮付近を除いて回転へラ削りされる。また体部は内外ともにヨコナデ、内天井部はナデで調整されている。

杯(25~27) いずれも有高台の杯で、へら切り離しのままの外底部の外端に、裾広がりの低い高台が付けられている。体部内外面をヨコナデ、内底部をナデで調整している。下層出土の杯にくらべ体部の立ち上がりが外反し、口径に対して器高が低くなる傾向をもつ。

壺蓋(28) 口径14.8cmに復原される薄くつくられた薬壺の蓋で、最上層から出土した。外天井部はへら切り離しのままであるが、他はヨコナデ、ナデでていねいに仕上げられている。淡い暗茶褐色を呈する。

高杯(30) 小形の高杯の脚部で、脚端径10.3cm、脚高4.3cmの低脚である。大きく外に広がる脚端部は断面三角形状に引き出されている。ていねいにつくられ、器面は磨滅しているが全体にヨコナデ調整の痕跡をとどめる。杯部は底部を残して、外底部のへら削り、内底部のナデおよびわずかに立ち上がる体部のヨコナデによる調整がうかがわれる。淡い赤褐色を呈する。

鉢(29) 口径25.2cmに復原される大形の鉢で、底部を欠く。体部外面には一組の把手が付くと推定されるが、横幅3.8cm、縦幅2.2cmの杏仁形をなす基部を一か所残すのみで、形状は明らかでない。体部外面の下半をていねいに回転へら削りし、他をヨコナデで仕上げている。

甕(31) 口径24.5cmに復原される甕口縁部の小片である。頸部から口縁端部に向かって大きく外反し、わずかに肥厚する端部を丸味をもった「コ」字形におさめている。体部外面は平行状の叩き目を細かなカキ目で擦り消している。また内面には円弧状の叩きがみられる。口頸部はていねいにヨコナデで仕上げている。

土師器

杯(32~34) 口径にくらべ器高・底径の小さな杯で、いずれも器面の磨滅が進み、調整を不明瞭にしている。32・33の外底はへら切り離しのままで、33には目の細かな板状圧痕が方向を変えつつ残されている。34は外底部・体部外面をへら削りし、さらに体部外面から内底部にかけてヨコナデ、ナデで調整している。淡赤灰~淡赤茶色を呈する。

皿(35) 外底部を手持ちへら削りした不安定な丸底に、大きく内側に屈曲する体部をつける皿である。口径15.3cm、器高3.8cm、底径15.8cmをはかり、わずかに体部の一部を欠く。体部は内外面ともにヨコナデ、内底部はナデで調整している。砂粒を殆んど含まない精良な胎土を用いているが、整形はていねいではない。淡赤茶色に焼成されている。

甕(36) 小形の甕で、口径17.0cmに復原される。口縁部外面には端部から0.9cm付近で0.1cmほどの段差がついている。体部外面および口縁部内面は粗い刷毛目調整がほどこされ、体部内面は下から斜上へのへら削りがみられる。

SD2700出土土器・陶磁器(第7図、図版27)

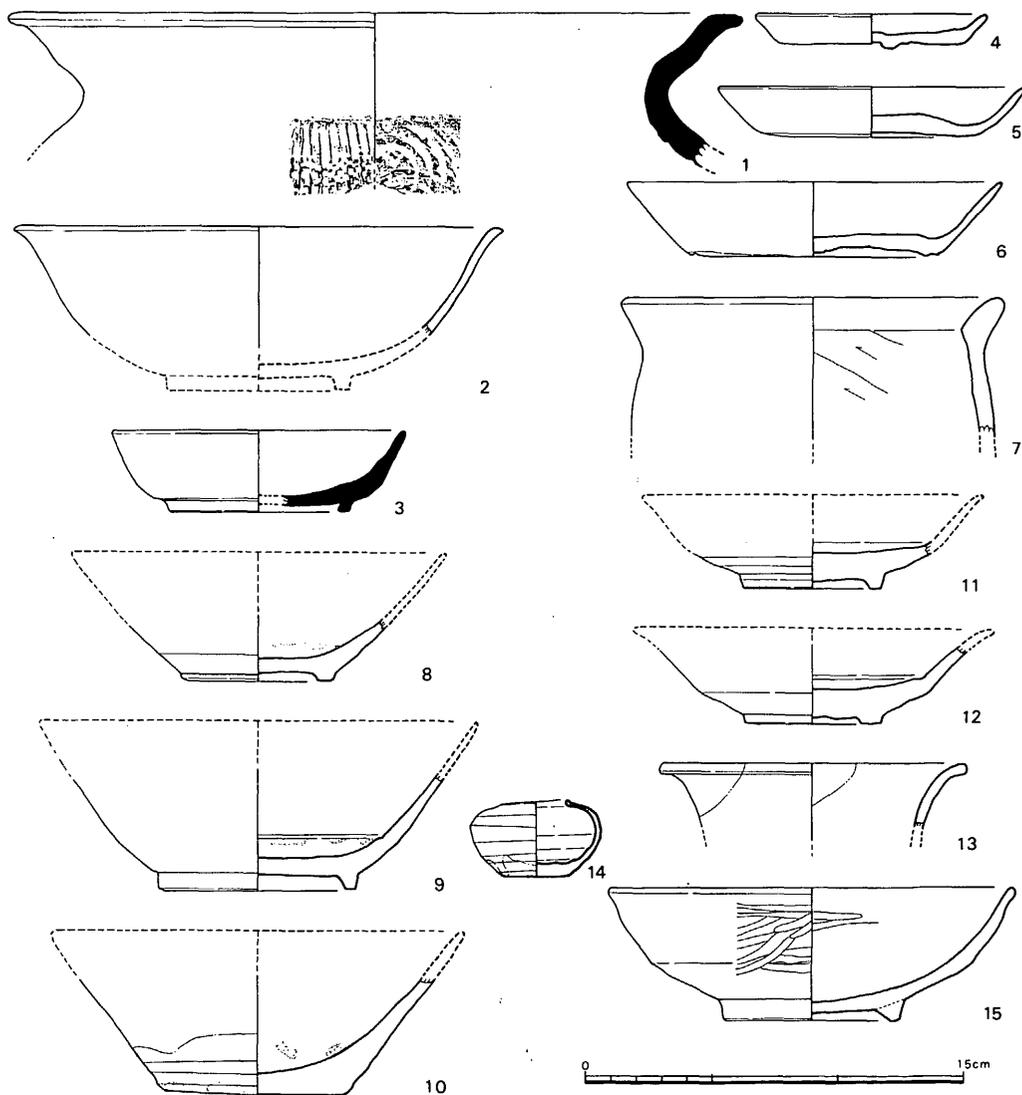
須恵器

甕(1) 口径24.1cmに復原される甕で、二重口縁状に屈曲する口縁の端部を外方に引き出し、上面を平坦にしている。ヨコナデされている。体部外面には格子状の叩きが、内面には青海波

文の叩きがみられる。

青磁

椀(2) 薄手につくられた椀の口縁部片で、口径19.3cmに復原される越州窯系青磁の椀である。やや赤味をおびた灰色の胎土の器表全面に淡灰緑色の釉がほどこされているが、風化のためいちじるしく剥落している。他に底部など3点の破片が出土している。



第7図 SD2700・2705・2710出土土器・陶磁器実測図

SD2705出土土器・陶磁器(第7図、図版27)

須恵器

杯(3) ヘラ切り離しのままの外底部に、裾をしぼる形の低い高台を付ける杯である。体部・内底部をヨコナデ・ナデで仕上げている。

獣形陶製品(A) 動物の跪坐する様を表現した陶製品で、頭部および尾部・足部を欠失する。背には尾にかけて雑に毛並がへらで線彫りされている。背筋の彎曲からみて、正面からみれば顔面は左を向いている。砂粒を多く含む胎土を硬質に焼成している。隣接する第92次調査区から犬ないしは猪と思われる須恵器の獣形品の頭部片が出土しているが、それとは別個体である。

土師器

皿(4・5) 4は糸切り底の小皿で、外底部の全面に板状圧痕がみられる。体部はヨコナデ、内底部は一方のナデで仕上げられている。5はへら切り離された皿で、磨滅のため調整が不明瞭であるが、外底部にかすかに板状圧痕がみられる。

杯(6) 糸切り底の杯で、口径14.9cm、器高3.0cm、底径10.1cmに復原される。内底部をナデで調整し、外底部に板状圧痕が残る。淡赤灰色を呈する。

甕(7) 口径15.2cmに復原される甕の小片で、体部内面を下から斜上へのへら削りで仕上げ、他をヨコナデ・ナデで調整している。別に玄界灘式製塩土器の甕の体部小片が出土している。

白磁

小壺(14) 胴部最大径5.2cm、器高3.0cmの無頸の小壺で、完形である。外面は肩部以下を回転へら削りで仕上げ、他の部分はヨコナデしている。内外面に淡黄色の釉を薄くほどこすが、胴部外面下端付近と外底部は露胎をなし白色を呈する。外面の釉は細かな貫入をとまなう。

青磁

椀(8~10) いずれも越州窯系青磁椀の底部片で、8・9は輪状高台、10は平底をしている。8は全面に灰黄色の釉をほどこすが、風化・剥落のため薄れている。内底部の目跡は7個に復原されるが露胎となっている。高台畳付部は露胎をなし、目跡は削り取られている。9も同様に施釉するが、濃黄緑色で光沢をもっている。内底部と体部の境には1条の沈線をめぐらす。その内側に白色粘土の目跡を6個残すが、9個に復原できる。高台にも目跡が残るが、個数は不明である。平底の完存する10は軟質に焼成された雑な製品で、体部下位と外底部は淡赤褐色の露胎をなす。灰緑色の釉がほどこされ、細かい貫入がみられる。内外部に各7個の目跡があ

SD2705

	口 径	器 高	底径・高台径
3	11.7	3.3	7.2
4	9.2	1.2	7.3
5	12.2	2.0	8.7
6	14.9	3.0	10.1
7	15.2		
8			6.0
9			7.9
10			7.8
11			5.6
12			5.4
13	12.2		
14	2.6	3.0	2.6

るが、外面のそれは削り取られている。他に約50片出土している。

皿(11・12) とともに越州窯系青磁皿の底部片で、輪状高台のものである。全面に施釉されるが、11が光沢をもつ淡黄茶色の釉で細かな貫入をともなうのに対し、12は暗灰緑色の釉がほどこされる。11の高台畳付部は釉がカキ取られている。12の高台畳付部は目跡4個が残り、5個に復原される。

水注(13) 水注の口縁部片と推定される小片で口径12.2cmに復原される。黄緑色の釉を基調とし、部分的に黒褐釉がほどこされている。細かな貫入をともなう。暗灰色の露胎をなす部分もみられる。

SD2710出土土器(第7図、図版27)

土師器

碗(15) 口径16.1cm、器高5.3cm、高台径7.1cmをはかる。口径・器高にくらべ高台は径・高さともに小さい。底部から大きく外開きに立ち上がる体部は丸味をもって内彎するが、口縁端部近くで外反する。へら切り離しされた外底部には板状圧痕がみられるが、高台貼付時にヨコナデで消されている。体部外面はヨコナデ後にへらミガキされるが、ていねいではない。同様に内面もへらミガキされている。土師器のほかに、越州窯系青磁碗の底部破片が1点出土している。

SE2715出土土器・陶磁器(第8図、図版28)

土師器

高台付皿(1) 口縁部を体部から直線的に外方に引き出し、外底部の外端に垂直状に高さ1.1cmの高台を貼付している。外底部はへら切り離しのみである。他の部分の調整はナデと思われるが、器面の磨滅のため不明瞭である。井戸側中からの出土。

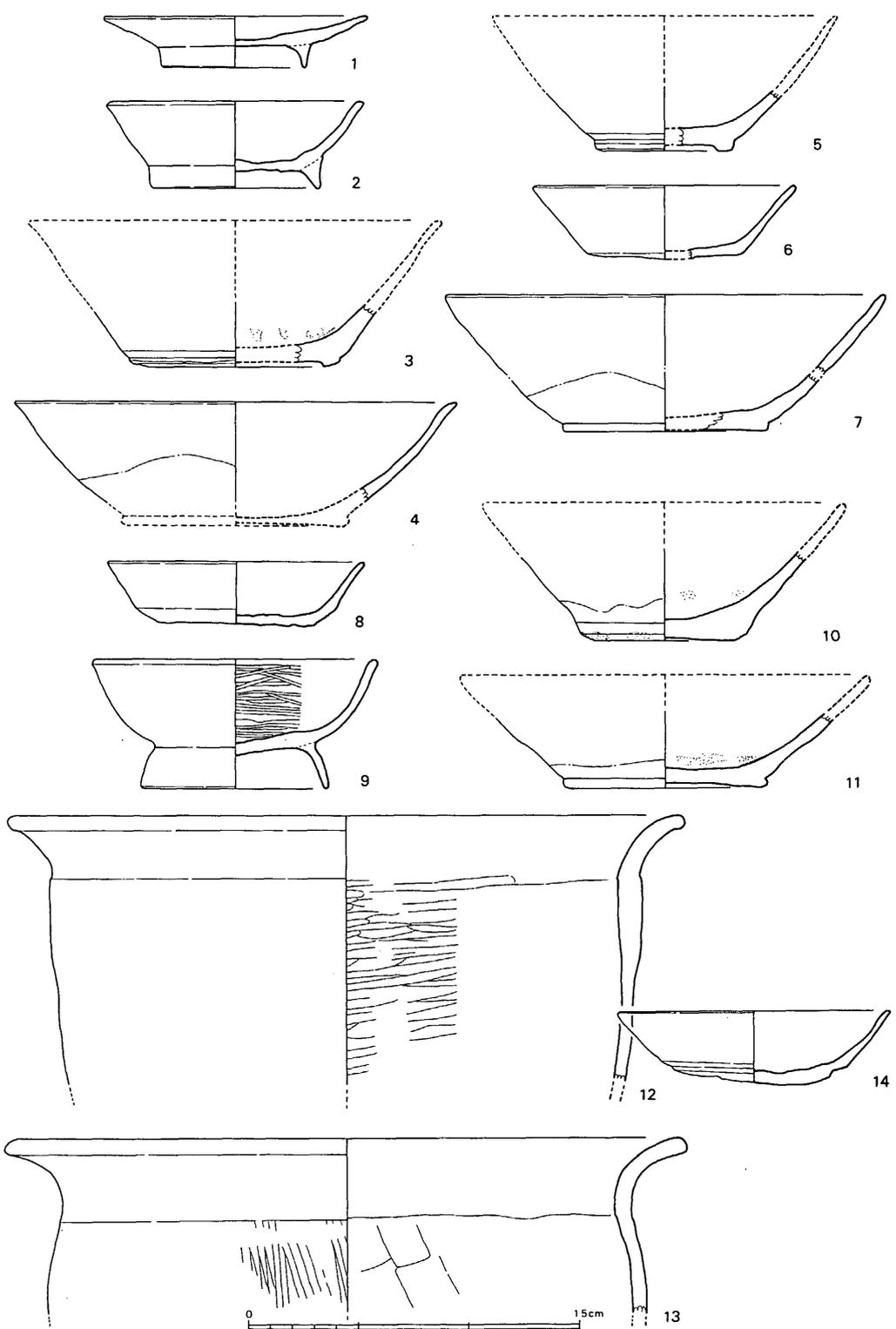
SE 2715

	口径	器高	底径・高台径
1	12.0	2.4	6.6
2	11.6	4.0	7.7
3			9.2
4	20.1		

碗(2) 口径11.6cm、器高4.0cm、高台径7.7cmをはかる小形の有高台の碗である。へら切り離しのままの外底部にはかすかに板状圧痕がみられる。その外端には高さ1.5cmの直立する高台が付けられている。丸味を欠く体部はヨコナデ、内底部はナデでそれぞれ調整されている。井戸側中からの出土。

青磁

碗(3・4) いずれも越州窯系の青磁で、井戸側中から出土した。他に4点の体部小片が井戸側中および掘形埋土から出土している。3は底部片で、暗灰色の胎土の全面に淡黄緑色の釉がほどこされているが、小さくつくられた輪状高台の畳付部は釉・目跡が削り取られている。内底の端部には白色粘土の目跡5個が残る。4は体部の小破片で、暗灰色の胎土に暗黄緑色の釉をほどこしている。胎土には比較的多くの黒粒がみられる。釉には細かな貫入をともなう。体



第8图 SE 2715·2720·2730·2735·2740出土土器·陶磁器実測図

部外面下端は暗赤灰色の露胎をなしている。

SE 2720出土陶磁器(第8図、図版28)

青磁

碗(5) 越州窯系青磁碗の底部片で、他に体部片8点が出土している。灰色の胎土に、淡黄緑色の釉が全面にほどこされているが、高台畳付部はカキ取られている。目跡は内底部と畳付部にみられ、内底には白色粘土の目跡5個を残すが、畳付部のそれは削り取られている。高台径は6.2cmに復原される。井戸埋土中からの出土。

SE 2730出土土器・陶磁器(第8図、図版28)

土師器

杯(6) 井戸埋土出土の杯で、口径11.9cm、器高3.4cm、底径7.1cmに復原される。ヘラ切り離しのままの外底部には板状圧痕がみられる。体部をヨコナデ、内底部をナデで調整している。

青磁

碗(7) 胎土は体部の上半は灰色であるが、下半に向かうにしたがって淡赤灰色となる。やや軟質に焼成されている。ヨコナデで調整された体部には白化粧土の上から暗灰緑色の釉がほどこされているが、剥落が著しい。体部外面の中ほど以下は赤褐色の露胎をなす。この口縁部を含む体部上半片は井戸埋土から出土したが、特徴を一致させ、この底部とみられる破片が付近の土壌から出土しており、底部として図示している。外底部は平坦に回転ヘラ削りされる。体部外面下半も回転ヘラ削りされていて、その下端の約0.4cmを円盤高台状に削り出している。外面から外底部は赤褐色の露胎をなす。内面は暗灰緑色の釉が全面にほどこされているが、ほとんど剥落している。目跡は不明。口径19.9cm、器高6.3cm、底径9.3cmに復原される。ほかに体部片2点が出土している。いずれも井戸埋土中からの出土。

SE 2735出土土器・陶磁器(第8図、図版28)

土師器

杯(8) 口径11.7cm、器高2.8cm、底径7.6cmをはかる。ヘラ切り離しのままの外底部には板状圧痕がみられる。体部・内底部はヨコナデ・ナデでいねいに調整されている。井戸埋土中からの出土。

SE 2735

	口径	器高	底径・高台径
8	11.7	2.8	7.6
9	13.0	5.9	8.5
10			7.5
11			9.3
12	30.6		
13	30.9		

甕(12・13) 口径30.6・30.9cmに復原される甕片で、ともに井戸埋土上層から出土している。いずれもゆるやかに外反する口縁部の内外をヨコナデで仕上げているが、12が体部外面をナデ、内面をヨコ方向にヘラで平滑に仕上げているのに対し、13は体部外面をタテ方向の刷毛目、内面を下から斜上へのヘラ削りの粗い調整で仕上げている。

黒色土器

椀(9) 淡赤褐色を呈するが、内面を黒色に燻した黒色土器A類の椀である。ヘラ切り離された外底の端部に2.1cmと腰高で外に開く高台が付けられている。外底部を含め外面はすべてヨコナデで調整され、内面は細かにヘラミガキされている。井戸埋土上層からの出土。

青磁

椀(10・11) いずれも越州窯系青磁椀の底部片で、井戸埋土上層から出土している。10の胎土は暗灰色であるが、内面から体部外面下半にかけてくすんだ淡黄緑色の釉がほどこされている。それ以下、体部下端から外底部はおおむね赤褐色の露胎をなしている。露胎部分は回転ヘラ削りの痕を残している。内外ともに7個に復原される目跡があるが、外底部のそれはカキ取られている。11も同様の施釉がみられるが、釉調は光沢をもち、細かい貫入がみられる。内底には白色粘土の目跡が残る。体部下端から外底部にかけては淡茶灰色の露胎をなしている。目跡は残らない。円盤高台状をなす。

SE 2740出土土器(第8図、図版28)

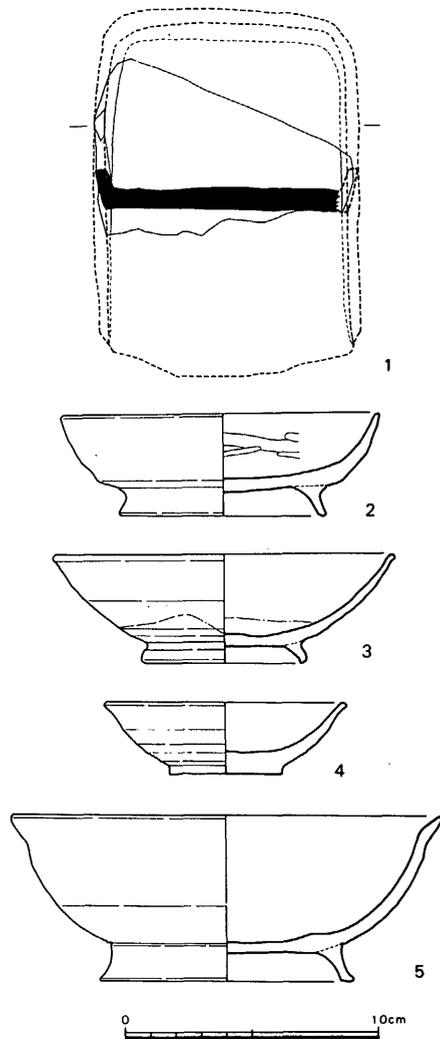
土師器

杯(14) 口径12.3cm、器高3.3cm、底径7.1cmをはかる。内彎気味の体部とわずかに押し出される底部の形から、丸味をもつ杯である。つくりはていねいとはいえず、ややいびつになっている。体部・内底部はヨコナデ・ナデで仕上げられる。口縁端部は外に引き出すようにしているため、平坦気味となっている。外底部はヘラ切り離し後に雑に指でナデている。井戸側中からの出土。

SK 2723出土土器・硯(第9図、図版28)

須恵器

風字硯(1) 砂粒をほとんど含まない精良な胎土を堅緻に焼成した須恵製の硯の小片で、全面をヘラ削りで仕上げている。ヘラ削り後にヘラナデ調整された硯面は使用による磨耗のため平滑になっている。本例と類似した特徴をもつ風字硯が九州大学春日原キャンパス内遺跡で出土しており、



第9図 SK 2723・SX 2747
出土土器・陶磁器実測図

それを参考にして復原図を作成した。

土師器

椀(2) 口径12.6cm、器高4.1cm、高台径8.2cmをはかる椀で、淡灰色を呈する。体部は内彎気味で、口縁端部は部分的に水平をなしている。ヨコナデで仕上げているが、体部内面の一部と内底部はさらにヘラで平滑に研磨されている。外底部はヘラ切り離しされた後にナデ調整を加えているようである。

灰釉陶器

椀(3) 口径13.5cm、器高4.4cm、高台径6.5cmの椀で、完存する底部を中心に3分の1ほどが残る。外底部から体部外面下半にかけてはいねいに回転ヘラ削りし、体部外面上半および内底にいたる内面をていねいにヨコナデで調整した完好の陶器である。灰色の胎土を堅緻に焼成している。体部の内外面には薄く淡黄緑色の釉がほどこされている。内底部および体部外面下端以下は灰色の露胎となっている。

SX2747出土陶磁器(第9図、図版28)

緑釉陶器

椀(4・5) 4は口径9.1cm、器高2.9cm、底径4.5cmをはかる小椀である。外底部は回転糸切り離しのままで、0.3cmの高さの円盤状高台につくられている。体部外面下半は回転ヘラ削り、他の部分はいねいにヨコナデで調整されている。外底部を除いて光沢をもつ淡黄緑色の釉が薄くほどこされ、一部剥落している。5は緑釉陶器と思われる大形の椀であるが、釉のほとんどはすでに剥落している。口径17.1cm、器高6.6cm、高台径10.0cmをはかる。淡暗灰色の精良な胎土を須恵質に焼成しているが、やや軟質である。外底部はヘラ切り離し後にナデ調整し、体部外面下位を回転ヘラ削りで仕上げている。他の部分の調整は器面の磨滅のため明らかでない。

灰褐色土層出土土器・陶磁器(第10図、図版29)

須恵器

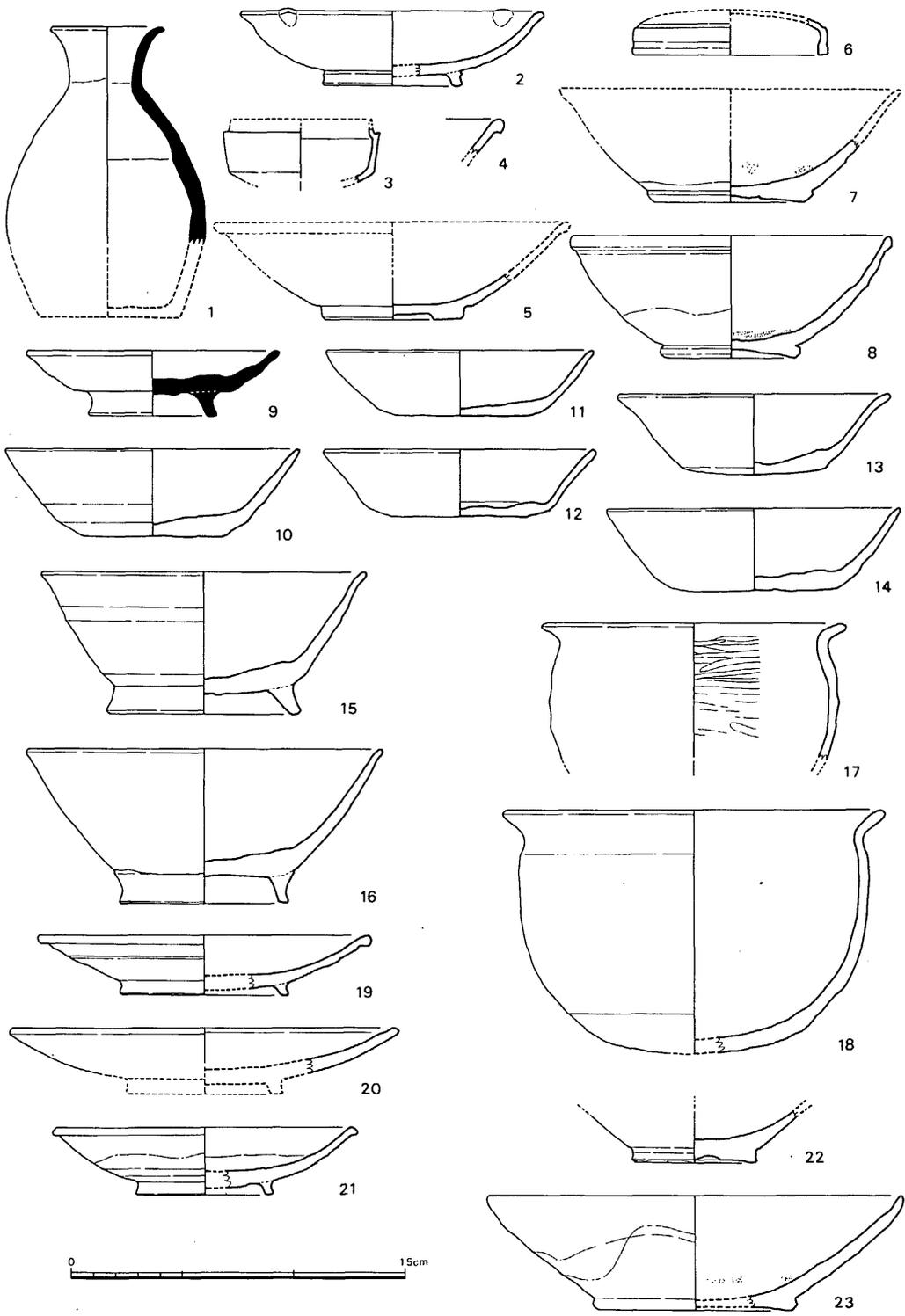
壺(1) 短頸壺の口頸部から体部にかけての破片である。残部についてはすべてヨコナデで仕上げている。

緑釉陶器

高台付皿(2) 2分の1強を欠失している。指押さえによる輪花が1か所残るが、本来は4輪花であったと推測される。外面は底部から口縁端の下位1.1cmまではいねいに回転ヘラ削りし、内面はヨコナデの後にヘラミガキを行なっている。内底部と体部との境には1条の沈線をめぐらす。高台外面から内底にかけて薄く暗黄緑色の釉をほどこすが、他の部分は暗灰色の露胎をなしている。

灰褐色土層

	口径	器高	底径・高台径
1	5.2		
2	13.7	3.4	5.8
3			
4			
5			6.4
6	8.8		
7			7.4
8	14.2	5.6	6.2



第10图 灰褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図

白磁

椀(4・5) ともに小片である。4は口縁部に小さな玉縁をもち、若干黄色味を帯びた白色の釉をほどこしている。胎土は白色を呈する。5は低い高台を有する底部片で、内面および高台外面から上位にはやや空色味を帯びた白色の釉をほどこす。外底部および高台の内・下面は露胎をなし、白色を呈する。

合子(3) 合子の身の小片で、白色の露胎をなす蓋受けの部分を除いて、全面に若干黄色味を帯びた淡黄白色の釉をほどこしている。

青磁

椀(7・8) 8は全形をうかがいうる破片で、口径14.2cm、器高5.6cm、底径6.2cmに復原される。いく分上げ底につくられた円盤状底部から体部が内彎しつつ立ち上がる。口縁部に小さな玉縁をもつ類例の少ない器形をしている。内面および体部上位に淡黄緑色の釉をほどこして細かな貫入がみられるが、ことに外面はいちじるしく剥落している。体部外面下位およびヘラナデで調整された外底部は露胎をなし、淡茶灰色を呈する。内外に目跡を残す。7は底部片で、円盤状で上げ底気味の外底部を回転ヘラ削りし、一部を沈線状に削り込んで高台状に仕上げている。内面および体部外面下半まで暗黄緑色の釉をほどこす。内外面ともに細かな貫入がみられる。それ以下は露胎をなし、淡赤褐色を呈する。外底部の目跡は削り取られているが、内底に残る目跡4個は白色粘土が0.1cmほどの厚さをなしている。

合子(6) 口径8.8cmに復原される合子の蓋の小片で、口縁下端部が灰色の露胎をなすが、他は全面に黄緑色の光沢をもつ釉をほどこしている。

暗褐色土層出土土器・陶磁器・硯(第10・11図、
図版29・30)

須恵器

高台付皿(9) 土師器の高台付皿に似た形態をとり、ヘラ切り離しのままの外底部に裾開きの高台が付く。外底部を除いて、ヨコナデで調整されている。

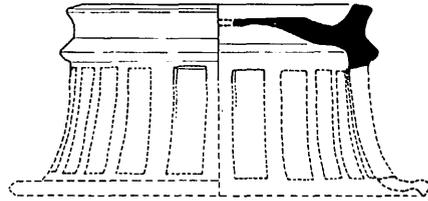
円面硯(第11図) 円面硯の圈台を欠く破片で、2分の1を残す。周縁は直径12.6cmに復原され、口径12.0cm、高さ1.3cmの外堤が外に開きつつ立ち上がる。直径7.0cmに復原される陸部は使用のため平滑になっている。周縁下端の2か所にヘラによる透しの痕跡がみられ、孔数の復原にはいたらないが、方形透しをもつ圈台を推測しうる。

暗褐色土層

	口径	器高	底径・高台径
9	11.4	3.0	5.8
10	13.3	4.0	6.3
11	12.0	3.0	5.8
12	12.2	3.1	6.1
13	12.3	3.7	6.6
14	13.2	3.8	6.0
15	14.7	6.5	8.8
16	16.0	7.0	7.6
17	13.7		
18	17.2	(11.1)	
19	15.0	2.7	7.6
20	17.5		
21	13.7	3.1	6.2
22			5.5
23	18.7	5.2	9.1

土師器

杯(10~14) 外底部はすべてヘラ切り離しのみまで、11・12には板状圧痕がみられる。内底部・体部の調整はいずれも磨滅・剝離がいちじるしく、観察できない。10は他と異なって体部が直線状に立ち上がりつつ外に開き、内面の深みを感じさせる。



第11図 暗褐色土層出土視実測図

碗(15・16) 2点ともに丸味を欠く碗で、外底端部からわずかに内彎気味に立ち上がる体部は、口縁部近くで外方に屈曲をみせる。高台はヘラで切り離された外底の端部に裾広がりに付けられ、安定感をもたらしている。体部は器面が磨滅しているが、ヨコナデの調整がうかがわれる。内底部はナデによる仕上げと思われる。

黒色土器

甕(17・18) 復原口径13.7cm、17.2cmの小形の甕で、ともに内面を黒色に燻した黒色土器A類の例である。17は口縁部および体部外面をヨコナデで仕上げるが、内面はヨコ方向にヘラミガキを行なっている。18は磨滅のため不明瞭だが、体部内面上半にヨコ方向のヘラミガキがみられるなど、17とほぼ同様の調整がほどこされている。底部はヘラ削りされている。体部外面には煤状の炭化物が固着している。

緑釉陶器

高台付皿(19・20) 19は全面に淡黄緑色の釉をほどこしているが、剝落がいちじるしい。土師質で、乳茶色の精良な胎土を用いている。口縁端部は外方に引き出され、玉縁状に丸くおさまられている。その約1cm下に1条の沈線をめぐらしている。20も高台付皿の体部片と推定される。暗灰色の胎土を須恵質に焼成している。全面に暗黄緑色の釉がほどこされている。口縁端部内側を凹帯状にへこませている。

灰釉陶器

高台付皿(21) 3分の1ほどの破片で、外底端部に0.6cmほどの低い高台を付けている。精良な胎土を堅緻に焼成し、露胎は灰色を呈している。体部の内外面上半に淡灰緑色の釉を薄くほどこす。外底部から体部外面下半にかけて回転ヘラ削りされ、それ以外はヨコナデの調整がみられる。内面はきわめて平滑である。

青磁

碗(22・23) 2点ともに越州窯系青磁碗の破片であるが、他に杯底部片1点を含め13点の破片が出土している。22は淡黄緑色の釉を全面にほどこした碗の底部片で、蛇の目高台をもつ。高台の外端はわずかに釉をカキ取っている。焼成はやや軟質で、胎土は淡茶灰色を呈している。高台畳付部に白色粘土の目跡が残り、6個に復原される。23は5分の1ほどの破片で全形をう

かがいうる。外底部にヘラナデ、体部にヨコナデによる調整がみられる。胎土は暗灰色を呈するが、練り方の悪さからか、一部に表裏への剥離寸前の状態がみられる。体部外面の上半から内面全体にかけて淡暗黄灰色の釉が薄くほどこされ、細かな貫入がみられる。釉の溜りが青白色をなす部分があり、味わいを深めている。体部外面下半は淡赤褐色の露胎をなす。内面には白色粘土の目跡が残る。

暗灰色土層出土土器・陶磁器(第12図、図版30)

須恵器

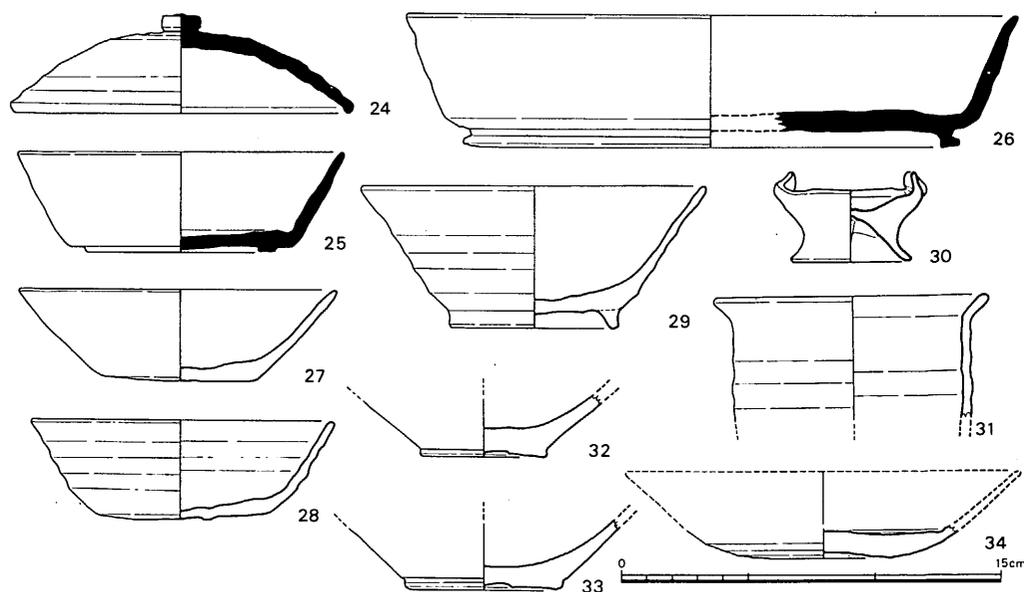
蓋(24) 器高を高くつくられた身受けの返りをもたない杯蓋で、ヘラ切り離しされた外天井部に径1.6cm、高さ0.7cmの小さな撮が付く。体部はヨコナデ、内天井部はナデで仕上げられている。全体に淡灰褐色を呈するが、口縁部付近は重ね焼きのためやや黒色化している。

杯(25) ヘラ切り離しのまま未調整の外底部に高さ0.2cmの低い高台を付けた杯である。直線状に立ち上がる体部は内外面ともにヨコナデされ、内底部はナデで仕上げられている。

盤(26) 口径24.2cm、器高5.3cm、高台径19.6cmに復原される大形の盤で、平坦にヘラ切り離しされた外底部の外端近くに下端を外方に大きく引き出した高台を付けている。体部はヨコナデ、内底部はヨコナデ・ナデで調整されている。内底から体部へ屈曲する部分に淡赤褐色の変

暗灰色土層

	口径	器高	底径・高台径
24	13.6	3.9	
25	13.0	4.0	7.5
26	24.2	5.3	19.6
27	12.6	3.7	6.0
28	12.1	4.0	6.8
29	13.8	5.7	6.8
30	(7.4)	3.6	4.9
31	10.9		
32			5.0
33			6.2
34			5.4



第12図 暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図

色帯がみられるが、重ね焼きのためであろう。

土師器

杯(27・28) とともに外底部はへら切り離しされるが、未調整のままで、板状圧痕がみられる。わずかに内彎しつつ立ち上がる体部は内外面をヨコナデ調整していると思われるが、器面の磨減のため不明瞭である。27の内底部はナデで仕上げられている。

椀(29) 口径13.8cm、器高5.7cm、高台径6.8cmをはかる椀で、外底部の外端に高さ0.7cmの低い高台が付けられている。外底部はへら切り離しのままであるが、他の部分の調整は磨減のため明らかでない。

耳皿(30) 高台付の耳皿で、約半分を欠失している。皿部は径7.4cmほどの円形につくられるが、対向する2か所を押すように折り曲げ、耳皿としている。耳部で口径5.2cm、器高3.6cm、高台径4.9cmに復原される。大きく外に開く高台は約2cmと高くつくられている。内側は中心をえぐるように削りとっている。その他の部分の調整は磨減のため不明瞭である。砂粒を含む胎土を硬く焼成していて、淡赤茶～赤黄色を呈する。暗灰色土層からは類似した耳皿が他にも1点出土しているが、それには中心部に穿孔がみられる。

黒色土器

甕(31) 口径10.9cmに復原される小形の甕で、内面を黒色に燻す黒色土器A類に分類されるが、部分的に体部外面も黒変している。器面調整は磨減のため不明瞭である。

青磁

椀(32・33) とともに越州窯系青磁椀の底部片で、蛇の目高台をもつ。全面に淡黄緑色の釉がほどこされ、32には細かな貫入がみられる。高台畳付部の釉は目跡の白色粘土とともにカキ取られている。底部の完存する33の目跡は6個で、32も6～7個に復原できる。内底部には目跡はみられない。他に底部片1点が出土している。

杯(34) 越州窯系青磁杯の底部片である。胎土は淡茶灰色を呈し、全面に淡黄緑色の釉をほどこしているが、細かな貫入がみられる。外底端部の釉はカキ取られ、その内側に白色粘土の目跡が四方につく。外底部・体部は回転へら削りされている。

瓦類(第13図、図版38)

この調査で出土した瓦類は丸・平瓦のほかには軒丸瓦21点、軒平瓦14点、文字瓦63点などである。軒丸瓦では老司II式およびその系統のものが多く、軒平瓦も同様に老司II式が多く10点ある。第13図に示したものは、これまでに3点しか出土しておらず、いずれも小片である。今回出土したものは約2分の1が残っており、文様の構成から均正唐草文と考えられる。中心部分が一部欠失しているため中心飾は明確ではないが双曲線文と推定される。上外区、下外区にはまばらに珠文を配しているが、内区と外区の間を区画する界線はない。顎は段顎で、顎面には縦位の縄目の叩きが残っている。文字瓦には「平井瓦屋」、「平井瓦」、「平井」、「佐」、「賀茂」が

ある。このうち平井瓦、平井、佐については書体などから数種類に細分できる。

木製品(第14図、図版38)

SE2720の井戸側中から出土した木製の蓋で、全面に黒漆が塗られている。保存状態はきわめて良好である。外天井部に低い段を形成し、算盤玉状の撮はシャープにつくられている。口縁端部を欠失するが、口径10.5cm、器高3.2cmに復原できる。

石製品(図版38)

SD2705上層出土の5点を含め滑石製石鍋片が8点出土している。図版38は把手付石鍋の口縁部片を再利用した滑石製品である。SD2705上層出土。幅10.7cm、最大長5.3cm、厚さ2.3cmをはかる不定形の体部片の外面上端に、幅3.5cm、長さ3.7cm、高さ3.0cmの方形把手が削り出されている。把手の上面は二次的に加工され、外から2.5cmほどを約1cm削り取って段状にし、上面から3孔を穿っている。そのうちの1孔は下面に貫通している。

下面からも浅く1孔が穿たれ、さらに体部切損面下端にも1孔を穿つが、貫通していない。用途不明の滑石製品である。

鉄滓(図版38)

SD2680・2700・2705や各層位から鉄滓が出土している。保土穴SX2751などの存在からみて、この付近で簡単な小鍛冶が行なわれていたのであろう。図版の上左の1点は鉄錆に覆われているが、長さ9.1cm、幅5.5cm、厚さ1.0cmほどの不定形鉄板である。図版の下端部がわずかに肥厚するが、おおむね平板をなす。刃部はみられない。形状からみて、加工以前の鉄素材と思われる。

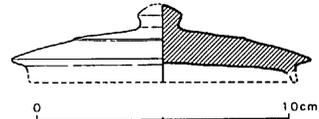
小結

第94次調査の目的は昨年度の第92次調査でその東肩の一部を検出したSD2680の確認にあった。調査の結果、東側に比べSD2680の西側には建物の存在を示す柱穴の数が格段に少なく、この溝が官人居住区の西限であることを示していた。同時に、さらに2条の南北溝を検出し、SD2700、SD2705への時期的な溝の西への移動を把握できた。

SD2680の最下層をなす茶褐色層出土の遺物は7世紀代にさかのぼりうるものを含んでいる。しかし同時に、第92次調査区検出の地鎮遺構SX2670出土の土師器椀に通じる無高台椀、あるいは図示していないが身受けの返りをもたない須恵器杯蓋や水瓶形須恵器細頸壺などの存在から、8世紀前半代とみることができる。したがってこれに近い時期の開削と考えてよい。下層



第13図 軒平瓦拓影・実測図



第14図 SE2720出土木製漆塗蓋実測図

出土の土器もこれに近い時期相を示している。

SD2680は検出部分の北半を溝底近くまで削平されるなど、本来の形状をそれほど良好にはとどめていなかった。比較的残りの良い南半を基準にすると、方位をN0°50'Wにとり、官人居住区と政庁域前面張出部とを限るSD320とは心車で89.20mの距離をはかる。この数値は不丁地区官衙域の東・西を限るSD2340・SD320の心心距離87.30mに近く、ともに大尺の250尺を単位とした可能性がある。これら3条の溝は、時期的な一致もあって、計画的に掘削されたと判断できよう。

SD2680は意図的に埋め立てられるが、上層出土の土器には図示した以外に8世紀末頃のものが含まれていて、その時期を示している。SD2680の西側、心車で4.2mの位置に南北溝SD2700が方位をN2°30'Wにとりながら走る。埋土出土の土器には8世紀代のものを多く含み、10世紀代を下限としている。このようにみると、SD2700はSD2680を西へ4.2m移して掘り直されたと考えてよからう。この場合、注目されるのはSD2680の埋土上につくられたSX2728である。柱間の不揃いから一応掘立柱建物の可能性を指摘するにとどめているが、これを建物とすることができるならば、官人居住区の西への拡大を示すことになり、SD2700をSD2680の西への掘り替えとする根拠の一つとなろう。

その後、溝はさらに西へと移転する。SD2705がそれで、流れが蛇行し、ことに南半は西南へと流れを変えているが、本来は方位をN1°30'Eにとる南北溝として掘削されたものであろう。SD2700とは心車で4.1mの間隔にある。埋土下層出土の土師器や白磁の特徴はこの溝の掘削が11世紀後半代頃であることを示す。また埋土の上層出土の土師器の外底部をみると、へら切り離しに混って糸切り離しのがみられる。つまりへら切りから糸切りへの変換期、12世紀前半代の埋没が推定される。

本次調査区からも井戸を6基検出した。刳抜き井戸側を用いた9世紀中頃～後半のSE2740を古期とし、他はいずれも9世紀後半～10世紀初頭に位置づけうるものである。時期的にみてSD2680の埋没後、SD2700の使用期に相当する。6基の井戸はSD2700の東側1基、西側の5基に分かれる。東側の井戸は官人居住区の西側への拡大にともなうものであろう。ところがその西を限るSD2700のさらに西に位置する井戸の存在は、少なくとも9世紀後半～10世紀初頭に溝の西側にも生活のあったことを意味する。この地区はすでに宅地化が進み、調査に困難がともなうが、今後注意を払う必要があろう。

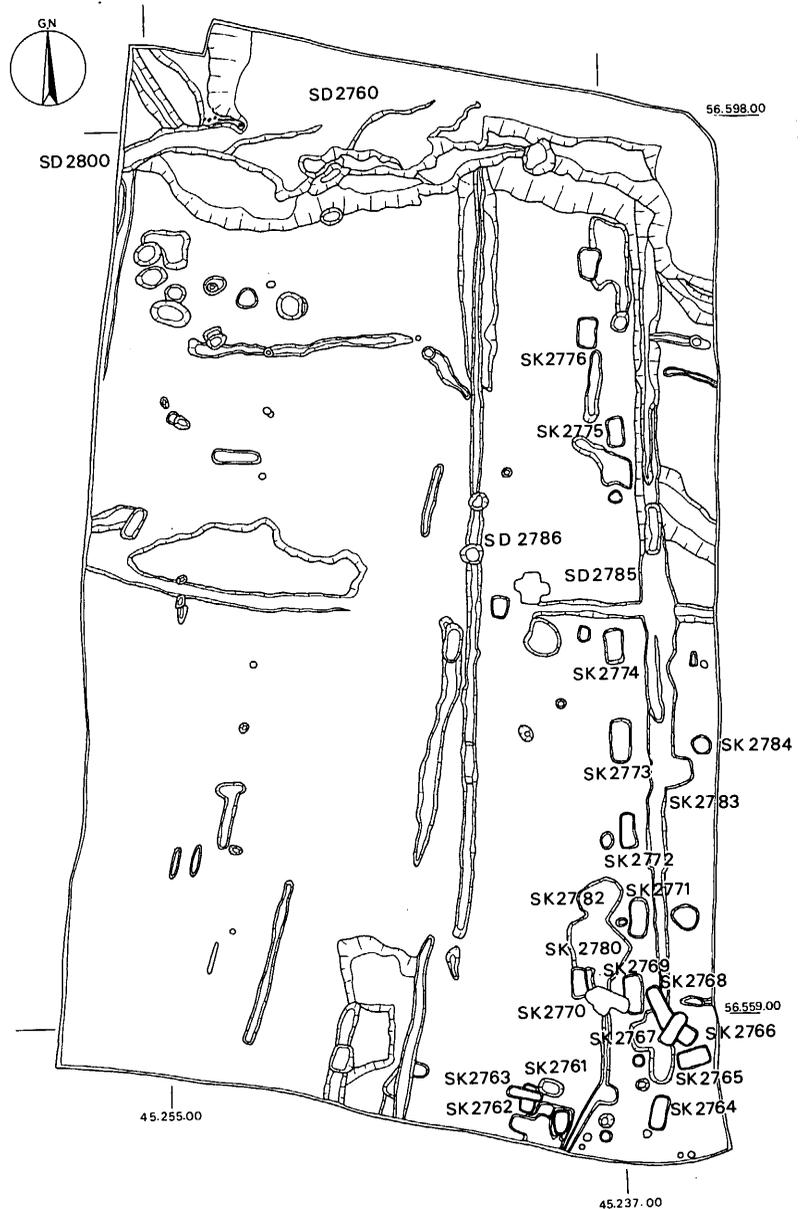
3 第95次調査

本次調査は太宰府市の土地区画整理事業に伴う事前の調査である。調査地域は蔵司跡に比定される丘陵の西南方向にあたり、県道山家-関屋線より約200m南方へ隔った所に位置する。そして条坊復原案の五条四・五坊と六条四・五坊の交叉する個所であるが、大部分は五条四坊にあたる。

これまで、政庁前面地域については土地区画事業に伴って、かなりの面積の発掘調査を実施し、これまで不明であった政庁前面の遺構についてはかなり明瞭になってきた。

過去の調査成果によれば、日吉地区で約12棟分、そ

の西側の不丁地区で29棟分の官衙建物を検出している。これらの建物群は東は四王寺山系から派生した谷の支流により限られ、西は第14・76次調査によって検出した南北溝 SD320によって



第15図 第95次調査遺構配置図

限られていることがほぼ判明している。そして、昨年度(昭和59年度)SD320の西側の地域を第88・92次調査として発掘調査した結果、奈良・平安期にあたる約40棟分の掘立柱建物と井戸15基を検出した。これらの掘立柱建物は先の日吉・不丁地区検出の掘立柱建物の掘形と比較して、掘形が小さく、また円形のものが多いこと、さらに井戸の数が多いことなどの顕著な違いがみられた。このことから、これらの建物群は官衙建物ではなく、官人の居宅の可能性が示唆されるに至った。

今回の調査地は第88・92次調査地の更に約150m程西側に位置しており、これら官人の居住地がいかなる広がりをも有するのか、また条坊復原案の五条四・五坊と六条四・五坊の交叉する地域に推定されていることから、その確認を主要な目的として調査を実施した。

調査の結果、建物等は存在せず、また条坊の遺構を示すものも存在していなかった。地番は太宰府市大字観世音寺字広丸349-1である。調査は昭和60年4月4日から開始し、4月18日に表土および床土除去を終了し、その後北側より若干の灰褐色土層を除去しながら遺構検出を行った。5月29日に写真撮影と実測を終了した。

検出遺構

今回検出した主な遺構は溝3、土壌21である。溝3条のうち1条は弥生期に属する。

遺構面は全体に浅く、東側と北側は床土直下若干の灰褐色土層を除去すると遺構面となり、西・南方に向かってわずかに下降している。遺構が検出される地山は東側と北側では黄白色粘土層であるが、西・南側では茶褐色の砂質土層となる。

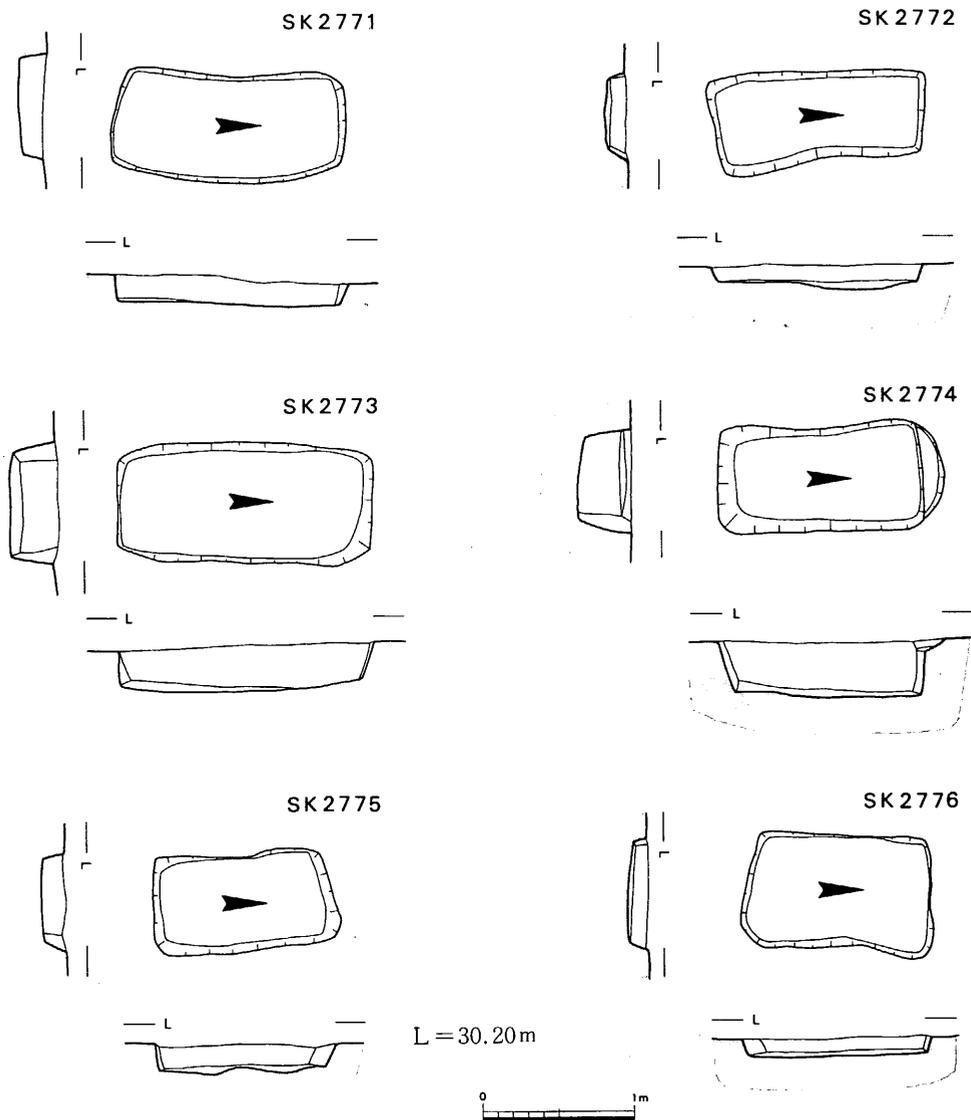
溝

SD2785 発掘区東端近くの南北方向の溝である。この溝は全体に浅く、南に行くに従ってさらに浅くなり、発掘区の南端部付近では削平され消滅している。溝幅は北端部付近の広い所で約1.0m、南端で約0.3mである。深さは0.1m前後であるが、溝底レベルは南側に向ってわずかであるが、低くなっている。溝の方向はほぼ真南北に近い方位を示している。埋土中からは、ごく少量の土器小破片が出土しただけで、時期判定までには至らなかった。

SD2786 SD2785の西側にあつて、発掘区のほぼ中央部を南北に流れる溝である。溝幅は0.4m前後、深さ約0.1mの細い溝である。この溝は先のSD2785同様に発掘区南端付近で、後世の削平によるためか消滅している。方位は座標北に対して約2度20分東偏している。埋土中からは、ごくわずかな土器小破片が出土したのみで、時期を判定するには至らなかった。

土壌

SK2761～2776 発掘区の東辺部で検出した土壌群である。これらの土壌は長さ1.10m～1.55m、幅0.42m～0.80m、深さ0.05m～0.35mの隈丸長方形のプランをもつ土壌群である。とくにSK2769～2776はSD2785の西側に沿ってほぼ同じ方向で並んでいる。またSK2771～2774は心



第16図 SK 2771・2772・2773・2774・2775・2776実測図

心距離にして3.60mの等間で、同一線上に並んでいる。これら土壌の多くは深さ0.10m前後のきわめて浅いものである。土壌中からの出土遺物はSK2773とSK2775から8世紀代に考えられるごく少量の土器細片が出土したのみで、他からは皆無に近いほど出土しなかった。

SK 2780 SK 2769の西側にある不整形で浅い土壌である。

SK 2781 SK 2780の東側にある小土壌で、長径0.40m、深さ約0.10mである。

土壌計測表

遺構番号	長軸	短軸	深さ	長軸方位	遺構番号	長軸	短軸	深さ	長軸方位
SK2761	1.00	0.64	0.10	N70°30' E	SK2769	1.55	0.75	0.10	N 2° 0' E
" 2762	1.40	0.42	0.10	N11°20' W	" 2770	1.20	0.60	0.08	N 1° 0' E
" 2763	1.10	0.60	0.05	N78°10' E	" 2771	1.55	0.70	0.15	N 3°40' W
" 2764	1.38	0.62	0.10	N21°50' W	" 2772	1.40	0.57	0.10	N 3°20' E
" 2765	1.34	0.73	0.10	N72°30' W	" 2773	1.65	0.80	0.30	N 2°40' W
" 2766	不明	0.73	0.05	N59°50' E	" 2774	1.35	0.70	0.35	N 1°30' E
" 2767	1.38	0.60	0.10	N32° 0' W	" 2775	1.20	0.65	0.15	N 3°10' E
" 2768	不明	0.65	0.10	N24°20' E	" 2776	1.25	0.75	0.10	N 4°10' W

出土遺物

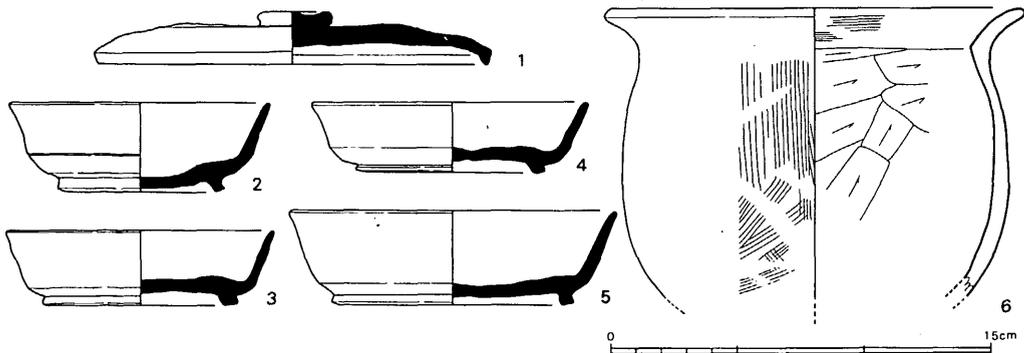
SD2760上層出土土器(第17図、図版31)

ここではSD2760上層出土土器として報告するが、これは溝に伴うものではなく、後世の落ち込み状の遺構に堆積した層位から出土したものである。

須恵器

蓋(1) 口径15.4cm、器高2.1cm。扁平な撮を貼付し、断面三角形状の口縁端部はやや外反し、下端は丸くなる。天井部外面は回転ヘラ削りを施している。内面は平滑で、墨が付着していることから、硯に転用したものであろう。

杯(2~5) いずれも外底部はヘラ切り痕を残し、内底はナデによる調整を施す。2は復原口径10.4cm、器高3.6cm。高台はやや「ハ」の字に開く。3は口径10.6cm、器高3.6cmを測る。4は口径10.9cm、器高2.8cm。5は口径12.9cm、器高4.8cmである。



第17図 SD2760上層出土土器実測図

土師器

甕(6) 復原口径16.6cmを測る。なで肩の体部から口縁部は薄く引き出される。体部の器面調整は外面に上半縦位の刷毛目、下半に斜位の刷毛目を残す。内面は強くへら削りを施すが、屈曲部に横方向のへら削りを行なうことで、強い稜を巡らす。口縁部内外面はヨコナデで調整しており、内面には一部横方向の刷毛目の痕跡がうかがえる。また外面は煤が付着し、一部赤変する。砂粒を多く胎土に混え暗褐色を呈する。

SK 2775出土土器 (第18図、図版31)

須恵器

杯(1) 口径13.2cm、器高3.3cmの無高台の杯である。体部・口縁部はヨコナデで、内底はナデ調整している。外底はへら切りで未調整のままである。胎土中にはやや砂粒を多く含む。

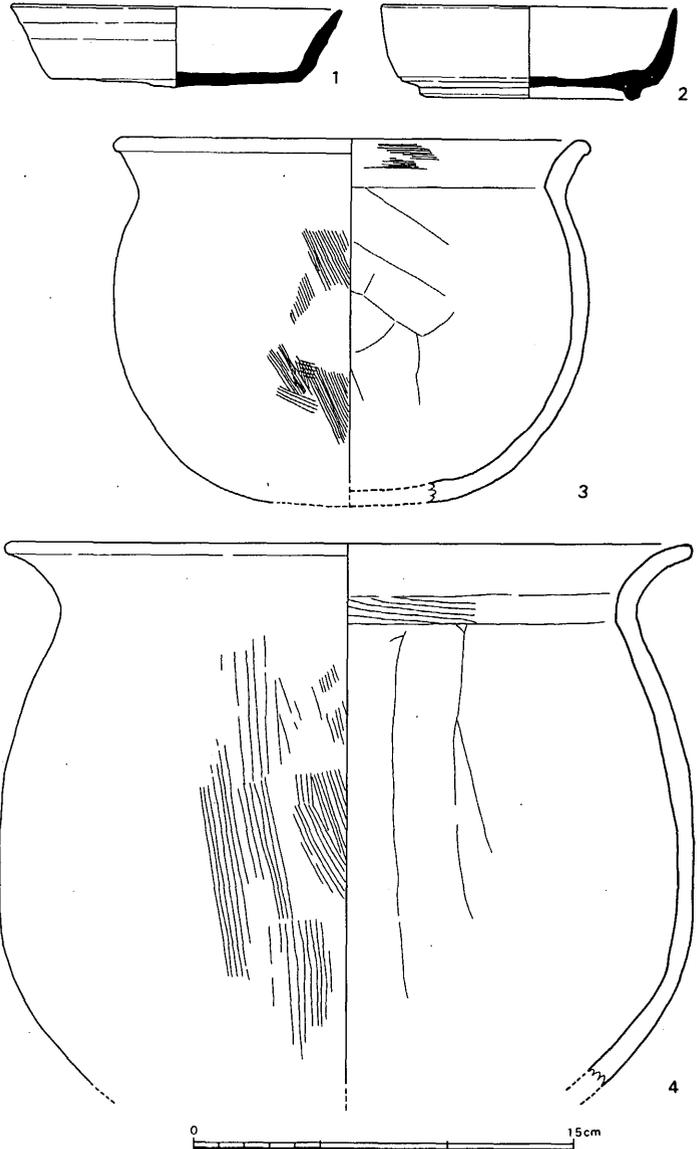
SK 2780出土土器 (第18図、図版31)

須恵器

杯(2) 復原口径12.5cm、器高4.0cm。体部から口縁部は直線的で、低い高台は底部端に貼付される。体部と口縁部はヨコナデで内底はナデ調整している。

土師器

甕(3) 約3分の1が残存しており、復原口径は18.8cm、体部最大径は中位にあり、復原径18.8cm。



第18図 SK 2775・2780・2781出土土器実測図

器表の剥落が著しく、調整は不明瞭である。外面は細かい刷毛目を有する。また、火熱を受けたため赤化し、煤の付着がみられる。内面は口縁部をヨコ方向に刷毛目調整し、他はへら削りしている。

SK2781出土土器(第18図、図版31)

土師器

甕(4) 4分の1程の破片で、復原口径27.2cm、体部最大径は下位にあり、復原径27.4cm。口縁部の内外面と体部の上位は刷毛目調整の後ヨコナデにより消されている。内面の体部と底部はへら削りされている。胎土は雲母と砂粒を含んでいる。外面には火熱を受け、煤が付着している。

灰褐色土層出土土器(第19図、図版32)

須恵器

蓋(1~4) 口径14.0cm~16.4cmで、1~3は口縁部外面を凹状にし、端部をわずかに外反させる。1・4は外天井部をへら削り再調整を行なっているが、2・3は未調整である。いずれも体部の内外面はヨコナデで内天井部はナデである。3・4は胎土中に砂粒を余り含まない。1の内天井部の中心部分に径5.0cm前後の朱の付着がある。

灰褐色土層

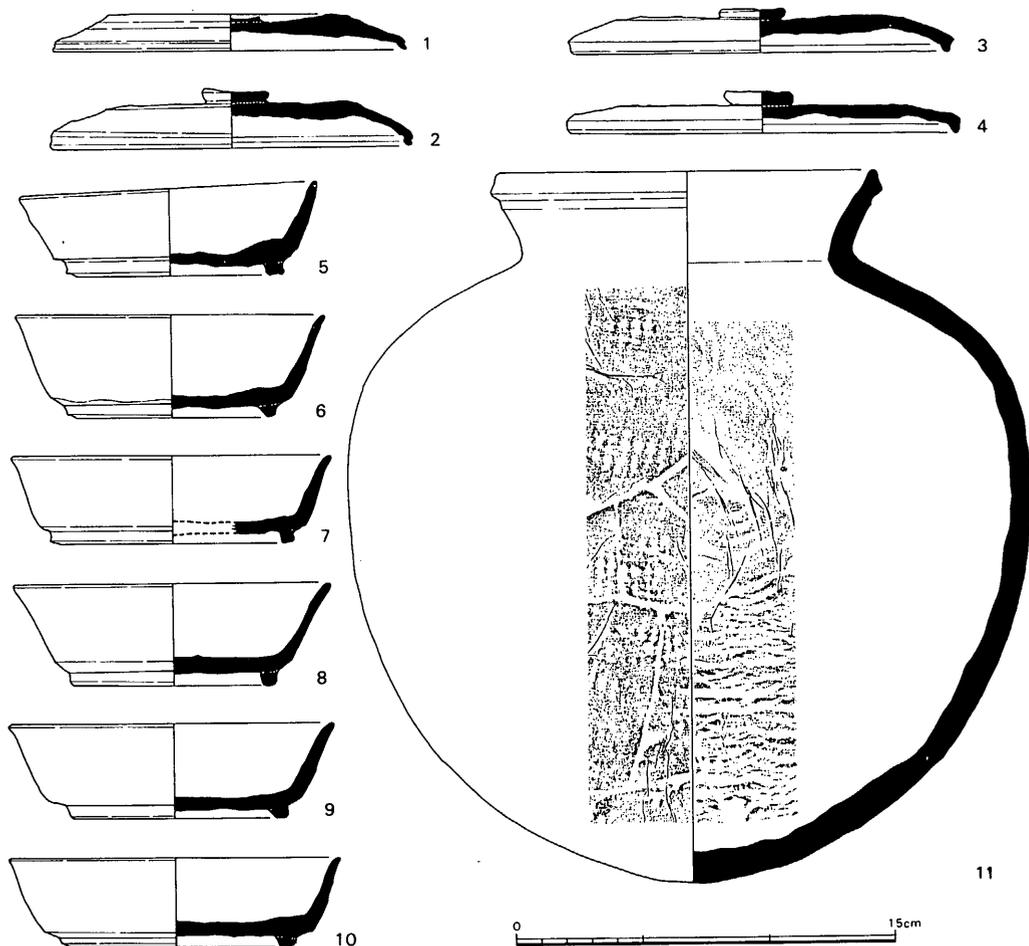
	口径	器高	底径・高台径
1	14.0	1.5	
2	14.3	1.8	
3	15.0	1.8	
4	15.4	1.7	
5	11.7	3.3	8.7
6	12.3	4.1	8.5
7	12.6	3.5	9.6
8	12.6	4.2	8.7
9	12.8	3.8	8.5
10	13.1	3.5	9.2

杯(5~10) 口径11.7cm~13.1cm。器高3.3cm~4.2cmである。5・9・10は焼きひずみが見られ、5はやや著しい。5の体部から口縁部は直線であるが、6~10は口縁部はわずかに外反させている。高台はいずれも低く、底部端近くに貼付している。5の高台量付部はヨコナデにより凹状になっている。いずれも、全体はヨコナデであるが、内底中心部はナデにより、ロクロ目を消している。5の胎土中にはやや砂粒が目立つが、他は比較的精選され、焼成も良好である。

甕(11) 全体の約3分の2残存している。口径15.0cm、器高28.5cmで、体部の最大径は体部中位よりやや上位にあり、27.0cmを測る。外面の肩部は格子の叩きの後ヨコナデ調整し、体部は格子の叩き目を有する。底部は磨滅のためか、叩き目はみられない。内面は波状文の叩き目を有する。肩部は不明瞭であるが、叩き後ヨコナデの可能性はある。

瓦類

この調査で出土した瓦類は若干の丸・平瓦のほか、軒丸瓦3点、軒平瓦2点のみで量的にはきわめて少い。軒丸瓦は鴻臚館式と老司II式、軒平瓦は老司II式で、いずれも小片である。



第19図 灰褐色土層出土土器実測図

弥生時代の遺構・遺物

溝

SD2760 発掘区北端部で検出した弥生後期終末～古墳初頭の溝である。この溝はやや蛇行気味であるが、ほぼ東西方向に流路をとっている。今回検出したのは南側の溝肩のみで、溝の幅など全体の規模については発掘区外へ広がっているため明らかにできなかった。溝底から肩への立ち上がりは流れにより決られ凹凸が著しく、不整形となっている。この溝は発掘区外の東・西にさらに延びており、発掘区の西端部では第96次調査検出のSD2800と連続する溝の東端を検出した。ここには杭列と箭状のものがみられるが、残存状況は良好でない。この溝の上層では浅い落ち込みがみられるが、これは本来この溝に伴う遺構ではなく、後世の堆積土で

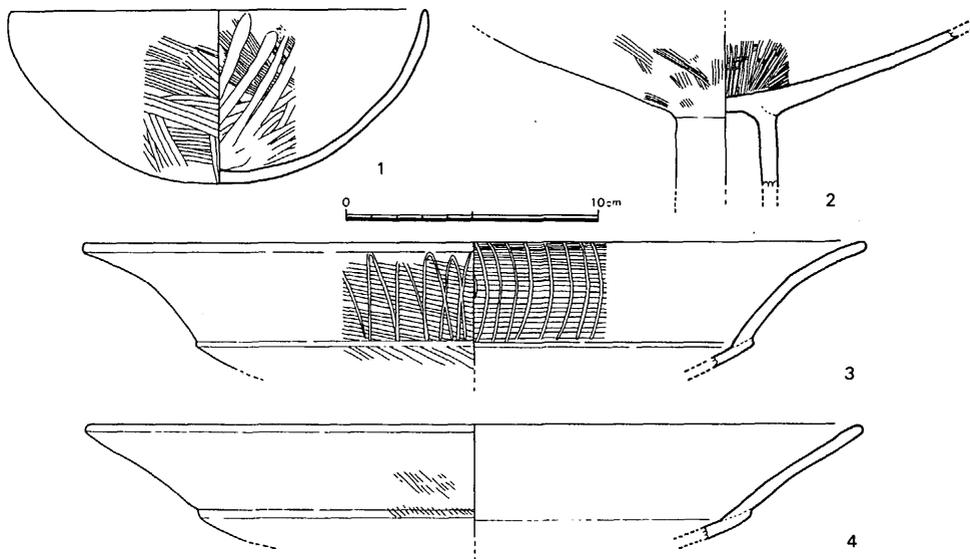
ある(遺物の項では上層出土土器として報告)。

SD2760出土土器(第20図、図版31)

溝の埋土は、無遺物の青灰色粘質土が堆積した上、流れに伴う砂層、粘質土の互層と、その上面に堆積した暗褐色砂質土から形成されている。この互層と砂質土の境から少量の弥生土器が出土した。これらは、左岸付近でまとまって検出され遺存状態も良いことから、流れにより上流から運ばれて来たものではなく、一括投棄された土器群と考えられ、層的にも溝使用期の下限を示す資料であろう。

鉢形土器(1) 口縁部が屈曲せず、半球形の器形をなす鉢形土器で、口縁端部はナデで丸くおさめる。外面に3~4本単位の粗い刷毛目状の擦痕を残し、内面を細かい刷毛目調整後粗いへら研磨で整える。口径16.5cm、器高17.0cmをはかり、胎土に砂粒を混え、淡褐色を呈す。弥生時代後期に通有のものである。

高杯形土器(2~4) 2は杯部上半と脚部下半を欠く。杯部内外面を刷毛目で調整するが、内面にはへら先による細かい研磨が暗文状に施される。脚筒部は挿入して接合される。胎土は砂粒を含むが精良なもので、淡褐色を呈す。3は杯部上半のみの破片資料である。2と同様の下半部から明瞭な段を形成して屈折し、外彎して大きく上方に開く。口径は31.0cmの大形品に復原される。内外の器面を刷毛目で調整し、その後内面に0.5~0.8cm間隔の放射状に、外面には連続する山形文状に暗文風のへら研磨による装飾を施す。精良な胎土を用い、色調は灰褐色を呈す。4も同様の器形をなすが、屈曲後の上半部は直線化が進む。外面には刷毛目を残すが、



第20図 SD 2760下層出土土器実測図

内面の調整は不明である。

これらは別個体であるが、大きく開き浅い杯部と、中空で細長い脚筒部と、緩やかに広がる裾部を特徴とするいわゆる宮の前タイプの高杯に復原され、弥生時代終末期に位置づけられる。

小結

本次調査では、調査前に予測していた建物・井戸等の生活の場を示す顕著な遺構の検出はなかった。先述したように、主たる遺構は溝3条と土壙21基のみである。これらの遺構の性格等をここでは結論として出し得ないが、現段階で想起し得るいくつかの事柄について若干の検討を試み、結びとしたい。

溝SD2760・2785・2786

SD2760は弥生後期に属する溝で、年代・性格等がある程度知られる唯一の遺構である。この溝は、その後継続して実施した第96次調査でその延長部を検出したので、詳細については後述する。次に、SD2785・2786については、埋土の状況や出土遺物がきわめて少量であった点など類似性がみられるが、いずれも年代等決定し難い遺構である。この2条の溝はいずれも南側で削平されたためか痕跡をとどめておらず、さらに南方へ延びるものであるのかは定かでないが、周囲の状況からして南へ延びていたことも十分考えられる。溝の方位をみるとSD2785は座標北に対してほぼ同じ方位を示すが、SD2786はそれより約2°20'ほど東偏している。位置関係をみると、SD2785・2786は政庁中軸線よりそれぞれ414.30m・418.80mの所に位置している。さらに、第94次調査検出の溝との距離はそれぞれ133.80m・140.40mである。条坊復原案による1町は108mで、SD2785・2786はそれぞれ3.8、3.9となり完数とはならない。また、第87次調査検出のSD2340と第14次調査検出のSD320の心心距離は87.30mであり、SD320と第94次調査検出のSD2680の心心距離は約89.20mである。SD2680と今回のSD2785・2786との心心距離は133.80m、140.40mで、先の調査で得られた溝間の距離87.30m、89.20mと大幅な違いがみられる。溝の位置関係については他調査検出の溝との関連もあるので後述することにし、ここでは指摘するに止めたい。

土壙SK2761～2776

形状から木棺墓ないし土壙墓の可能性が考えられるので、それについて検討してみたい。大宰府周辺から検出された古墓として、昨年度(昭和59年度)報告の第88次調査検出の木棺墓SX2600と、昭和50年度に実施された福岡南バイパス建設に伴う事前調査の君畑遺跡(太宰府市大字^(註1)大宰府字君畑)によって、25基の木棺墓および土壙墓の例がある。第88次調査検出のSX2600^(註2)の墓壙は長さ1.80m、幅は約0.45m、深さ0.22mで、墓壙中からは棺蓋上に副葬されていたと考えられる土師器・鉄刀子、鉄鎌、鉛玉各1が出土している。君畑遺跡では計25基の奈良期～平安期の木棺墓・土壙墓が検出されているが、その中で本次調査検出に類似した墓壙の短い例と

して15号墓と17号墓がある。15号墓は長さ1.43m、幅0.90m、深さ0.57m、17号墓は長さ1.31m、幅0.76m、深さ0.48mで、いずれも木棺墓の可能性が考えられている。15号墓からは銅銭(因 聖 園園) 1枚と土師器・白磁・高麗青磁の小片が出土しているが、17号墓からは釘3本が出土したのみで、副葬品はみられない。本次調査検出の土壙は32頁の表に示した通り、最も長いSK2773で長さ1.65m、幅0.80m、深さ0.30mであり、他は1.30m～1.40m前後である。墓壙の規模の点からは、深さを除けば君畑遺跡の第15・17号墓に比較的近似した数値が得られる。墓壙の短い寸詰りのものは鎌倉期以降の土壙墓・木棺墓に多い事が指摘されており、君畑15号墓も中世墓の可能性は十分考えられる。しかしながら、今回検出の土壙群を墓壙と断定し難い大きな理由は、土壙中からは皆無と言ってよい程出土遺物がなく、墓壙として裏付ける資料もなく、また年代判定も困難な点にある。

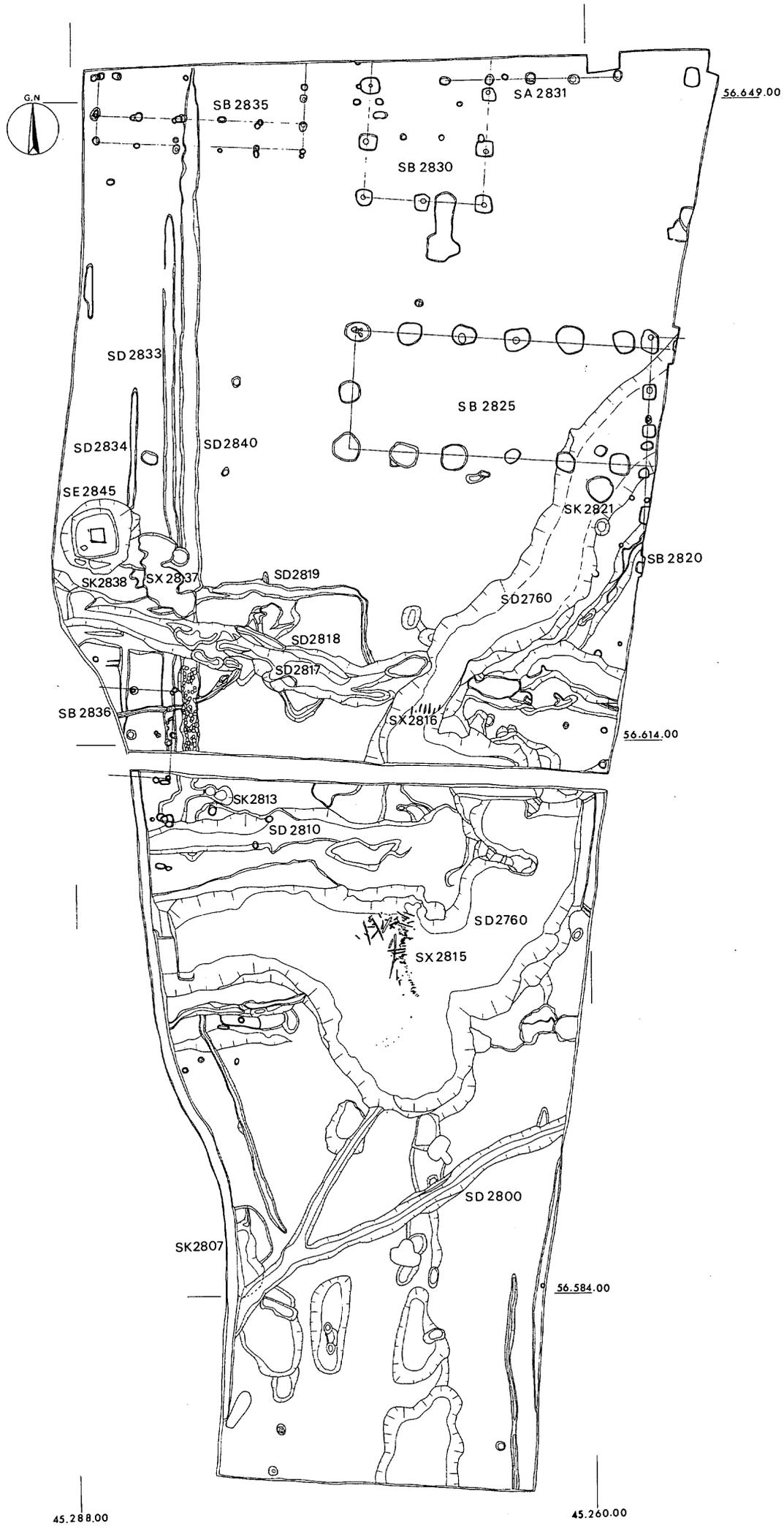
最後に、本調査が後世の削平等による遺構の残存状況や掘立柱建物の柱掘形等の消滅の可能性について検討してみたい。今回検出した土壙・溝の深さがきわめて浅いことから、削平された可能性があることを示唆してきた。本次調査に続いて実施した隣接地の第96次調査では、調査地域の北半分で掘立柱建物4棟を検出した。いま、この建物の柱掘形が検出された遺構面と本調査地の土壙が検出された遺構面の高低差を比較検討すると、本調査地が約0.25m程高くなっている。このことは周辺の現地形から考慮すると、この地が本来高くなっており、西および南へゆるやかに傾斜していた旧地形が復原される。もし、本次調査地域に掘立柱建物が存在していたとすれば、土壙等の残存状態からして、0.40m前後の削平を受けたとしても柱穴の痕跡が残り得る可能性は十分考えられる。また96次調査の南半分検出の東西溝SD2810を境として北側では掘立柱建物、井戸等が存在するが、南側では何ら歴史時代(奈良・平安期)の遺構は存在していない。本調査地はSD2810の南側にあたることから、第96次調査の南半分と同様、掘立柱建物等の検出をみなかったのは後世の削平によるものではなく、当初より存在していなかった可能性が強いと言える。

以上、現段階で考えられる二・三の問題点について検討したが、いずれも結論を得るには至らず、今後に残された部分が多い。

註1 九州歴史資料館『大宰府史跡一昭和59年度発掘調査概報』1985。

註2 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集』1977。

註3 中間研志「大宰府の奥津城」『大宰府古文化論叢 下巻』1983。



第21図 第96次調査遺構配置図

4 第96次調査

第95次調査地域内では建物跡は存していなかったが、本次調査域に北接して筑前国府跡ではないかと推定されている地域があり、第96次調査では、これに関連するような遺構の存否を探ることを主たる目的とした。調査の結果、掘立柱建物5棟および、これを区画すると考えられる溝2本を検出するなど、大きな成果を得ることとなった。

地番は太宰府市大字観世音寺字広丸352-1・3である。なお、鏡山猛氏による条坊復原によると五・六条五坊の地にあたる。

調査域が南北約80m、東西約30mと狭長なため、南北に2分割して調査することとし、まず南半部から開始した。

南半部の調査は、昭和60年6月1日に開始した。表土・床土・灰褐色土層・暗灰色土層を除去後、南から遺構検出を行ない、約1ヵ月後の7月11日にいたり、第95次調査域から西流してくるS D2760の南肩を見い出した。その後、このS D2760をはじめとし、S D2810などの各種遺構を調査し、8月1日に全ての遺構の発掘を完了した。翌日から写真撮影の準備を開始したが、長雨のためなかなか作業は、はかどらずようやく8月8日に空中撮影を含めて写真撮影を終えた。8月9日から遺構測量を始め、20日に終了した。埋め戻しは重機を用い、8月22日に南半部の調査を全て終えた。

北半部は、南半部終了直後に調査を開始し、9月2日に表土除去作業、9月18日に床土除去作業を終了した。同日S B2820・2825、翌日S B2830の柱掘形を検出した。9月26日にS B2835および小区画溝S D2840などの遺構を発見し調査した。このようにして、10月6日全ての遺構検出と発掘を終了し、10月9日に撮影を行なった。遺構実測は10月10日から19日にかけて行ない、10月22・23日に重機にて遺構の埋め戻しを行ない旧状である水田に復した。

以下、主要な遺構について個別に説明する。

検出遺構

検出した主要な遺構は掘立柱建物5棟、柵1条、溝9本、井戸1基それに土塋、ピット群などである。遺構面は花崗岩バイラン土で、その上に暗灰色土層、灰褐色土層が堆積していた。

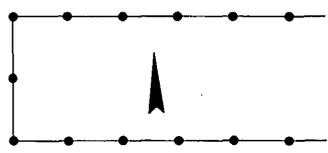
掘立柱建物

南半部と北半部に亘るS B2836を除いて、他は北半部で検出した。

SB2820 調査区東端で西桁行5間分を検出した。柱掘形（最大0.95m×1.35m、最小0.55m×0.60m）のなかに、径約22cmの柱と入れている。北端および北から2番目の柱掘形内には柱根の残片が残っていた。この柱根の心心距離は2.84m（9.5尺）であるが、2～4間目の各柱間は7.5尺、南1間分は北1間分と同様に9.5尺を測る。つまり、北・南1間分が広く、中央

3間分が狭い南北棟建物が想定できる。建物方位はN2°0'Wである。

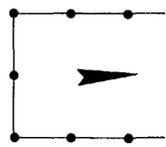
SB 2825 S B 2820と前後関係にある6間以上×2間の東西棟建物である。柱掘形の遺存状態の



の良いものを抽出して測ると、最大は1.45m×1.25m、最小は0.7m×0.9mである。柱位置が判明するのは僅かに1間分だけで、他のほとんどは柱抜き取りのため明らかでない。この柱痕跡がわかる1間分は北側柱列の西から3間目で、その心心距離は約2.9mである。

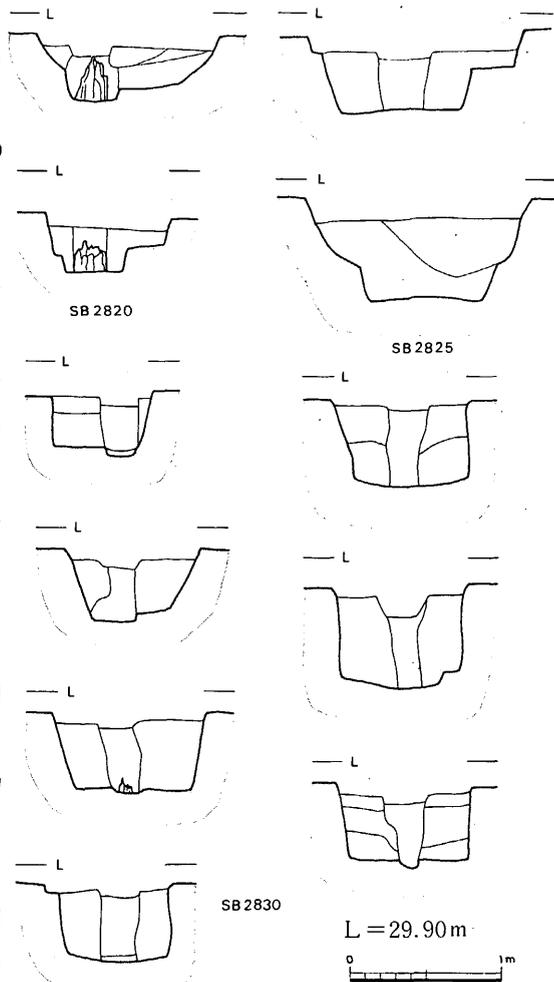
S B 2825はS B 2830と棟筋を直交させ、しかも側柱列が揃うように復原が可能であることから、同一に設計され施行されたと推定できる。この推定が誤りないとなれば、梁行は11尺等間、桁行は両端2間分が広く(10尺)、中央数間分が狭い(9.5尺)建物に復原できよう。

SB 2830 2間以上×2間の南北棟建物



で、方位をN4°30'Wにとる。柱掘形(0.7m~1.0m)中の柱痕跡は全て判明しており、それから柱の大きさを復原すると径15cm~25cm(平均20cm前後)になる。柱掘形に比して、柱自体はさほど大きくはない。桁行2間分は10尺等間、梁行は11尺等間である。この建物の桁行を7間とすると、これまでの政庁前面域検出の建物のうちもっとも北側に位置する第75次調査SB 2000や第87・90次調査S B 2540とほぼ一直線に並ぶことになる。

SB 2835 調査区西北部で検出した5間×2間以上の廂を有する東西棟建物で、N3°0'Wに方位をとっている。建物が発掘区外に延びているため、南北両面廂になるのかどうかは不明である。廂の幅は1.5m(5尺)を測る。桁行は2.25m(7尺)等間、身舎部梁行は2.1m(7尺)である。



第22図 SB 2820・2825・2830柱掘形断面図

身舎部の柱掘形は径0.4m～0.5mに対して、廂部のそれは0.3m内外と比較的小さい。柱掘形中の出土品から9世紀後半に造られたと考えられる。

SB2836 調査区中央西端部で検出した2間×1間以上の総柱建物(略N3°30'W)である。南北・東西の柱間はいずれも等間で2.25m(7尺)を測る。柱掘形中の出土遺物から10世紀代に属し、検出主要遺構中もっとも新しい。

柵

SA2831 調査区北端にて検出した東西方向(N1°30'E)の柵列である。建物は全て東へ振っているのに対して、これだけが逆方向に設けられている。4間分の各柱間は2.4m(8尺)である。柵ではなくて、あるいは桁行4間の東西棟建物の南側柱を調査したのかも知れないが、桁行4間の例は稀であり、一応柵として報告する。

溝

SD2810 調査区南半の北部を西流する東西溝である。深さ0.1mと浅く、また残存状態も悪く幅は1.3m～2.2mと出入りが激しい。SD2840が、この溝と直角に接続する。出土遺物は少く、時期を決め難いが、8世紀後半から9世紀初頭頃には埋没しているようである。掘立柱建物SB2820・2825・2830の南を限る溝として機能していたと思われる。このことは、この溝を境として、南側には古期の建物がないことから十分に首肯できよう。

SD2818 SD2817と重複し、その上層部分を西流する小溝である。SD2819と前後関係を有すると考えられるが、削平のため、直接の手掛りはない。埋土中から多数の土器がまとまって出土している。

SD2819 流路の西側で直角近くに曲折する小溝であるが、両端とも削平のため行方は明らかでない。西に流れる溝の埋土は灰砂である。SD2818と同様に多数の土器が出土した。

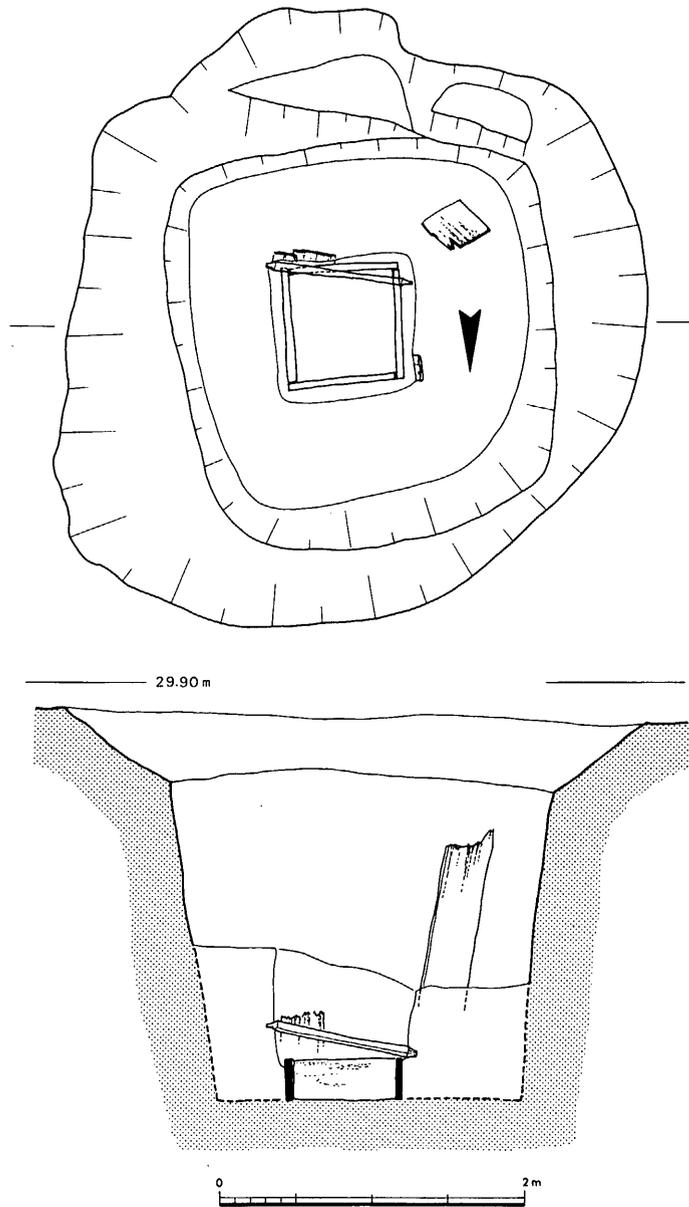
SD2833 SD2840の西側を平行して南流する小溝で、幅0.6m内外、深さ0.2mである。出土遺物は皆無に等しい。

SD2834 SD2833の西側を南流する。SE2845との前後関係は明らかでない。検出範囲だけをみると主軸は若干東へ振っている(N2°15')。

SD2840 調査区北半部の西側を略真南北(N0°20'W)に方位をとり、南流する玉石敷の溝(幅0.8m、深さ0.2m)である。玉石は全て抜き取られているが、その痕跡が溝南端付近に良く残っている。それをみると、玉石の大きさは10cm～30cm位と考えられる。両岸も同様の大きさ玉石で化粧されていたようである。玉石組みの溝といえる。SD2810が南を限る溝である可能性が強くと同様にSD2840は西を区画する施設といえよう。しかし、SD2810に比して規模が小さいことから、大地域を区画するような施設とは考え難く、小区画溝として機能していたと考えられる。

井戸

SE 2845 調査区北半部の西南隅付近で検出した。掘形は2段になっていて、上段の上面は略隅丸方形（南北・東西約3.8m）を呈し、下方へ漏斗状に大きく狭め下段に至る。下段の上面は正方形に近く、各辺約2.6mを測る。遺構検出面から底面までは2.5mである。井戸側は、井籠組みを下段とし、方形縦板組みを上段としている。井籠組みは内法約70cm、高さ28cm、厚さ4cm～5cmを測る。上段の縦板組みは遺存状態が悪く、縦板の一部と横棧一本を検出したにとどまった。横棧の両端に出柄を削り出していることから、これを差し込む隅柱が立っていたと推定できる。井戸埋土は上・下二層に分かれ、上層には中世の遺物を含んでいた。埋め戻した後、長期に亘って沈下し、そこに後世の遺物が堆積したことが知れる。下層から多くの遺物、とりわけ土師器が多数出土した。また、貴重な資料として、滑石製の硯（風字硯）をあげることができる。下層の年代はこれらの遺物から9世紀後半代と考えられ、S B 2835と同一時期になる。



第23図 SE 2845実測図

土壙

SK2807 調査区南半部で検出した土壙で、大半は発掘区外になる。S D 2800と重複するが、水の湧出が激しく、前後関係は不明瞭であった。出土遺物等から本土壙の方が後出すると判断した。

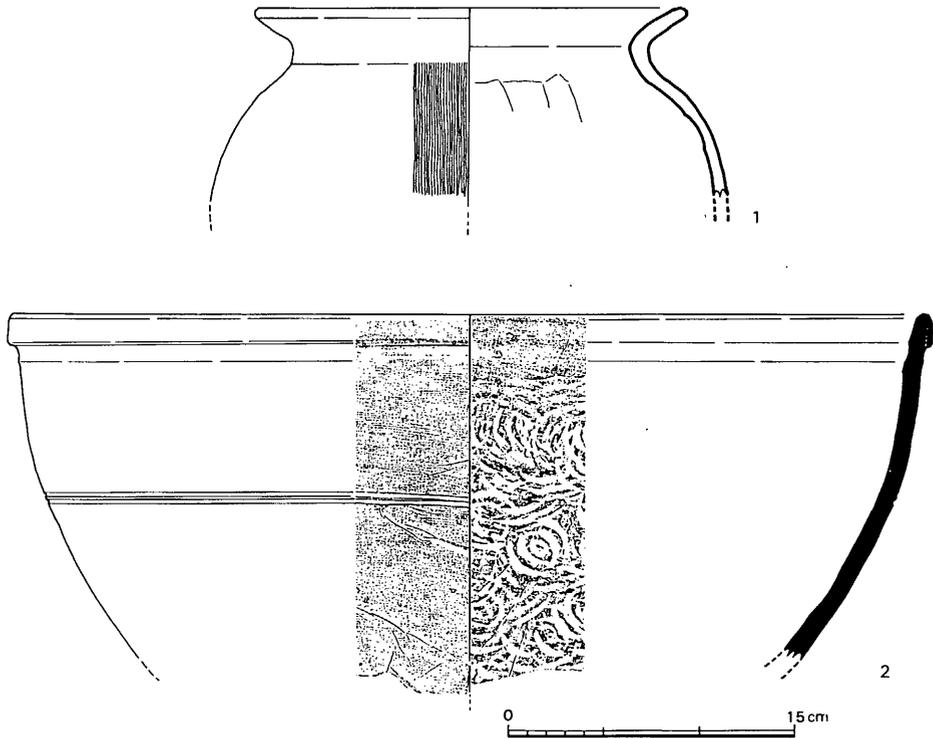
SK2813 S D 2810の北に近接する不正円形の土壙（径約1.0m、深さ0.2m）である。

SK2821 S B 2825の南に位置し、SD2760の埋土に掘り込まれた略円形の土壙（径約1.5m、深さ0.8m）である。埋土中には炭化物、焼土や籾の羽口などを含んでいたことから、付近に製鉄関係の工房があり、それに関連して掘られた土壙と考えられる。

SK2838 SD2818を切って掘られた不正円形の土壙（径1.3m～1.6m、深さ0.6m）である。土壙中からは土器が少なからず出土した。10世紀頃である。

その他の遺構

SK2837 S E 2845の東南方に近接する。この部分にはチョコレート色の粘土層があり、ここで不整形でしかも底面には凹凸が著しい穴を検出した。このような穴は政庁前面域に数多く発見され、全てチョコレート色の粘土層部分に限られていることから粘土取り穴として判断し



第24図 SB2825出土土器実測図

ている。本遺構 S X 2837は南北4.5m、東西3.0m、深さ0.5mと他例に比して規模は小さいが、粘土取り穴として誤りはないと考えられる。

出土遺物

SB2825出土土器（第24図）

検出柱掘形のうち抜き取りを受けていないのは僅かに1個だけであったが、出土した遺物は少ない。

土師器

甕（1） 口径22.7cmに復原が可能な破片である。直立ぎみの頸部と大きく膨む7世紀後半代の特徴を有する。外面は刷毛目、内面はへら削り調整をしている。柱掘形中から出土。

須恵器

鉢（2） 口径約48cmに復原可能な大鉢の破片である。折り曲げて肥厚させた口縁部から内彎しながら底部へむかう体部とから成る。把手を貼付すると思われるが、この器形には横方向に半環状と縦方向の耳状のものがあり、どちらになるのか明らかでない。体部外面はカキ目調整により叩き目を完全に消去している。内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。7世紀後半から8世紀初頭頃と考えられる。

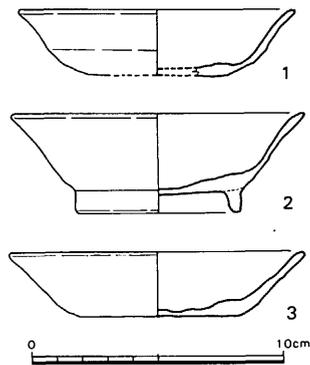
SB2835出土土器（第25図）

柱穴中から多数の資料を得たが、細片化したものが多く、図示できるのは2点だけである。しかし、それは出土品中もっと新期に属する。

土師器

杯（1） 口径10.9cm、器高2.7cm、底径5.4cmである。底部はへら切り離しのままである。板状圧痕は伴わない。

碗（2） 口径11.6cm、器高3.9cm、高台径6.5cmを測る。器面磨滅が著しく調整は明らかでない。1と共に9世紀後半代の特徴を有している。



第25図 SB2835・2836出土土器実測図

SB2836出土土器（第25図）

柱穴中から多数の土器が出土したが、S B 2835と同様に、ほとんどが細片化している。

土師器

杯（3） 口径11.7cm、器高2.6cm、底径6.2cmである。外底部には板状圧痕を伴う。9世紀後半代の土器であるが、図示しなかった土器片のなかに10世紀中頃のものも出土している。

SD2817出土土器（第26図、図版33）

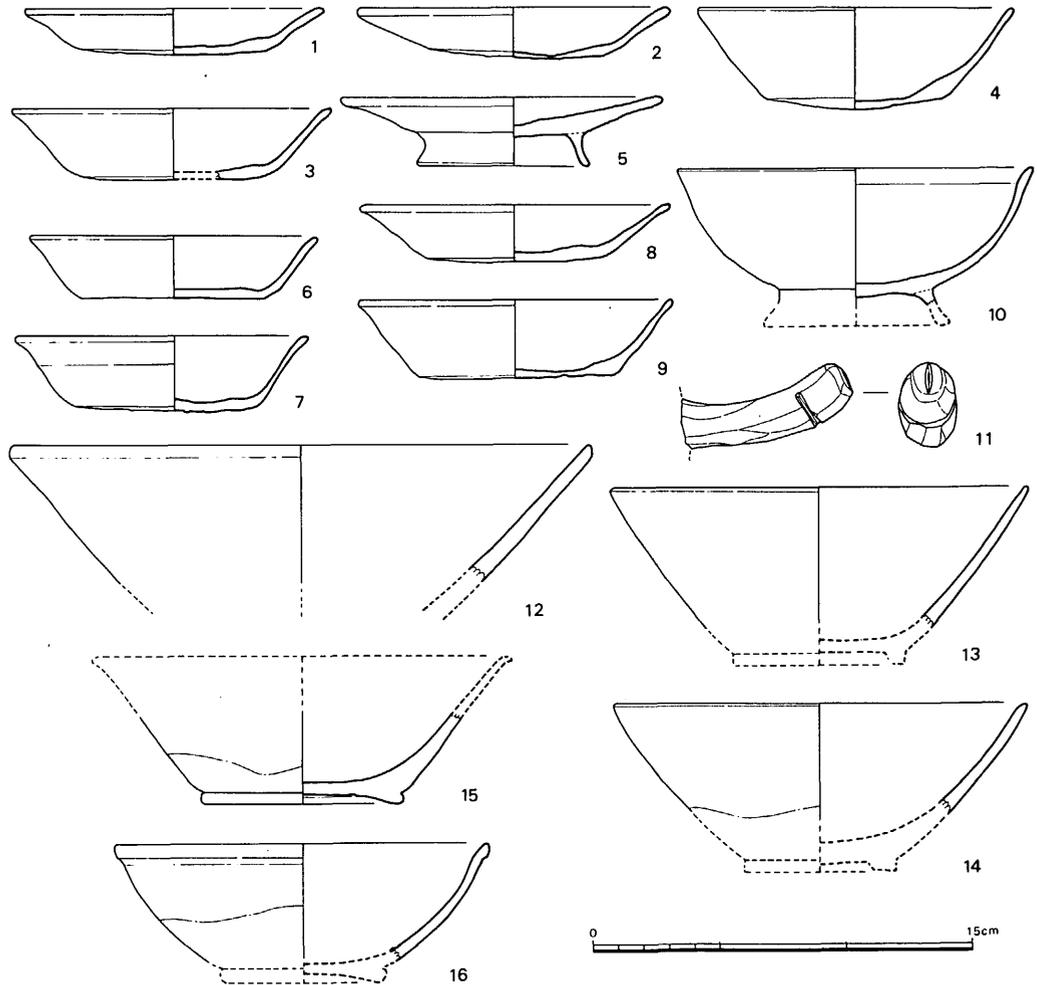
土師器

杯（6～9） 口径11.4cm～12.5cm、器高2.3cm～3.2cmである。7・8には板状圧痕がある。法量から6・7・9と8の2つに分かれ、前者は9世紀後半代、後者は10世紀前後の特徴を有している。

甕（11） 龍頭状にへらで表現した甕の把手である。第38・92次調査出土例に比してリアルさを欠く。大宰府では3例目である。

黒色土器

椀（10） 内面だけを黒色に燻したA類である。内面のへらミガキおよび外面の上位は風化が著しいため明らかでないが、体部下半の回転へら削りは観察できる。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。



第26図 SD2817・2819出土土器・陶磁器実測図

青磁

碗 (13~16) 13以外は釉下に化粧土を有することから、13はⅠ-2類、14はⅡ-1類、15はⅡ-2・a類、16はⅡ-2類に分類される。15の外底部は1条の回転ヘラ削りを入れ、高台風に仕上げている。内底には白色の目跡が6個ある。16は玉縁状の口縁部(折り曲げではない)を有する稀な例である。第94次調査灰褐色土層出土例に同種のものがあり、円盤高台に復原できる。

SD2817・2819

	口 径	器 高	底径・高台径
1	11.8	1.8	7.5
2	12.4	2.0	6.9
3	12.7	2.8	7.1
4	12.5	4.1	7.0
5	12.8	2.8	6.9
6	11.4	2.5	7.2
7	11.7	3.0	7.2
8	12.4	2.3	7.0
9	12.5	3.2	7.7
10	14.0	(6.3)	(7.4)

鉢 (12) 口径23.0cmを測る大形の鉢である。黄緑色の釉は灰濁化し、化粧土の有無については明らかでない。

SD2819出土土器 (第26図、図版33)

数多くの土器が出土したが、破片が小さく図化できたのは僅かである。

土師器

杯 (1~4) 口径11.8cm~12.5cm、器高1.8~4.1cmである。1・2の底部に板状圧痕を伴う。SD2818と同様に9世紀後半代の3・4と10世紀前後の1・2に分かれる。

SD2845

	口 径	器 高	底径・高台径
1	12.3	2.1	7.4
2	12.5	2.4	7.0
3	13.4	1.7	7.5
4	13.7	2.6	8.4
5	14.8	2.4	7.2
6	10.9	2.6	7.1
7	11.2	2.9	6.3
8	11.2	3.0	6.7
9	11.3	2.8	6.4
10	12.1	2.8	7.6
11	12.0	4.0	6.6
12	12.9	4.0	8.3
13	12.9	4.4	7.6
14	12.9	4.6	7.4
15	12.9		
16	13.3		
17	13.3	4.7	7.5
18	13.6	4.3	7.4
19	14.2	5.7	8.2
21	23.5		
22	14.1	6.1	8.7
23	24.2	12.5	12.0
24			8.8
25	18.4	6.9	9.2
26			9.2

高台付皿 (5) 口径12.8cm、器高4.1cmである。皿部の口径が小さい器形であることから杯1・2に伴うと考えられる。

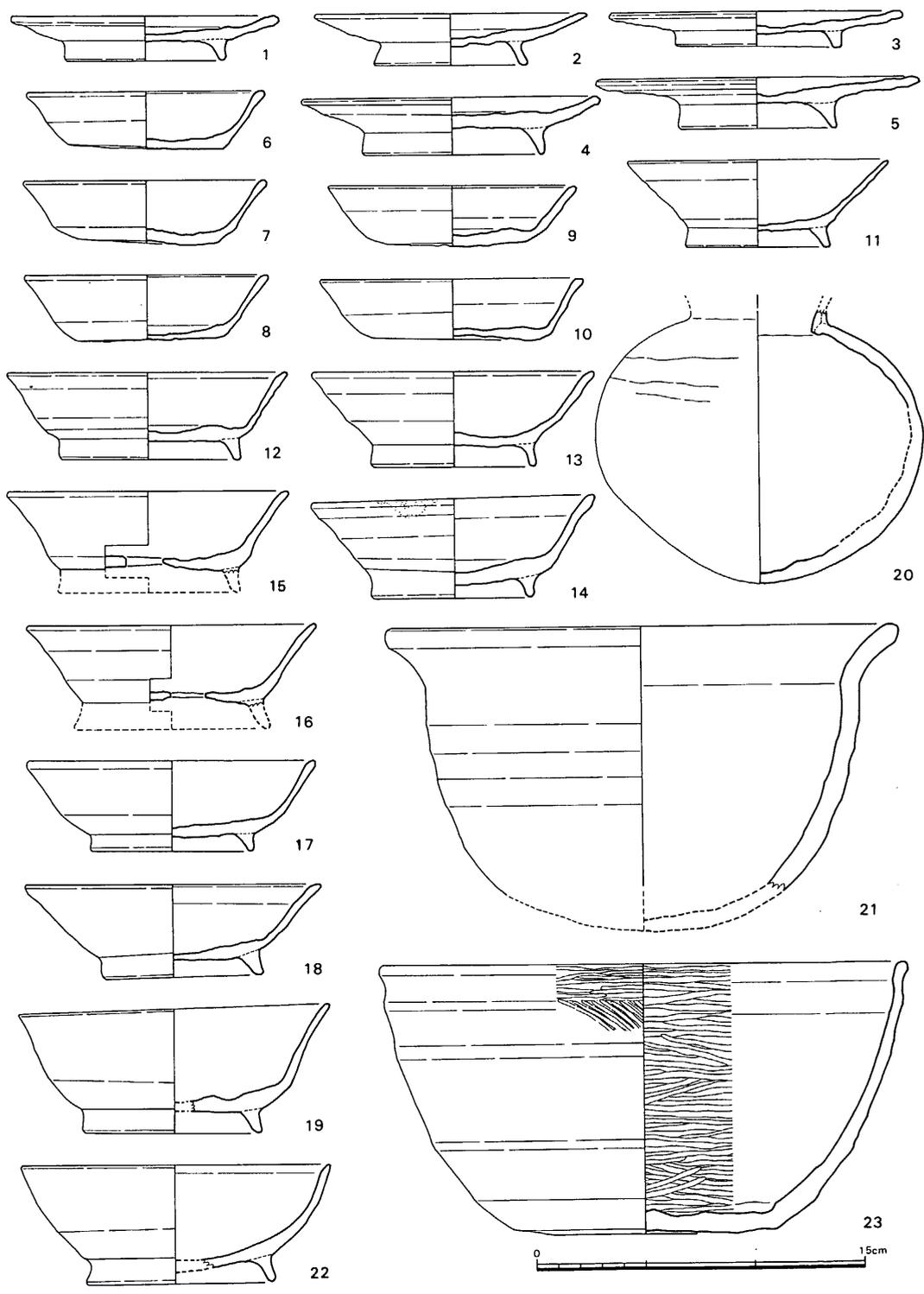
SE2845出土土器・陶磁器 (第27・28図、図版34・35)

中世の土器を出土した上層を除いて、数多くの土器・陶磁器の資料を得た。また、この他に木製品・石製品も出土した。

土師器

高台付皿 (1~5) 口径12.3cm~14.8cm、器高1.7cm~2.6cmである。2・3の外底部には板状圧痕を伴う。

杯 (6~10) 口径10.9cm~12.1cm、器高2.4cm~3.0cmである。6・8~10の外底部に板状圧痕がある。



第27图 SE2845出土土器・陶磁器実測図(1)

碗（12～19） 小形（12～18）と大形（19）
 とに分かれる。小形は口径12.9cm～13.6cm、
 器高4.0cm～4.7cm、大形は口径14.2cm、器
 高5.7cmである。小形は体部に若干丸味を
 有するものも含むが、外上方へ直線的に延
 びるのを基本とする。大形は体部下位に屈
 曲部を有し、次の器型への移行を示す資料
 である。15・16の底部に搾孔がある。

壺（20） 球形の胴部と若干尖りぎみの
 底部を有し、胴部最大径は15.1cmを測る。
 粘土紐で成形した後、外面体部下半を下方
 に指ナデし、尖底に仕上げているため、底
 部へ向って粘土のしわがある。上半は横方
 向に指ナデしている。内面は指ナデ調整だ
 けのため、外面と同様に仕上がりは悪い。
 内面一面は黒色を呈している。あるいは燻

しているのかもしれない。胎土は粗く、多くの砂礫を含み、かつまた器表に浮き出ている。焼
 成は良好で、硬質である。

甕（21） 口縁部に最大径があり、復原すると21.9cmになる。外面は横ナデ・ナデ、内面は
 底部から削り上げている。外面には煤が厚く付着している。この時期においては稀有な器形で
 ある。

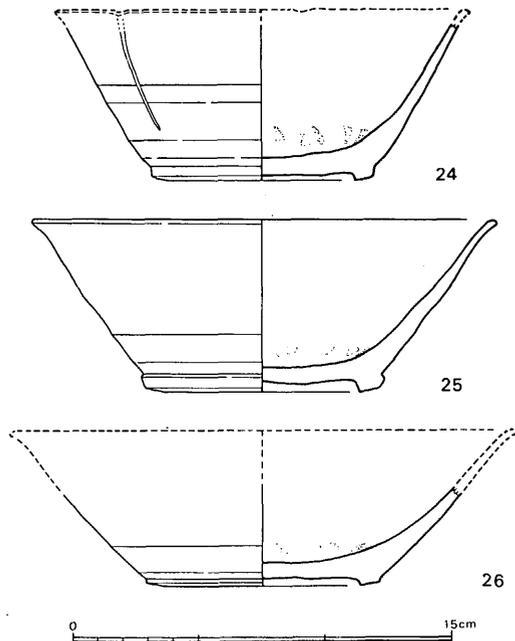
黒色土器

鉢（23） 平底の底部から内彎しながら体部は外上方へ立ち上がり、口縁部近くを強くヨコ
 ナデすることにより、若干の屈曲を生じさせている。成形は、先ず円盤状の底部をつくり、そ
 れを内側から棒状の工具で突き固め、それに粘土紐を巻き上げ、横ナデ・ナデ調整をしている。
 体部外面の最下位を回転へら削りしている他は、あまり丁寧でない横ナデ・ナデ調整・仕上げ
 のため、器面は粘土紐の痕跡を不明瞭ながら残している。内面および外面上位を横方向にへら
 ミガキし、内面だけを黒色に燻している。

青磁

越州窯系青磁である。

碗（24～26） いずれも高台壘付部を除いて、全面施釉しているI類の碗である。24は体部
 中位、25・26は下位から底部にかけて回転へら削りしている。24は輪花碗で、見込み部に24個
 前後、25は18ないし20個の目跡を推定できる。25は目跡部分に漆が付着して残っていることか



第28図 SE2845出土土器・陶磁器実測図(2)

ら漆容器として用いられたと思われる。3点とも釉は均一にかけられ、暗灰色の緻密な胎土を用いている。S K 1800段階に相当し、9世紀後半代の年代が考えられる。

SK 2807出土土器（第29図、図版35）

須恵器

杯（1） 口径11.8cm、器高3.9cmである。受け部は略水平、立ち上がり部は約1.5cmと高く、やや内傾する。内底部には孤状の当具痕がナデ仕上げの下に僅かに残っている。底部外面を回転ヘラ削りをしている。

SK 2813出土土器（第29図、図版35）

土師器

杯（2） 口径11.8cm、器高3.0cmである。器面の摩滅が著しく、調整の観察は不能である。

緑釉

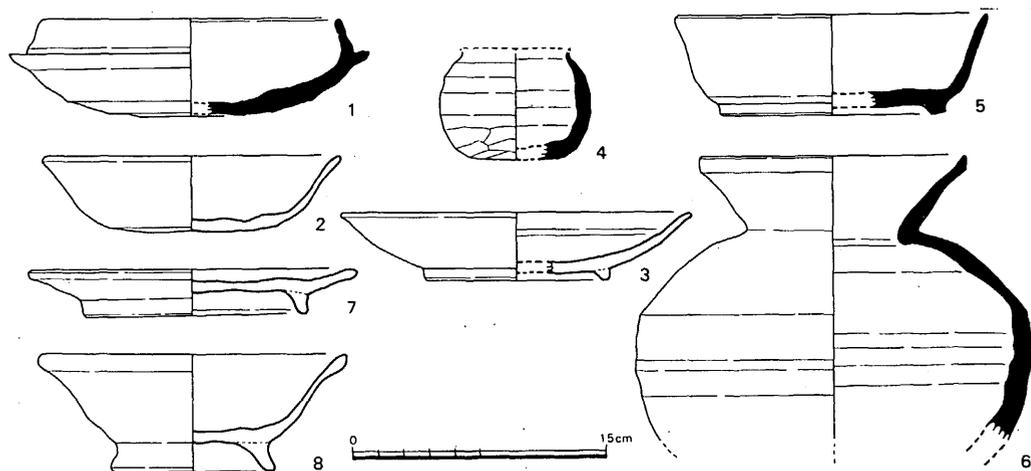
皿（3） 内底見込み部は比較的丁寧なヘラミガキをしている。胎土は極めて精良で、須恵質に焼成されている。

SK 2812出土土器（第29図）

須恵器

杯（5） 口径12.3cm、器高4.0cm、高台径9.0cmである。体部と底部との境が若干不明瞭な古期の特徴を有している。

壺（4・6） 4はミニチュアで、体部下位から底部にかけて手持ヘラ削りをしている。6は外傾する頸部と丸味を有する体部とから成る。体部最大径は15.1cmに復原できる。体部中位以下は回転ヘラ削りをしている。



第29図 SK2807・2813・2821・2838出土土器・陶磁器実測図

SK 2838出土土器（第29図、図版35）

土師器

高台付皿（7） 口径13.0cm、器高1.9cm、高台径9.0cmである。

椀（8） 口径12.2cm、器高4.7cm、高台径6.6cmである。高台付皿と共に9世紀後半代の特徴を有している。

灰褐色土層出土土器・陶磁器（第30図、図版36・37）

須恵器

蓋（1） 口径15.8cm、器高2.7cmである。天井部を回転ヘラ削り調整している。

杯（2・3） 2は口縁部の一部が欠損しており、ここに油煙が付着している。欠損後に灯火器として使用したためであろう。2・3ともに外底部はヘラ切り離しのままである。

鉢（4） 糸切り痕を有する円盤状高台から外上方へ体部は延びる。肩部が屈曲することにより、体部との境を明瞭にしている。体部は強いヨコナデにより凹凸が著しい。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まないが、黒粒を多く含む。10世紀頃に畿内で生産され、それが搬入されたものと考えられる。

硯（5） 口径17.0cmを測る杯蓋形の土器を逆にし、指押えにより不整円形（2.3cm×4.5cm）の凹みをつくり海部とした硯である。この海部を1脚とし、他に2脚を貼付し、3脚の脚部を形成する。貼付した2脚はナデ仕上げされている。外底部はヘラ切り離しのままで末調整である。焼成は堅緻で灰色を呈する。蓋としての器形を考えた時、8世紀中頃の年代を与えることができよう。

土師器

杯（6～11） 口径11.2cm～12.1cmである。6・8・10・11の外底部には板状圧痕がある。11の内底には煤が付着しており、灯火器としての使用を窺がえる。

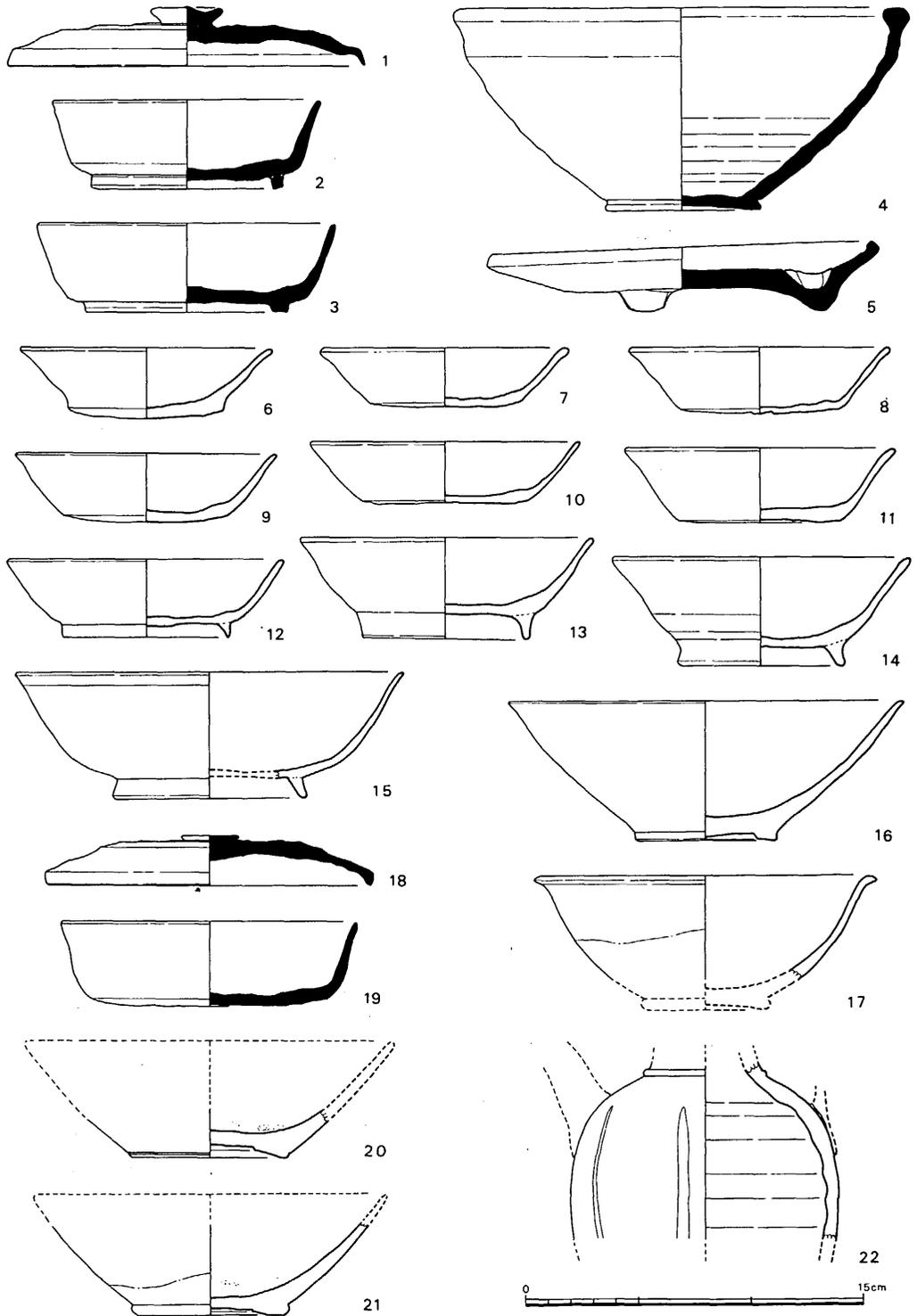
椀（12～14） 3点ともに板状圧痕を伴なう。12は内底に煤が付着している。

緑釉陶器

椀（15） 須恵質に焼成し、細貫入を伴なう淡黄緑色の釉を薄くかけている。須恵質に焼成した際、重ね焼きをしており、釉下にその痕跡が環状に残っている。胎土は精良で、しかも器肉を薄く仕上げた精良な椀である。

灰褐色土層・暗灰色土層

	口径	器高	底径・高台径
1	15.8	2.7	
2	12.0	4.0	8.5
3	13.3	4.0	8.9
4	20.3	9.1	6.9
6	11.2	3.2	6.8
7	11.1	2.6	6.8
8	11.6	3.0	7.0
9	11.6	3.1	7.3
10	12.0	2.8	7.3
11	12.1	3.4	7.2
12	12.2	3.5	7.4
13	13.0	4.5	7.5
14	13.2	4.9	7.5
15	17.2	5.7	8.6
16	17.5	6.2	6.4
18	14.4	2.3	
19	13.2	3.8	10.4



第30图 灰褐色土層・暗灰色土層出土土器・陶磁器実測図

青磁

いずれも越州窯系青磁である。

椀(16・17) 16は輪高台から直線的に外上方へ延びる体部および口縁部を若干外反するよう薄く引き出したタイプ(I-2類)である。17は口縁部を大きく外反させ、釉下に化粧土を有するII-2類のタイプに復原できる。胎土は粗く、黒色の斑点などの不純物を多く含む。

暗灰色土層出土土器・陶磁器(第30図、図版37)

須恵器

蓋(18) 外天井部を回転ヘラ削り調整している。内天井部は磨滅により平滑になっており、その周囲に墨が付着している。硯として使用されたことを窺い知ることができる。胎土中に若干砂粒を含み、暗灰色・灰黒色に堅く焼成されている。

杯(19) 漆容器として使用され、内面に漆が付着している。外底部はヘラ切り離しのままで、再調整はない。胎土は精良で、砂粒は少く、焼成は軟質で、淡灰色を呈する。

青磁

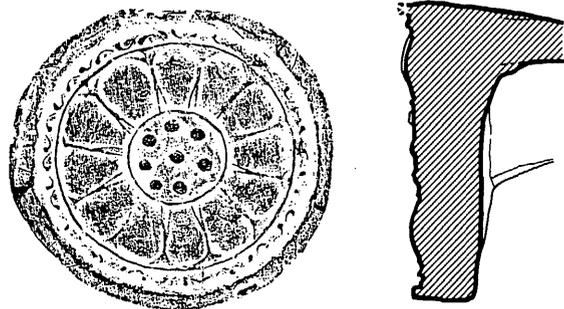
越州窯系青磁である。

椀(20・21) 20は若干幅が狭いが「蛇ノ目」高台の一種であり、I-1類に復原できる。しかし、全面施釉にもかかわらず、内底に重ね焼きの痕跡を残すなど若干の疑問が残る。残存部の体部外面は回転ヘラ削り調整をしている。胎土は精良で、淡茶灰色を呈する。21は円盤高台(II-2類)の内側をヘラ削りにより溝を入れ、「蛇ノ目」高台風に仕上げている。内底面には白色を呈する6個の目跡が観察できる。

水注(22) 瓜胴の水注の破片で、肩部に把手の一部が残っている。胴部の最大径を約12cmに復原できる。淡黄緑色を呈する釉の下に白化粧土をかけている。胎土は粗く、暗灰色に焼成されている。

瓦類(第31図、図版40)

この調査で出土した瓦類は少量の丸・平瓦のほかには軒丸瓦4点、軒平瓦1点および文字瓦5点であり、発掘面積が広い割には瓦の出土量はきわめて少ない。軒丸瓦のうち第31図に示したものは、これまでに小片が数点しか出土しておらず、瓦当部が完全な形で出土したのは、はじめてである。瓦当径15.8cm、単弁十二弁蓮華文で全体的に文様の彫りが浅い。内区は比較的大きな中房に1+7の蓮子を配する。蓮弁の盛り上りはゆるやかである。弁の間に



第31図 SE2845出土軒丸瓦拓影・実測図(1/4)

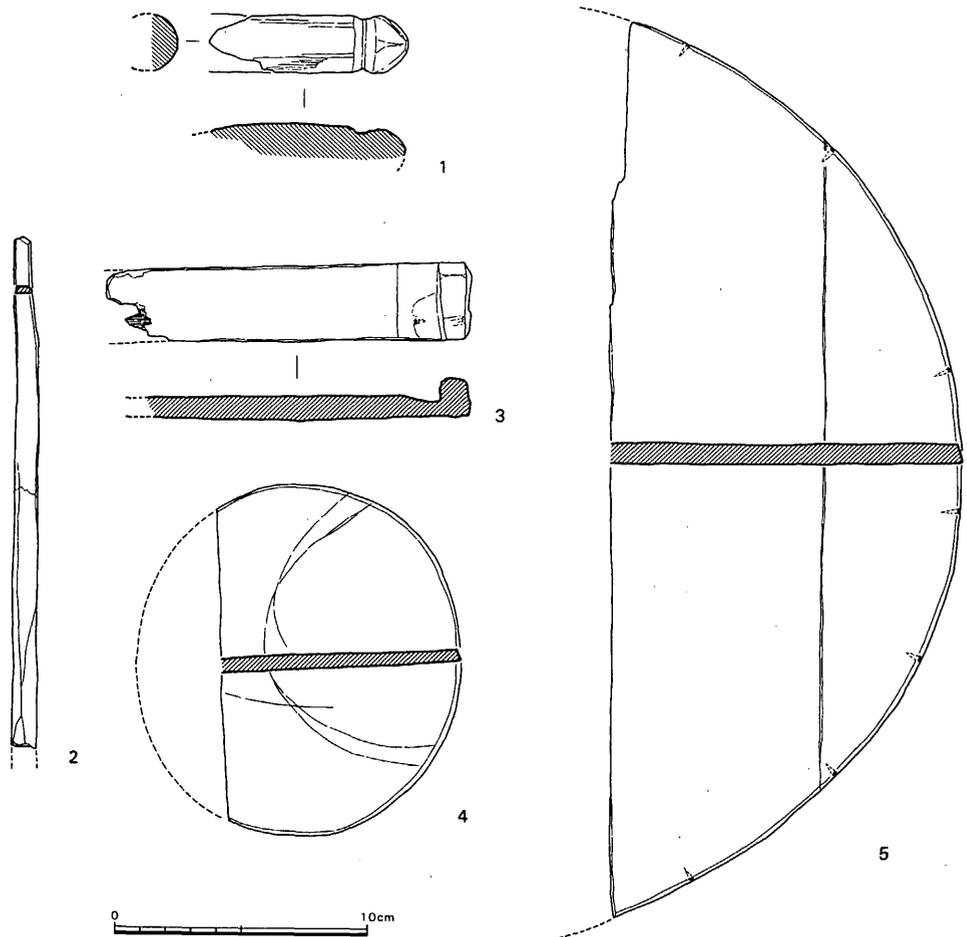
は松葉状の間弁を配する。外区には「おたまじゃくし」状の珠文35個を配する。外縁は直立縁で低い。瓦当厚3.7cmで厚い。瓦当裏面は強いナデによる調整を行っている。丸瓦の取り付けは比較的高い位置の珠文帯付近にある。類例は太宰府市大字内山竈門神社境内の内山寺にある。

木製品（第32図、図版39）

いずれも井戸の中層より出土した。

有頭丸棒（1） 縦に半裁して残る。身を丸く削り、幅2.3cmの棒である。一端の木口には切り込みを巡らし頭部を丸く仕上げる。裏の割面中央に縦位の孔が貫通していたことを示す幅0.6cmの溝が走る。この孔を茎孔とみなすと、工具柄としての用途が考えられる。

とめばり形木製品（2） 一端を欠く。四面を削り、細長い棒とした後、一端を台形状に面取りする。身の中央部に鑄を通し断面を三角形に造る。下端にかけて鑄は消え徐々に細く尖



第32図 SE 2845出土木製品実測図

らす。残存長20.5cm。

切り欠き部材（3） 木口の一端に切り欠きを入れた幅3cmの木札状の板材である。残存長14.5cm、切り欠きの深さ0.6cm。身の中央部の厚さ1cm。

蓋形木板（4） 直径15cm、厚さ0.6cm。正円に近い長円形を呈し、柾目材を用いる。両面を鉋で整え、周縁には法をつけて削る。木釘孔の痕跡がみられないことから蓋板としての用途が考えられる。また裏面には木取りを決める際つけられた墨描きの孤線をとどめている。

曲物底板（6） 約2分の1を欠失する。木取りに板目材を用い、周縁を削って円形に整える。また幾分法をつけた側縁には側板を取り付けるための木釘孔が7孔残存し、木理方向をさけて穿たれている。復原径38cm、厚さ0.8cm。

櫛（図版39-A） 両面から交互に挽き出した横櫛。棟の上縁は水平だが、肩部は彎曲する。棟の断面はアーチ形に丸く整える。歯の付け根は両面から斜めに挽き出すため、山形となる。高さ3.9cm、棟幅1.0cm、挽き通し線からの歯長3.2cm、歯数は2cmあたり22本、つけ材。

この他、二点の木簡が出土したが、墨痕は認められるものの、赤外線テレビによる観察ですら判読しがたく、ここでは報告を省いた。

石製品（第33図、図版40）

勾玉（1） 頭部を欠失した定形式勾玉である。滑石製。S B 2825出土。

紡錘車（2） 径5.2cm、厚さ0.3cm～0.5cmである。片岩製。灰褐色土層出土。

石硯（3） 硯尻部を欠失する。周縁は高く2.5cmを測る。硯部に墨が付着している。滑石製。S E 2845出土。

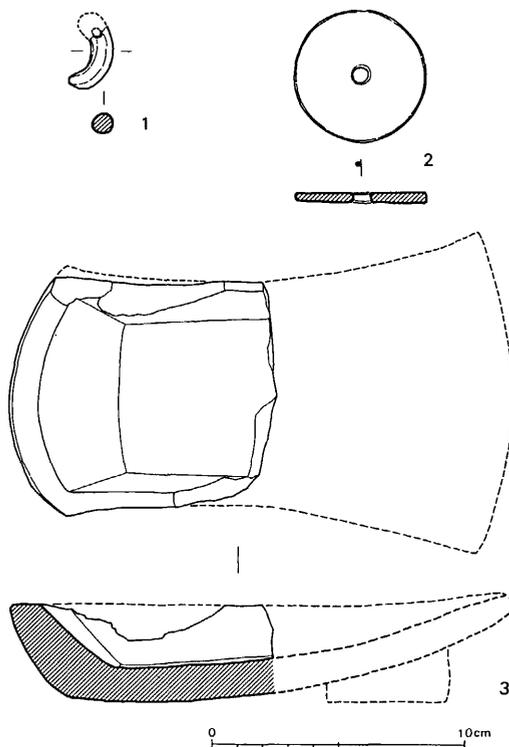
石鍋 縦耳付の石鍋片がS D 2818から出土した。9世紀後半～10世紀前後の資料として貴重な例である。滑石製。

弥生時代の遺構・遺物

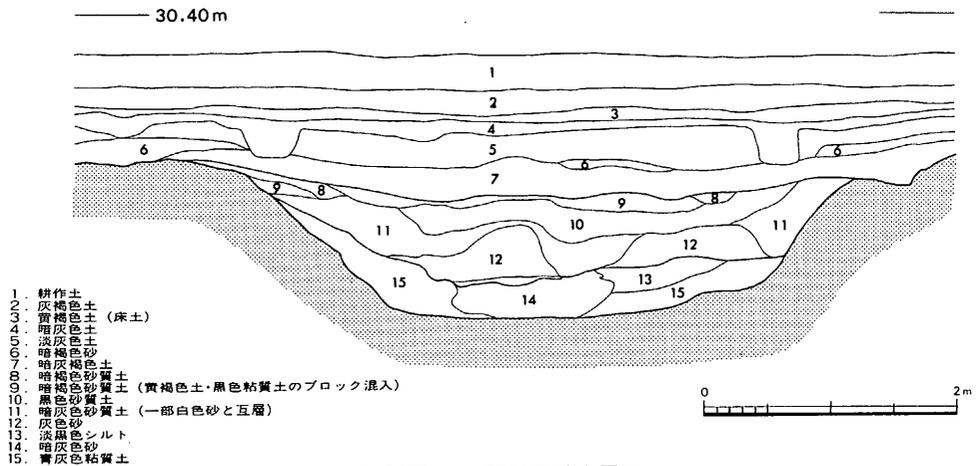
弥生時代の遺構として検出したのは溝とこれに伴う杭列が主要なものである。

溝

SD2760 第95次調査区北部から西流して来る溝と本調査区北半部の西南域を西南方へ向って流れる溝（幅5.0m～6.0m、深



第33図 石製品実測図



第34図 SD2760西壁土層図

さ1.3m)が発掘区中央付近で合流する。この合流点で流れを南に変え、再び西流し始める部分に幅6.0m×8.5m、深さ約1.5mの規模を有する池状の膨みがある。ここに、水の流れをとどめるような杭列を配している。この杭列SX2815は密にしかも堅固に打ち込まれていることからその役割りについて特別に考察する必要があるであろう。このことについては後述する。

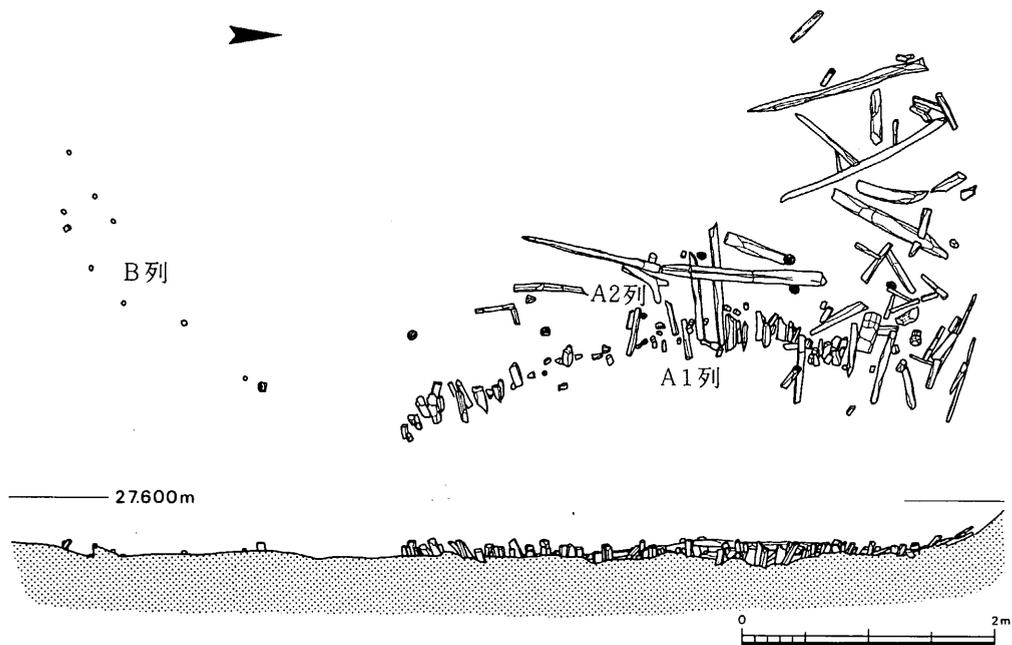
溝埋土(第34図)は上層7、中層8~12、下層13~15と、大きく3つに分かれる。上層は溝埋没後凹みが生じ、そこに堆積したもので、8世紀以後の土器を多数出土した。中層からは若干の弥生時代遺物を含む程度である。下層の13・15は自然遺物を若干含むが、人工遺物は出土していない。16は砂層で、細片化・ローリングを受けた弥生時代土器が少数ではあるが出土した。このような下層の状態から、西南方へ流れる自然流路が当初あり、弥生時代に至り、人々が生活を始め、そこで使用した遺物が流れたと推察できる。

SD2800 調査区南半部で、西南方向へ流れる二又状の溝である。第95次調査検出のSD2760の西南端から西南西への流路(幅1.0m、深さ0.6m)と本次調査検出SD2760の池状の膨み部分の南から南西方向へ流れる流路(幅0.7m、深さ0.5m)が合流して1本となり、南西方向へ流れる。この溝は杭列SX2815の役割りの一つを考える上で重要な手掛りとなろう。

SD2817 SD2760の中層を切って西流する溝(幅1.3m~3.5m、深さ0.6m)である。下層に堆積した砂層から僅かの弥生土器を発見したにとどまったため、明確な時期を決め難いが、SD2760とあまり隔たることはないと考えられる。また、調査区北半を南西方向へ流れる水路は、第95次調査区から流れる水路よりも早く埋っていることから、このSD2817は錯走するSD2760の一支流であった可能性も十分に考えることができよう。

杭列

SX2815 自然木や加工材を用い、流路に対して略直交する杭列である。杭列そのものは蛇



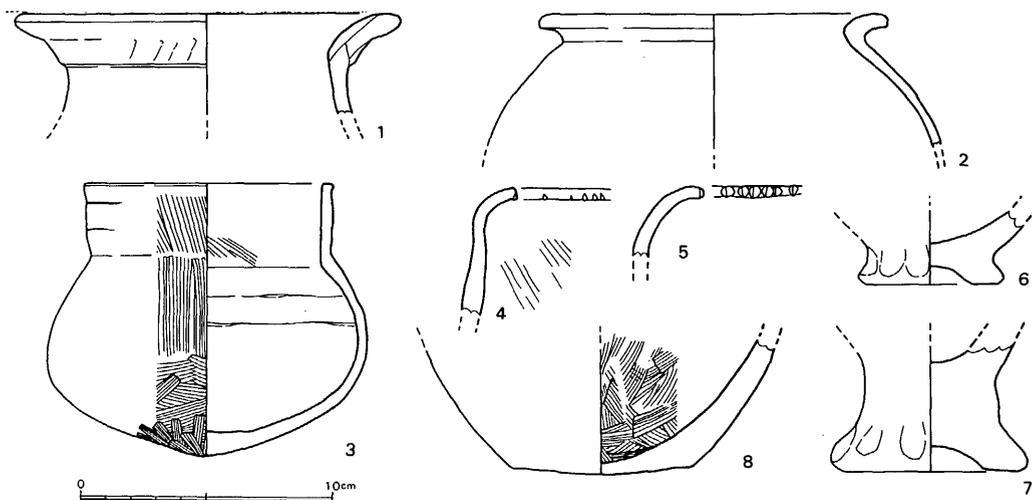
第35図 SX2815実測図

行し、水の流れを直接受ける北半部は密に、それ程でもない南半部は粗に打ち込んでいる。多くの杭のうち原形が知れるのは僅かに1本だけであった。底面に横位で遺存していたこの杭は長さ2.5mを測る。S D 2760のこの部分の深さが1.5mであるので、杭の上部は地上に完全に出ていたことになる。長さ1.0m～1.5mを測る折損した杭も数本同時に出土していることから、全てかどうか明らかでないが、杭の上部が地上に出ていたことは確実であろう。なお、杭の先端は鋭利に削り出されており、鉄利器を使用した可能性は大きい。

SX 2816 S D 2760の流れに略直交し、S D 2817の南岸部に位置する8本の杭列（残存状態の良いもので、長さは0.75m・0.80m）である。下部に「コ」形の仕口のあるものもあり、横位に材をわたしていた可能性もある。S D 2760・2817両溝が重複する部分は埋土が軟弱であったため平面でその前後関係を判断することは困難であった。そこで堤を残して先後関係を判断する方法を採ったため、S X 2816が、S D 2760・2817のどちらに属するか明確にし得なかった。しかし、この杭列の先端はS D 2760の底面まで達してはず、またS D 2817の南岸部に位置することから、S D 2760の埋土だけで岸とするのにはあまりに軟弱であり、杭を打ってSD 2817の護岸としたと考えた。

SD 2760下層出土土器（第36図）

壺形土器（1～3） 1は口縁部の破片資料であるが、口径は類例を参考にして図示した。



第36図 SD2760下層出土土器実測図

口縁部に両側から粘土を貼り付けて肥厚する。外面貼付部には、工具小口で押圧した痕跡が観察できる。この他は磨滅が著しく調整は不明である。胎土は砂粒を多く混え、内外面とも暗灰褐色を呈す。弥生時代前期前半に属す。2は無頸壺形土器で、口径13.8cmに復原できる。口縁部は体部の器肉にくらべて厚い。上端は丸く彎曲し、屈曲部の稜も鈍く新しい様相をもつ。器壁は荒れており内外面とも調整不明。胎土に砂粒が多く、淡褐色を呈す。中期後半～末に位置づけられよう。3は口径9.9cm、器高10.9cmをはかる小型の短頸壺である。口縁部は直立し、球形状の体部は尖り気味の底部へと続く。器面調整は、体部外面を中位からまず頸部に向けて刷毛目を施し、その後底部へ順に斜位の刷毛目を施している。底部付近では中心に収束するように刷毛目調整で粘土を寄せ底部を盛り合っている。内面には板状工具によるナデを行ない、口縁部の内外面を刷毛目調整後ヨコナデで仕上げる。また残存する外面に横走する二条の浅い沈線がみられるが、全周が解らず、加飾なのかあるいは強いヨコナデに伴う砂粒痕なのか不明である。胎土に比較的多くの砂粒を含み、淡茶褐色を呈す。終末～古墳時代初頭。

甕形土器（4～8） 4、5は口縁部のみを残す資料である。4は胴部上半が張り気味で、口縁は如意形をなし、口唇部下端に刻目を入れる。器体外面を斜位の刷毛目で調整し、内面に指頭の引き上げ痕を残す。砂粒を多く含む胎土で、暗灰色を呈す。5の口縁は大きく外反する如意形で、口唇部外面全体にへら状工具による刻目を施文する。器面調整は磨滅し不明であるが、内面には多少の起伏が認められることから、4と同様の指頭による整形方法が考えられる。胎土に砂粒を多く含み、灰褐色を呈す。口縁下部から下位に煤が顕著である。6～8は底部のみを残す。6はやや上げ底気味で小さく台形に開く。外面胴部と底部との境に指圧痕を残す他

は調整不明である。7は6にくらべ厚い底部で、「ハ」の字に開く。同じく外面に指圧痕を残す。ともに砂粒を多く含み暗褐色を呈す。8はやや丸味を有す平底で、外面をナデ、内面を刷毛目で調整する。底径は7.2cmをはかる。胎土は砂粒を多く含み、暗褐色を呈す。

小結

調査区が南北に長く、南・北に分割して調査を実施した。この結果、北半部で掘立柱建物を検出するなど、大きな成果を得ると共に、今後に残す課題を残すこととなった。

第95次調査と同様に歴史時代の遺構と弥生時代の遺構を検出したので、先ず、歴史時代、次いで弥生時代の遺構に関する若干の整理と問題点を提起する。

歴史時代

掘立柱建物5棟と溝2本および井戸1基を対象とする。

建物を主として区分けするとⅠ～Ⅲ期に亘る。

第Ⅰ期 検出した遺構のうち、S B 2825とS B 2830がもっとも古期に属することにより、これを第Ⅰ期にした。両者は棟を直交させ、「L字型」に配置されているが、主屋が判明しないので「L字型」といえるかどうか断じ得ない。S B 2830の柱掘形中からほとんど遺物は出土せず、古期の様相を窺うことができるが、時期を決め難い。S B 2825の大部分の柱は抜き取られており、若干の資料を得た。それを検討すると、もっとも新期に属するのは8世紀後半代であった。このことから8世紀後半代以前に両棟が造営されたと推察できる。

第Ⅱ期 第Ⅰ期のS B 2825と先後関係を有する位置にS B 2820がある。双方の柱掘形が直接に切り合うことはないが、S B 2820の柱掘形中から8世紀後半代の特徴を有する土器が出土しており、それよりも遡上することはない。そこで、S B 2820を第Ⅱ期とした。

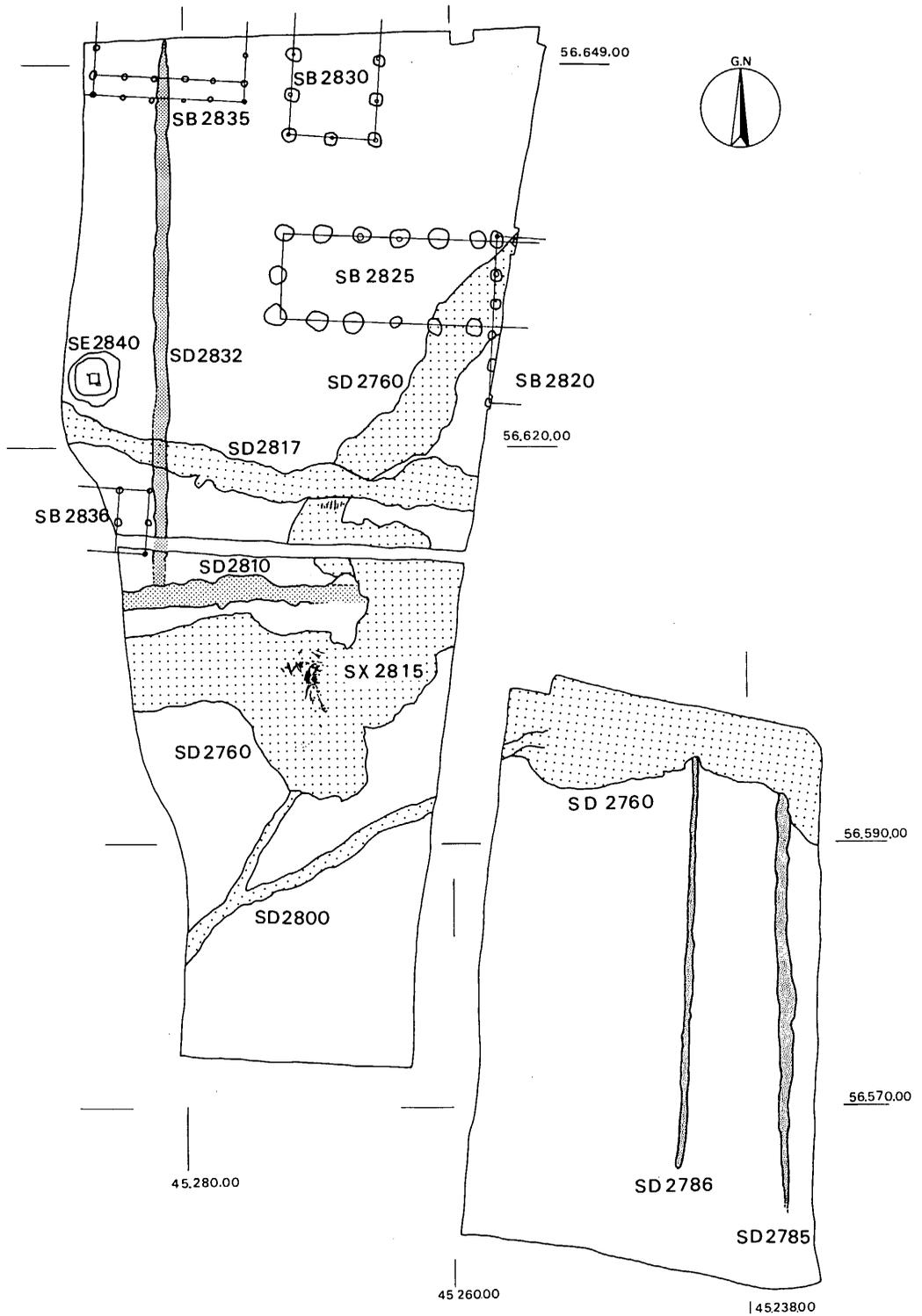
第Ⅰ・Ⅱ期の建物群を囲むようにSD 2810・2840を検出した。先に述べたように、SD 2810はかなりの広さの区画溝と考えられるのに対して、石組溝SD 2840はS B 2820やS B 2820・2830を含む建物群を区画する程度の性格を考えることが可能である。

第Ⅲ期 a・bの2小期に分かれる。

Ⅲ-a期 9世紀後半代に属するS B 2835と井戸S E 2845とから成る。S B 2835はS B 2830と同様に復原条坊の五条大路上に位置することになり、少なくともこの期までは復原位置には大路は存していなかったと指摘できる。

Ⅲ-b期 10世紀中頃と考えられるS B 2836は総柱建物に復原可能であるが、これを従える主屋は調査区内にはなかった。

以上、建物を中心として時期を設定したが、Ⅰ・Ⅱ期までの遺構は官衙として考えてもさほど不都合はないようにも思われる。もし、官衙の建物とすると、川上市太郎氏や鏡山猛氏が「遠賀團印」の出土から筑前国府が設置された地としている場所(水城小学校)が西北方に近接して



第37図 第95次・96次調査遺構配置模式図

あり、その一画を占めているとも考えられる。一方、官人宅と考えた場合は、官人宅と考えた第88・92次調査検出の建物と共通する点（官衙域での最初期の建物は表土を除去した後に柱掘形を掘削するのに対して、官人宅の場合は十分に表土が除去されずになされているため、柱掘形の埋土は濁っている。また、柱の大きさが小さい。）もあり、あるいは官人宅とも考えられる。Ⅲ期では、住居として使用されていることを考えると、第Ⅰ・Ⅱ期の建物は官人宅とした方が良いのかも知れない。

弥生時代

ここではSX2815とSD2760を中心に記述する。

SX2815は自然流路SD2760の本流と北東から蛇行して流れる枝溝とが合流する地点より、約10m西側下流に設けられた杭列である。

杭列は、河川最下層に堆積した黒褐色土層中より検出したが、上面を黒色粘質土が覆っていた。この黒色粘質土は95次調査で、弥生終末～古墳初頭期の土器が得られていることから、この杭列がそれ以前の時期に存在していた事は確実である。

発掘当初は、漁獲施設的一种ではないかとの見方もあった。SD2760に接続するSD2800は、出土遺物はないが、溝埋土の観察では切り合い関係をもたず、同時期の所産である事が確認できている。特にSD2800の位置的あり方は、SX2815と強い関連性をもっている事を示している。したがって、SX2815は、河川に付帯する支水路の性格を担ったSD2800へ導水する為の「堰」としての機能を果していた施設と位置づける事ができよう。

まずSX2815について述べる。平面的には河川の流れ方向に直交して設定された主体となるA杭列と、A杭列南の杭から折れて西南にのびるまばらなB杭列から形成されている。すでに上部は流失し、検出時点で河床より約20cmを残すのみであった。

主体となるA杭列の形状をみると、SD2760東岸（右岸）より始まる杭列は、下流側にアーチ状に膨み約6mのびるが、左岸まで達しておらず溝の全幅を閉塞するには至っていない。また河床面で流れと平行して約0.8mの幅をもち、堰本体は細かくA1列とA2列の二列に並んでいることが識別される。

上流側のA1列は、堰体前面に当たり、角杭や丸杭が密に打ち込まれ、残存頭部を下流側に傾斜した状態で出土している。これは流水圧による倒れを推測させる。

一方、その背面には、A1列に比べ大きめの丸杭、角杭が直立した状態で打ち込まれている。杭の間隔は粗く一定ではないが、杭筋は前面列に対応しアーチ状に揃っている。数ヶ所で、A1前列との間にさらに同様の杭が認められることからA2列は40cm程の幅をもって二列に打ち込まれていた可能性も考えられる。またこのA2列に頭部を接する形で横たわっている一本の丸太杭が検出できた。杭先端から頭部まで欠損しておらず、保存の良好なもので堰体高を考える際の指標となる資料である。この杭の頭部はA2杭列間に接して遺存しており、

あるいは横木として二次的に使用されていた可能性もありうる。この仮定にたてば、A 2 列は前面 A 1 列の補強とともに、横木を固定する意図で打ち込まれた杭列であったことも予想できる。

以上の点から、A 1・A 2 列という二重の杭列は、断面形状を斜杭で構成する A 1 列、直立杭でそれを支える A 2 列からなる片合掌の形態に復原できる。堰体高はどの程度であったのだろうか。杭先端が河床にどの程度打ち込まれていたのか、現場で追求することができず決め手に欠くが、他遺跡の類例を参考にすると、50cm～60cm程に仮定できる。検出面から河床まで、約 1.5m の深さをはかり、また、支水路 S D 2800 の溝底は河床から 1 m 程の高さに位置しており、先述の遺存杭の全長から考えて堰体上面は河床から約 1.8m 程の高さに復原可能となる。この高さは検出面から 30cm 程頭を出すことになり、このことから、支水路への導水が充分可能であったと判断される。

次に B 杭列は、A 杭列南端から西へ鈍角に折れてのびる。すでに大半は流失し、9 本を検出したにすぎない。遺存状況は不揃に並ぶが本来は幅 40cm 程の幅で平行して並んでいたものと考えられる。流れに沿って平行し、垂直に打ち込まれた杭は岸までは達していない。用材として径 5.0cm 前後の A 杭列用材に比べると小ぶりの丸杭が使用されている。これは流水圧を直接受けず、さほど強固に構築する必要のない理由によるものであり、流路を固定化する機能を担った施設と考えることができる。

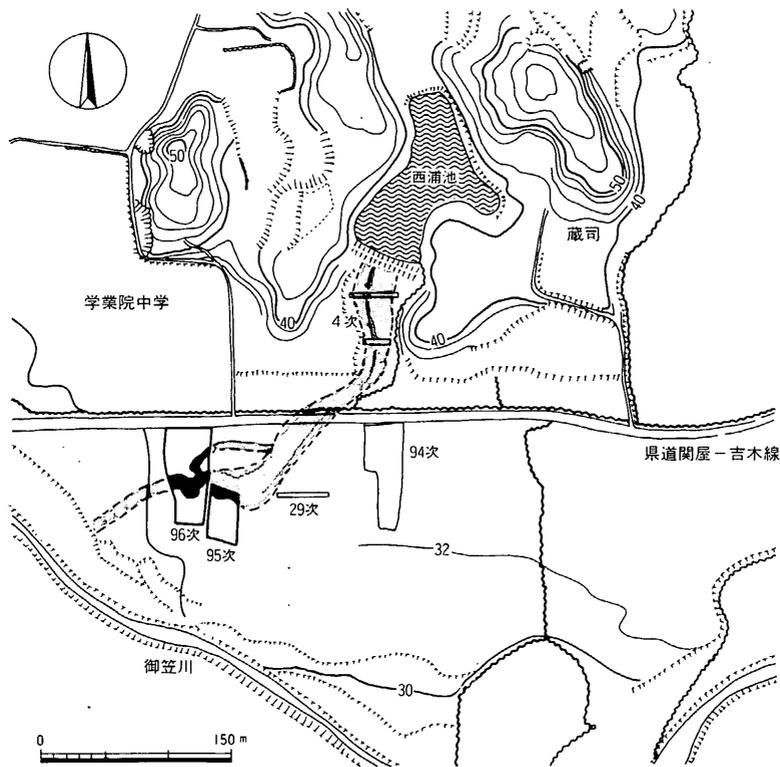
また、この左岸には幅 9.0m、奥行 7.0m、深さ 1.2m～1.4m の長円形の凹岸が広がる。河川との接点は堰 B 列によって一部仕切られた形となっている。この南には東西にのびる S D 2800 が接続し、一部堆積土の流れ込みがみられた。河川の水勢方向からみて、水流による浸蝕の結果とは考えがたく、S D 2800・S X 2815 と強い関連を持ち、人為的に掘削されたものと捉えられる。堆積土は、河川とは趣を変え、厚い黒色腐植土層が上層より認められ、少量ではあるが植物の種子を得ている。この下層では、砂層を介しさらに腐植土層が広がる。このことから、水溜状遺構として一種沼池のような状態にあったことが想定される。このような水溜状遺構を伴う例を、これより御笠川下流の福岡市三筑遺跡^(註1)に求めることができる。そこでは水口に泥土がたまるのを防いだ置簀であろうと想定されている。ここでも、支水路 S D 2800 に水を引き込む際に同様の役目を果たしていた可能性を考えることができる。

これらの諸施設は有機的に関連し、水田耕作を意図した水利施設として構築されたであろうことを充分予想させる。しかも導水機能のあり方から、小規模ながら高度な技術を駆使した経営であったことをうかがうことができる。しかしながら、調査区内では水田遺構を検出できず、河川中においても木製農耕具等が出土していないなど、直接農耕活動と結びつく資料に欠けるものである。むろん水田遺構が後世の大宰府整備に伴ない削平され消失した可能性や、河川が濁水時に清掃され、その結果遺物が出土してないと考えられないこともないが、ここでは周辺

での弥生時代の農耕活動を示唆するにとどめておく。

最後にこれまでの調査の成果から、今回検出したSD2760の流路についてふれてみたい。SD2760は最下層で弥生時代全般にわたる土器が少量みられた。いずれも磨滅していることから、上流より流れてきたものと判断できる。蔵司横の第4次調査時点で検出した幅20mの谷部からは弥生時代前期～中期の土器をパンケース3箱ほど出土しており、SD2760の上流がこの谷部に接続していたことが推定できる。さらに第29次調査地点のトレンチ断面では流路が検出されていないことから、本来は現在学業院中学校が位置する丘陵に沿って、第38図のように流路を大きく西に向け、御笠川に注ぎ込んでいたものと考えられる。

註1 山崎純男「三筑遺跡・次郎丸高石遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981



第38図 弥生時代河川流路の想定図(1/6000)

III. 結 語

1. 政庁前面域における区割について

政庁前面域（県道山家一関屋線と御笠川の間に挟まれた地域）については昭和54年度から開始された大宰府市による観世音寺地区土地区画整理事業にともなう事前の発掘調査によってかなりの面積の調査を実施し、その結果、予期以上の新知見を得るに至っている。そして、本年度をもって政庁前面域における土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査も一応終了することとなり、この機を利用して今回の報告と関連する政庁前面域における地割もしくは区割の問題について、過去の調査成果を含め若干の検討を試みたい。

政庁前面域については、調査の結果、官衙域の存在が確認され、その官衙域の拡がりや範囲については、すでに各年次の報告および石松好雄氏論文等で周知の通りである。この官衙域の存在が確認されるに至り、これまでの府庁域および条坊に関する復原案を再検討する必要性が生じてきたことも事実である。

前面域の調査では10条前後の南北および東西方向の溝を検出しているが、平城京等にもみられるような両側に溝をもった明確な道路遺構の確認は未だなされてない。大宰府の場合、検出したこれらの溝が何らかの区画を成すと考えられるが、いずれも条坊の推定線とは必ずしも一致していない。

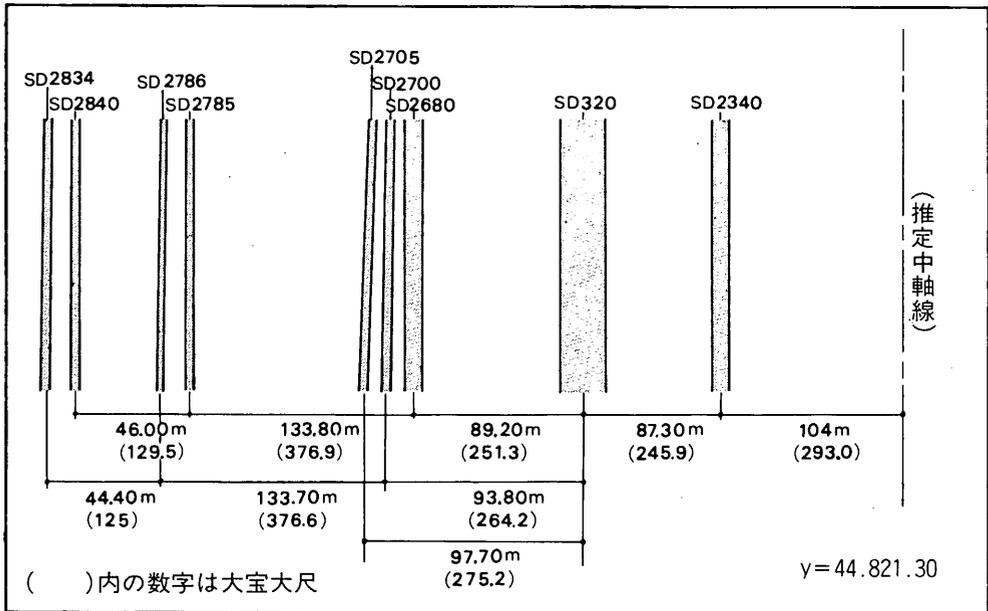
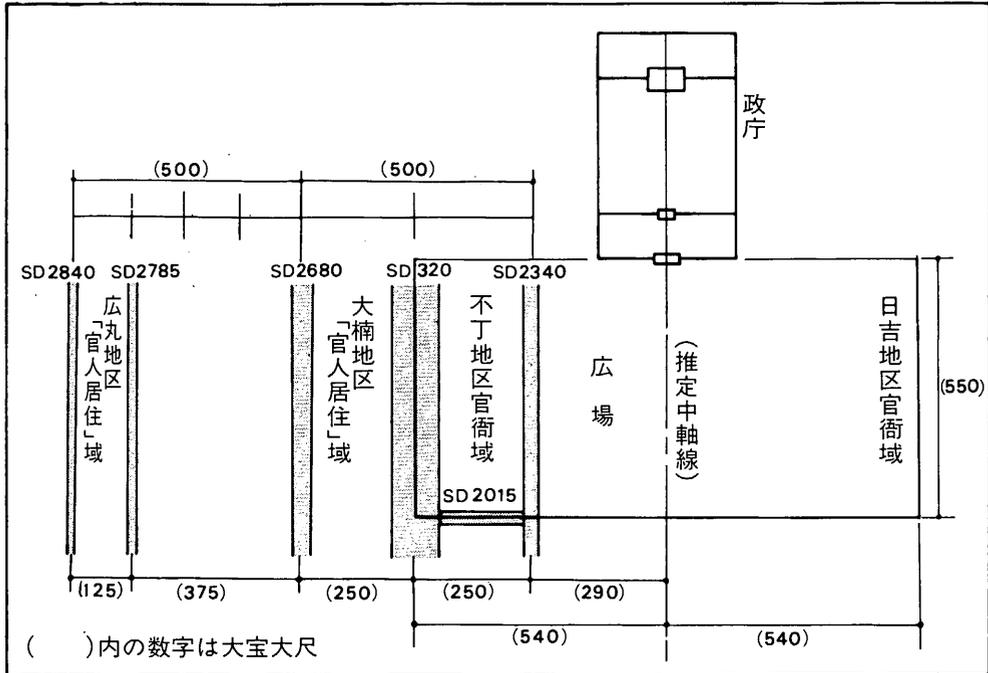
これらの溝が条坊の推定線と合致していないのは、政庁前面域については条坊の地割とは別の区割ないし地割が施行されたのではないかとの前提に立って、ここでは主として各溝の位置関係と区割計画線の復原案について検討する。

溝の位置関係

政庁の前面域で検出した溝のうち、ここで検討するのは南北溝9条と東西溝1条である。各溝間の距離等の概要は65頁の表と第39図に示した。各溝間の政庁中軸線からの距離の計測に当たっては、各溝とも方位にかなりの差があり、政庁中軸線の振れ（平面直角座標の北に対して約34分12秒東偏している）とも異なっており、X座標の設定位置によって計測値が多少違ってくるので、ここでは任意のX座表56,640,00での計測値を記した。溝の心心距離についても溝の方位が政庁中軸線の振れに合ったものと仮定し計測したもので、実長とは若干誤差が生じることは否定できない。

表記した溝9条のうち年代・方位・残存状況の点から良好なものはSD2340、SD320、SD2680の3条で、この3条の溝を中心に検討を進めていきたい。また、大尺への換算は平城宮跡の調査で得られた小尺1尺=0.296m（大宝大尺0.355m）を用いた。

(註3)



上：第Ⅱ期政庁と第Ⅰ期溝との 関連図(区割の計画線)	SD 2340 (-44.925.30)	SD 2785 (-45.235.60)
下：各溝間の実長	SD 320 (-45.012.60)	SD 2786 (-45.240.10)
	SD 2680 (-45.101.80)	SD 2840 (-45.281.60)
	SD 2700 (-45.106.40)	SD 2834 (-45.284.50)
	SD 2705 (-45.110.30)	()内の数字は平面直角座 標系第2系溝心の y 座標値

第39図 政庁前面域溝配置模式図

遺構	調査回数	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	溝心のY座標値	方位 (G・Nとの振れ)	存続 埋没年代	期別
S D 2340	84・85・87・90	134.5	5.0前後	0.9	-44.925.30	N 0°40'W	8c前～中	I
S D 320	14・76	153.0	13.5	1.4	-45.012.60	N 0°45'W	8c～11c	I～III
S D 2680	94	77.8	3.8	0.9	-45.101.80	N 0°50'W	8c前～後	I
S D 2700	94	81.8	0.8～1.0	0.2～0.4	-45.106.40	N 2°30'W	9c～10c	II
S D 2705	94	81.8	1.4	0.4	-45.110.30	N 1°30'E	11c～12c下限	III
S D 2785	95	31.0	1.0	0.1	-45.235.60	N 0°10'E	不明	I
S D 2786	95	27.0	0.4	0.1	-45.240.10	N 2°20'W	不明	II
S D 2840	96	36.5	0.8	0.2	-45.281.60	N 0°20'W	8c	I
S D 2834	96	19.0	0.4	0.1	-45.284.50	N 2°15'W	9c	II

政庁中軸線とS D 2340との心心距離は $104\text{m} \div 0.296 = 351.3\text{尺}$ （ $\approx 350\text{尺}$ ）、 $104\text{m} \div 0.355 = 293\text{尺}$ （ $\approx 大尺290\text{尺}$ ）。S D 2340とS D 320の心心距離は $87.30\text{m} \div 0.296 = 294.9\text{尺}$ （ $\approx 300\text{尺}$ ）、 $87.30\text{m} \div 0.355 = 245.9\text{尺}$ （ $\approx 大尺250\text{尺}$ ）。S D 320とS D 2680の心心距離は $89.20\text{m} \div 0.296 = 301.3\text{尺}$ （ $\approx 300\text{尺}$ ）、 $89.20\text{m} \div 0.355 = 251.2\text{尺}$ （ $\approx 大尺250\text{尺}$ ）である。いずれも完数とならず端数を生じる。仮にS D 2340・320・2680の心心距離を大尺で290尺・250尺・250尺の完数として逆に大尺1尺の基準尺を求めると $104\text{m} \div 290 = 0.358$ 、 $87.30\text{m} \div 250 = 0.349$ 、 $89.20\text{m} \div 250 = 0.356$ となり、平均値を求めると0.354となる。また、政庁中軸線とS D 2680との心心距離は $280.5\text{m} \div 0.296 = 947.6\text{尺}$ （ $\approx 950\text{尺}$ ）、 $280.5\text{m} \div 0.355 = 790.1$ （ $\approx 大尺790\text{尺}$ ）である。すなわち、S D 2340・320・2680は平城宮遷都初期の遺構の基準尺0.296に近似した基準尺による計画線が考えられる。

これまでの調査結果から、S D 320は政庁前面に存在する官衙域の西を限る溝と考えている。政庁中軸線からの距離は $191.3\text{m} \div 0.296 = 646.2\text{尺}$ （ $\approx 650\text{尺}$ ）、 $191.3\text{m} \div 0.355 = 大尺538.8\text{尺}$ （ $\approx 大尺540\text{尺}$ ）で端数を生じるが、S D 320の溝幅約13mを考慮すると大尺540尺の計画線が復原される。また、官衙域の南の界線に考えている東西溝S D 2015 A（第76・85次調査検出で8世紀後半代の溝）は南門心との距離 $196\text{m} \div 0.296 = 662.1\text{尺}$ （ $\approx 660\text{尺}$ ）、 $196\text{m} \div 0.355 = 大尺552.1\text{尺}$ （ $\approx 大尺550\text{尺}$ ）で、先述のS D 320の政庁中軸線からの距離大尺540尺と近い数値を得る。すなわち、S D 320とS D 2015 Aで囲まれた政庁中軸線の西側の地域はほぼ正方形の占地となる。

次に、S D 2680の西側に位置するS D 2700・2705・2785・2786・2840・2834の6条の溝について検討してみよう。

第94次調査検出のS D 2700・2705はS D 2680より後出のもので、漸次西へ移行していったことが調査結果として得られている。S D 2700は9～10世紀、S D 2705は11～12世紀を下限とす

る時期である。この2条の溝はS D 2680より、それぞれ約4.6m、8.5m西へ移行し、方位もかなりの振れがみられる。S D 320とS D 2700の心心距離は $93.8\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}264.2\text{尺}$ （ \approx 大尺265尺）。S D 320とS D 2705の心心距離は $97.70\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}275.2\text{尺}$ （ \approx 大尺275尺）となる。

第95次調査検出のS D 2785・2786の2条の溝は出土遺物がきわめて少なかったことから時期決定の手掛りを欠いている。方位はS D 2785がN 0°11'EでS D 2680の方位に近似し、S D 2786はN 2°19'WでS D 2700に近似している。またS D 2785とS D 2786の心心距離は約4.5mで、S D 2680とS D 2700の心心距離と同じ点が注目される。因に、S D 2680とS D 2785の心心距離は $133.80\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}376.9\text{尺}$ （ \approx 大尺375尺）。S D 2700とS D 2786の心心距離は $133.70\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}376.6\text{尺}$ （ \approx 大尺375尺）である。

第96次調査検出のSD 2840・2834の2条の溝は必ずしも残存状況は良好でなかった。S D 2840は石敷溝で8世紀後半代、SD 2834は9世紀後半代の井戸から切られており、それ以前の時期が与えられる。S D 2840は年代・方位の点から、先述のS D 2680と同時期に存在していたと考えられる。S D 2680とS D 2840の心心距離は $179.80\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}506.4\text{尺}$ （ \approx 大尺500尺）。因に、第95次調査検出のS D 2785とS D 2840の心心距離は $46.0\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}129.5\text{尺}$ （ \approx 大尺125尺）。また、S D 2700とS D 2834は年代的に同時期と考えられ、方位の上からもほぼ一致がみられる。S D 2700とS D 2834の心心距離は $178.1\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}501.6\text{尺}$ （ \approx 大尺500尺）。S D 2786とS D 2834の心心距離は $44.40\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}125.0\text{尺}$ である。

区割計画線の復原

前項で各溝間の距離を計測し、それを平城宮跡の調査で得られた基準尺によって検討してみた。以下、これらを整理し政庁前面域の区割ないし地割の計画線の復原を試みたい。記述に際しては、これら9条の溝を出土遺物および方位等の上から大きく3期に区分した。第I期は8世紀代、第II期は9～10世紀代、第III期は11～12世紀を下限とする時期である。

第I期

第I期に属する溝はS D 2340・320・2680・2785・2840がある。

政庁前面の官衙は政庁中軸線を狭んで西側に不丁地区官衙域、それと相対して日吉地区官衙域が存在することは先述した通りである。そしてこの官衙域の西の界線を示すのが南北溝S D 320であり、東の界線は県道観世音寺―二日市線の東側にある、現在は谷状を呈する南北方向の溝付近を想定している。南についてはS D 2015Aをもって、その界線にあてている。

政庁中軸線とS D 320の心心距離は大尺540大尺、南門とS D 2015Aの心々距離は大尺550尺となる。すなわち、政庁中軸線の左右にほぼ正方形の区域が設定される。そして不丁官衙域においてはS D 320の東側に大尺250尺の距離にS D 2340があり、広場と不丁官衙域とを画している。S D 2340を政庁中軸線で折り返した東側の位置に小区画をなす溝が存在するのかは未調査のため不明であるが、大尺580尺の広場的区域が想定される。そして、その東側に大尺250尺幅

の日吉地区官衙域の設定が可能である。

S D 2340とS D 2680の心中心距離は大尺500尺で、その2分の1の位置にS D 320が計画設定されたと考えられる。S D 320とS D 2680に挟まれた区域は官人の居住地に比定しているところで、不丁地区官衙域とS D 320を狭んで隣接している点、さらに大尺250尺の同じ区域を占める点等を考慮すると、この区域は官人の中でも比較的高位な者の居住域であったと推定することも可能であろう。

次にS D 2680の西側地域についてみてみよう。S D 2680とS D 2840の心中心距離は179.8m(大尺506.6尺)である。かなりの端数を生じるが大尺500尺の計画線が想定される。この端数については $179.8\text{m} \div 500 = 0.359$ (小尺0.299)となり、基準尺が若干大きくなる。S D 2785はS D 2680とS D 2840間の4等分した位置にあたる。この地域の北半分では掘立柱建物4棟を検出している。この建物については官人の居宅の可能性も考えられ、この区域の北半分が官人の居住域として設定されていたとも想定される。S D 2680とS D 2785の間は大区画大尺500尺の4分の3を占めるが、この間に4分の1等間で区画が存するのかは、未調査地が多いため不明確であり、今後の調査に俟つところが多い。

第Ⅱ期

第Ⅱ期の溝としてS D 320・2700・2786・2834がある。S D 2340は既に廃絶し、不丁地区官衙域と広場の区画もなくなる。また、S D 2680も埋められ整地され、ほぼ期を同じくして新たにS D 2680が掘られる。そして、S D 2785の西側にS D 2786、S D 2840の西側にS D 2834が新設されている。新設された各溝は、ほぼ等距離で西へ移行している。そして方位の点ではいずれも $2^{\circ}20'$ 前後東偏しており、第Ⅰ期のS D 2680・2785・2840が政庁軸線の振れ $34'$ に近かったのに対し、かなりのずれがみられる。S D 2700・2786・2834が新たに掘削された理由については定かではないが、一つの理由として考えられることは大楠地区官人居住域の拡張に伴うものと考えられる。そのことはS D 2680が9世紀初めに一気に埋められ整地されたことが調査結果から判明しており、S D 2680の整地と同時に新たにS D 2700が設けられたと考えられる。すなわち、大楠地区官人居住域が、官人居住の増加等の理由により拡張にせまられ、それに伴って西側の区域もそれぞれ西側へずらさざるを得なかったであろう。因にS D 2700とS D 2834の心中心距離は $178.1\text{m} \div 0.355 = \text{大尺}501.6\text{尺}$ (\approx 大尺500尺)である。

第Ⅲ期

第Ⅲ期になるとS D 320とS D 2705の2条のみしか存在しない。但しS D 2834のさらに西側に溝が存在するのかは、発掘区外であったため不明であるが、溝の新設は大楠地区のみであったとも考えられる。大楠地区官人居住区域の第Ⅱ期溝の新設はこの地域への居住の集中を物語っていると言えよう。衰退の傾向にある第Ⅲ期においてさらに溝の新設がなされるのであるが、その理由については必ずしも定かではない。このことは後述する大楠地区官人居住域の建物変

遷からも推察される。S D 2705は方位としてN 1°20'Eを示し、II期以前のものと逆の方位となっている。S D 320は掘削の時期については必ずしも明らかではないが、おそくとも8世紀後半代には既に存在し、今回の時期区分における第I期～第III期の長期にわたって存在し続けた唯一の溝である。この溝も11世紀前半代には終焉を迎えるが、政庁前面域の官衙建物のほとんどが廃絶するのと一致している。SD 320が他の溝と異なり、長期にわたって存続し、かつまた大規模であったことはいくつかの理由があったと考えられるが、その一つとして官衙域と居住区との区画であり、それはかなり長期にわたって厳然として守られてきたようである。もう一点は排水施設としての役割である。山裾に位置する政庁にとって、水の処理は重要な課題の一つであったに違いない。S D 320は北方の流水を南の御笠川に通す重要な役割を荷っていたと考えられる。

以上、溝の位置関係および、それによって導き出される地割ないし区割の計画線について、一つの復原案を考えてみた。今回は溝の心心距離についてのみの検討であったが、溝肩間の距離の検討や基準尺についてなど周辺の遺構との関連で更に検討すべきであり今後に残された問題も多い。今回は紙数の関係で各溝の詳細については記さなかったが、これらについては各年次の報告書を参照して頂きたい。

2. 大楠地区建物配置の変遷

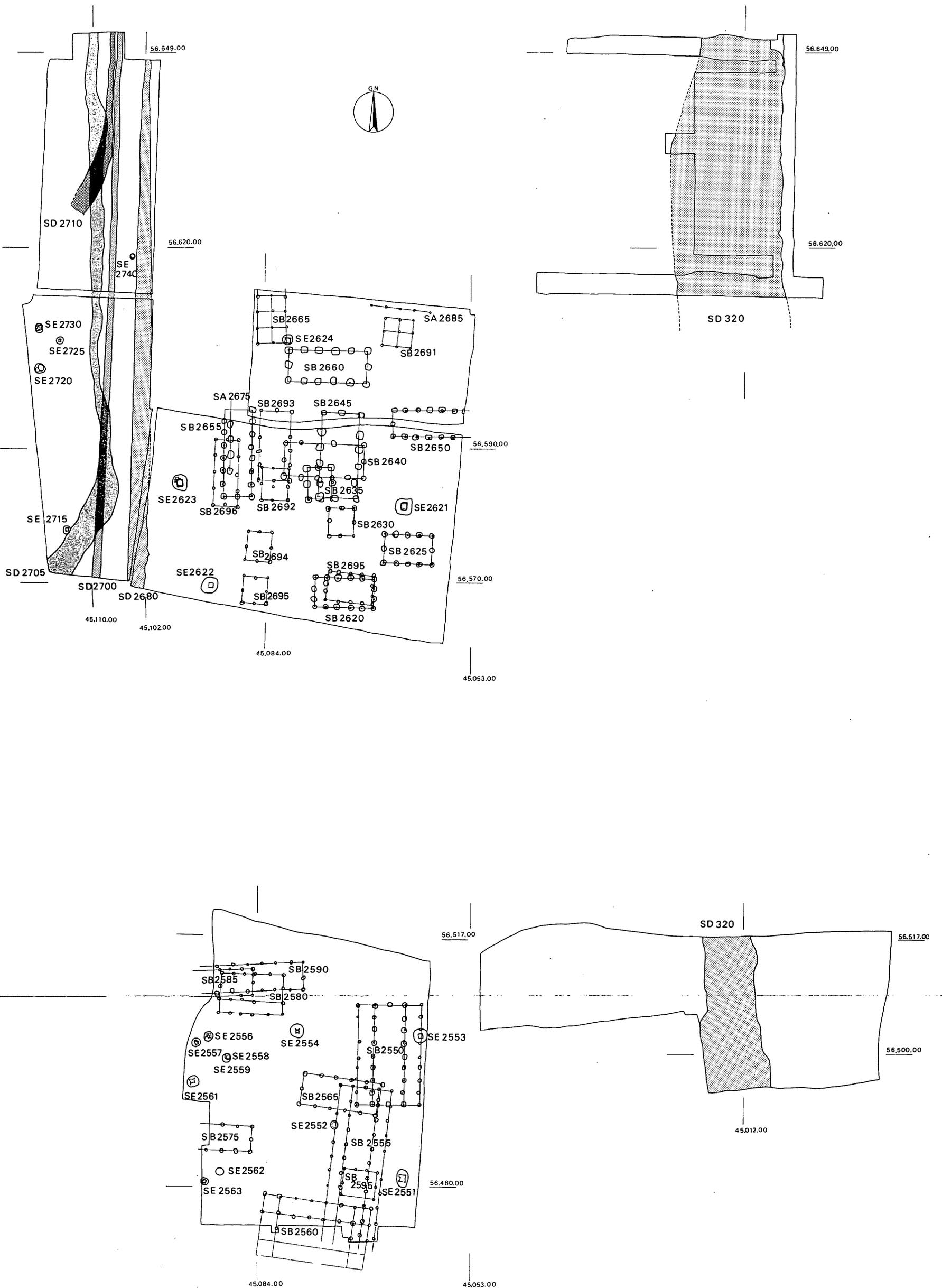
蔵司前面に位置する大楠地区では、これまでに5回の調査を行なっている。一応今回でこの地区の調査は一区切りをつけることとなった。おもな遺構として、掘立柱建物30棟、井戸24基、南北溝5条を検出し、それらは8世紀から12世紀にわたり継続して営まれていたことが判明している。

建物群に多くの井戸が伴うこの地区の事例は、南北の大溝SD 320以東の不丁地区官衙域ではみられないあり方として注目される。建物自体も、官衙域にくらべて小規模であり、柱通りも不揃いな傾向にある。また、柱掘形も小さく不整形なものも多く、埋土の様相にも著しい違いを感じさせる。

これらのことから、大楠地区が不丁官衙域とは異なった性格をもつ地域であったことを予想させる結果となった。官衙域に隣接した立地や、出土遺物から判断して、官人の居宅等の施設が配置された地区であったろうことを現段階では想定している。

この間、調査区毎の遺構について発掘調査概報で別個に報告してきたが、今回S D 320とS D 2680には含まれた地区内の建物群変遷を、その後ひろうことのできた建物群を加えて、さらにまとめることにした。限られた面積の調査である為、充分とは言いがたく、官衙域をも含めての入念な検討をなしていないが、今後の足がかりとする為に整理してみたい。

検出した建物群には柱痕跡をもつものが少なく、推定できる棟方位は明確な差異を見出し



第40图 大楠地区主要遺構配置模式图

えない為、棟方位による建物群の抽出を困難にしている。したがって、柱掘形出土土器から得られた年代を各溝の存続期間につき合わせることで、それぞれの時期区分を設定している。S D 2680の存続期間をI期、S D 2700をII期、S D 2705をIII期に大別し、その中で建物群のまとまりを各期に細分した。

なお、便宜的に92次調査区をA区、88次調査区をB区と仮称する。

I a期（8世紀中頃）

A区内の掘立柱建物S B 2635・S B 2650・S B 2655と、井戸S E 2621、および、これらに伴う地鎮遺構S X 2670がある。建物群はいずれも規模の大きい方形掘形を持つ。東西棟建物S B 2650と南北棟建物S B 2655は、柱筋を揃えて直角に配置されている。これらの建物間は210m、70尺に復原でき、完数尺を取っていることは既に指摘した。また建物間の中央には倉庫と考えられる2間×2間の総柱建物S B 2635が位置する。柱痕跡を検出しえなかったが、S B 2650、S B 2655同様真北方向に配置されていたであろう。したがってここでは、同規模の二棟の建物を「L」字形に配置し、倉庫と井戸を付設した計画的な配置形態がみてとれる。またこのまとまりは、最小の生活単位として機能していたのかもしれない。

I b期（8世紀後半）

この期には、建物5棟と井戸1基が存在する。建物は、前段階同様、規模の大きい方形掘形をもつが、棟方位は幾分西偏気味である。

A区では、S B 2645、S B 2660という2間×5間の同規模建物を「L」字形配置に取る。その南には、S B 2620とS B 2625が棟方位を同じくして斜めに並ぶが、S B 2620は床束を伴ない、また規模の点からS B 2625に対し、優位な関係にあったといえよう。この二棟は、いわゆる「雁行型」と呼ぶことのできる配置形態である。なお、同時期に比定しうる井戸は、調査区内では検出できていない。

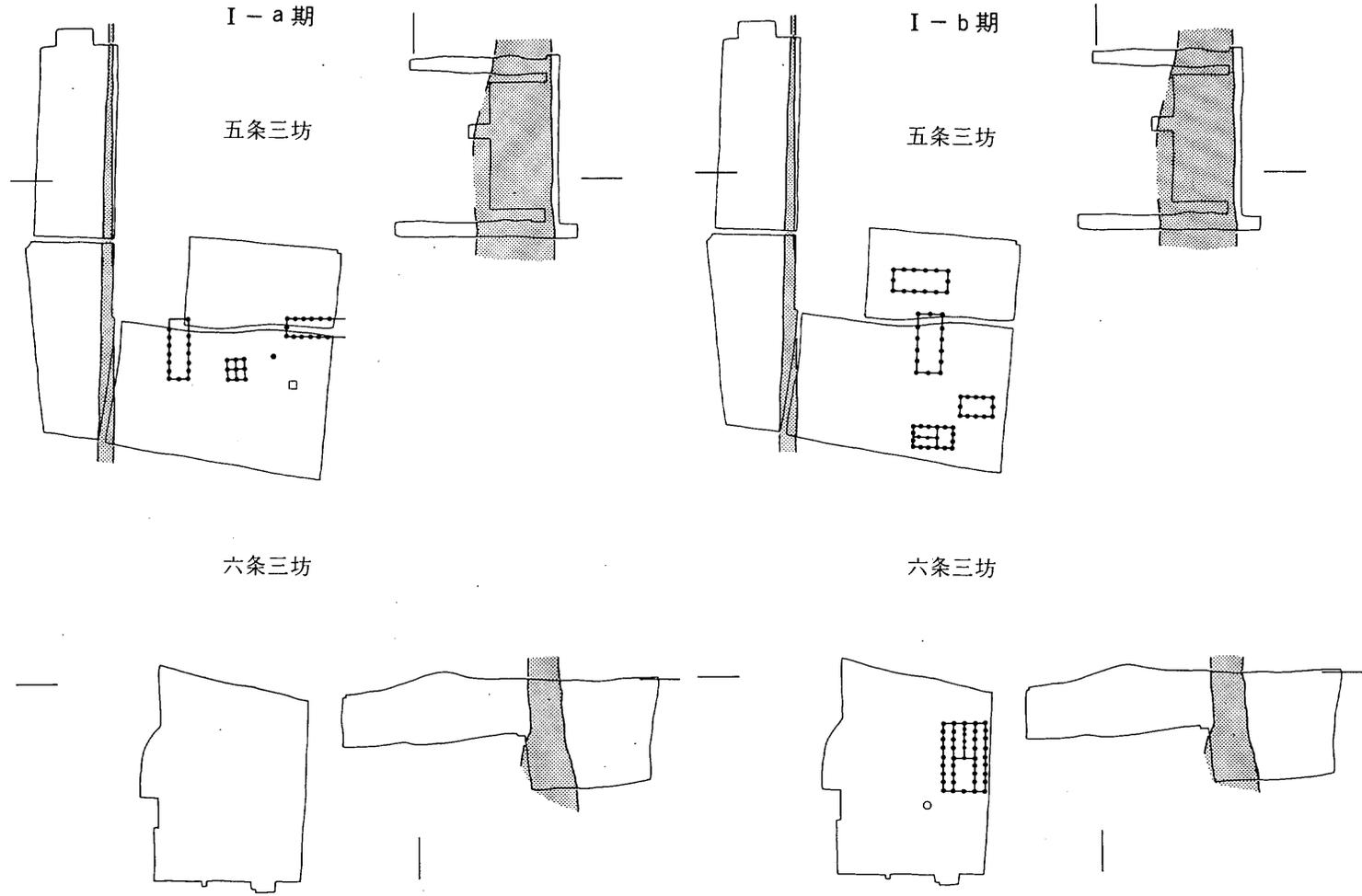
B区では、南北棟建物S B 2550と、近接して位置する井戸S E 2552が、初めて出現する。S B 2550は、東西に廂を設け、床束を伴う大規模な建物である。構造・規模からみて、生活単位の中心的位置にあったと考えられるが、調査区内では、これに従属するような建物を見出しえない。

A・B区合わせて2、3単位の建物群にまとめることができる。床束をもつ建物がこの期に現われており、前段階にみられた同規模二棟による配置形態からの変化が顕著である。

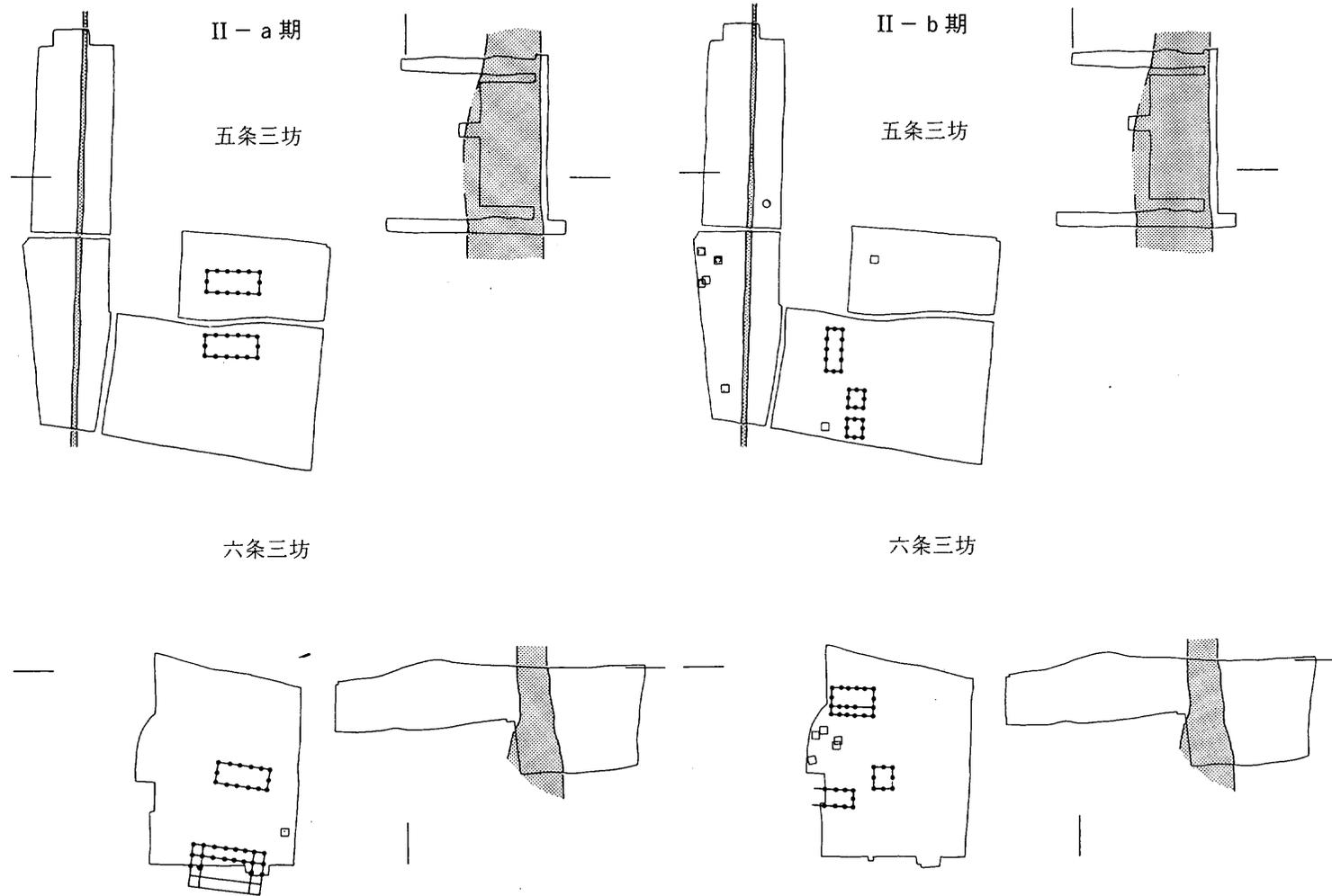
II a期（9世紀前半）

この期には、掘立柱建物6棟と、井戸2基が属す。建物の掘形は小規模となり、円形になる時期である。

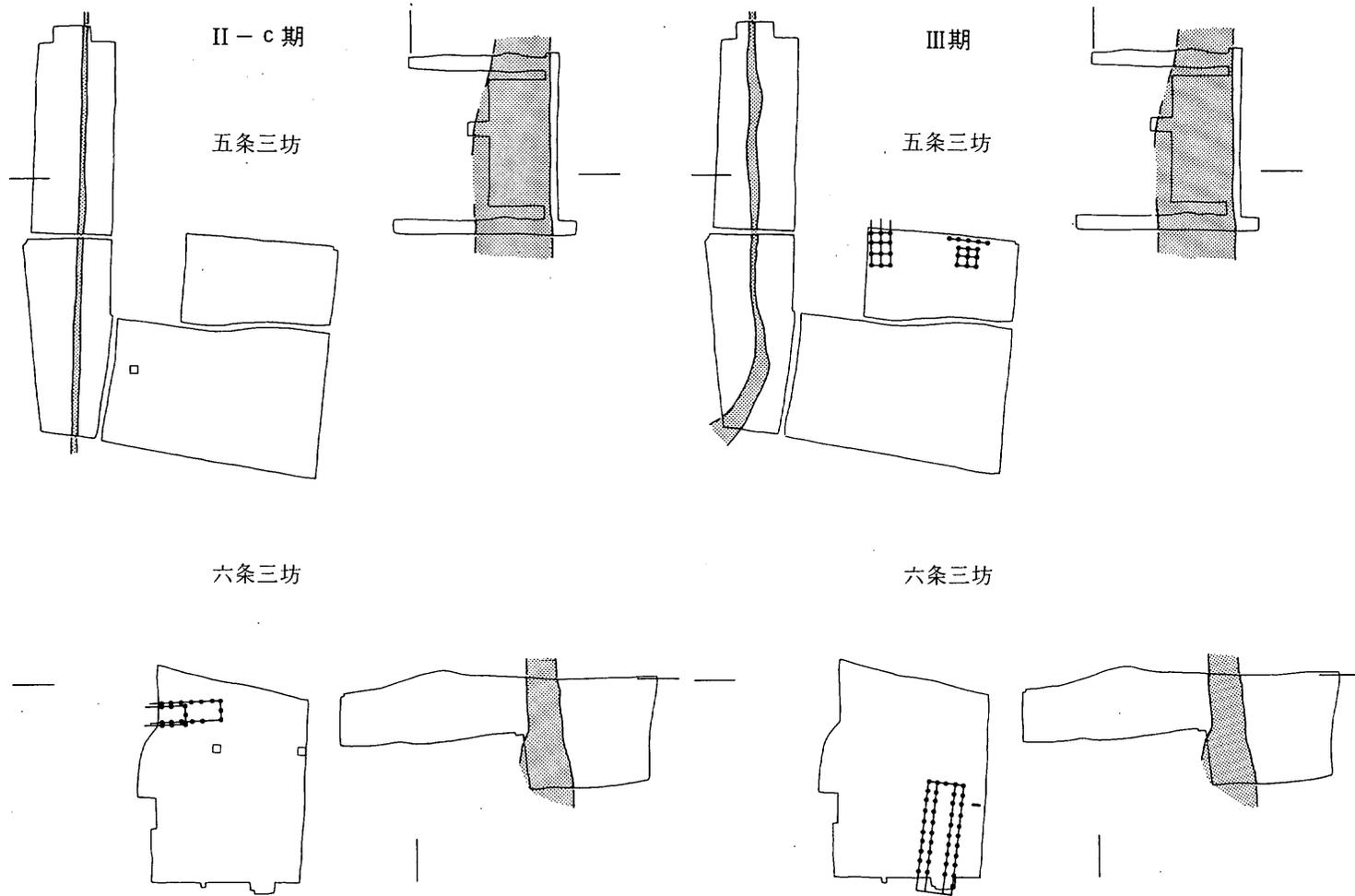
A地区では、規模、柱間、棟方位を等しくする東西棟S B 2640・S B 2660が、柱筋を揃え並列に計画的配置を取る。このうちS B 2660は前段階から存続するものである。となるとS B 2640



第41图 大楠地区建物配置変遷図(1)



第42図 大楠地区建物配置変遷図(2)



第43图 大楠地区建物配置变遷图(3)

は、S B 2645の廃絶後に新しく建て変えられた建物と解釈でき、「L」字形配置から並列形配置への計画変更をみてとることができる。

この南に位置するS B 2689は、S B 2620の位置に建て変えられるが、規模の縮少がみられる。但し、I b期に同時に配置されていたS B 2625は、この時期廃絶している。なお、S B 2693からも同時期の土器が出土したが、S B 2640と重複し、先後関係が不明なため、ここでは一応除外しておいた。

B区でも、2棟の東西棟S B 2560・S B 2565が並列して配置されている。このうちS B 2560は四面廂の建物であり、主屋の性格を有すものと思われる。この東には井戸S E 2551が隣接する。

以上を概観すると、建物配置が並列形を取る傾向が指摘できる。これがこの時期の一般的あり方であるなら、S B 2689の南側にさらに1棟、S B 2689と対をなす建物が検出できるかもしれない。

II b期（9世紀後半）

掘立柱建物S B 2570・S B 2575・S B 2580・S B 2655・S B 2594・S B 2595と、井戸S E 2556・S E 2557・S E 2558・S E 2559・S E 2561・S E 2622・S E 2624が該当する。建物の掘形規模は縮小化がさらに進み、0.5m前後の円形が定着する傾向にある。

建物配置がA区では、西側に寄り、2間×5間の南北棟建物S B 2655の南斜に2間×2間のS B 2694・2695が柱筋をそろえて近接する。S B 2694・2695は柱間寸法も等しく、あるいは1棟の建物にまとまるかもしれない。ここでは、S B 2655に付設した倉庫の性格の建物と考えておきたい。これらも「雁行型」に配置される。井戸S E 2624と今回検出したS E 2740がこれらの建物とは距離がはなれており、未掘区で建物が検出できるのかもしれない。

B区でも建物群は西側寄りに認められ、南面廂付建物S B 2580の南に、ほぼ柱筋をそろえた2間×2間のS B 2570と、この南側柱列延長線上に2間×3間以上の東西棟S B 2575が計画的に配置される。このうちS B 2580は有廂建物であることから本群の中心的建物であったと思われる。井戸は、建物群の内側に囲まれて5基が重複してかたまる。

この時期になると、西側のS D 2680左側に多数の井戸が現れており、これらを伴う建物群が、付近に位置していたと予想される。

II c期（10世紀）

A区では、井戸S E 2623を西側寄りで検出したにすぎない。

B区では、北側に東西棟S B 2585・S B 2590が重複し、井戸S E 2554がこの南に設けられる。建物は同規模による建て変えとみられるが、北側には、柵を伴う東西溝S D 2582が位置し、西側に南北溝S D 2680がのびることを仮定できる。建物群が溝によって区画されていたと考えられるので、この時期、建物1棟と井戸1基で生活単位を構成していたと思われる。

時期	遺構番号	棟方位	梁行×桁行	梁行柱間	桁行柱間	掘形規模	備考
I a	SB 2635	N1°45'E(南北棟)	2×2 (3.6)(4.5)	1.8+1.8 6尺等間	2.25+2.25 7.5尺等間	0.8~1.0 方形	総柱建物
	SB 2650	N0°30'W(東西棟)	2×6以上 (3.9)(9)	1.95+1.95 6.5尺等間	1.8+1.8+1.8+1.8+1.8 6尺	0.6~0.8 方形	
	SB 2655	N0°30'W(南北棟)	2×7 (4.2)(12.9)	2.1+2.1 7尺等間	1.74+2.01+1.8+1.8+2.01+1.74	0.6~0.8 方形	
I b	SB 2550	N1°0'W(南北棟)	4×8 (9.2)(14.45)	2.3+2.3+2.3+2.3 8尺等間	1.8+1.75+1.85+1.85+1.8+1.8+1.8+1.8 (6尺等間)	0.6~0.8 方形	東西に二面廂 床東、北柱列より6間
	SB 2620	N2°15'W(東西棟)	3×5 (4.35)(8.7)	1.35+1.5+1.5 (5尺等間)	1.65+1.65+2.1+1.65+1.65 中央7尺、他5.5尺	0.6~0.8 方形	床東あり
	SB 2625	N2°0'W(東西棟)	2×4 (4.3)(7.2)	2.15+2.15 7尺等間	1.8+1.8+1.8+1.8 6尺等間	0.6~0.8 方形	総柱建物
	SB 2645	N2°30'W(南北棟)	2×5 (5.4)(12.6)	2.7+2.7 9尺等間	2.7+2.4+2.4+2.4+2.7 両端9尺、他8尺等間	1.2前後 方形	
	SB 2660	N2°30'W(東西棟)	2×5 (4.8)(12.0)	2.4+2.4 8尺等間	2.4+2.4+2.4+2.4+2.4 (8尺等間)	1.0前後 方形	
II a	SB 2560	N7°0'W(南北棟)	(4)×7 (9.3)(16.05)	2.4+2.25+(2.25)+ (2.4)身倉7.5尺等間	2.4+2.25+2.25+2.25+2.25+2.25+2.4	0.4前後 円形	四面廂
	SB 2565	N7°30'W(東西棟)	2×5 (4.5)(11.5)	2.25+2.25 7.5尺等間	2.3+2.3+2.3+2.3+2.3 (8尺等間)	0.5前後 円形	
	SB 2640	N0°30'W(東西棟)	2×5 (4.8)(12.0)	2.4+2.4 8尺等間	2.4+2.4+2.4+2.4+2.4 8尺等間	0.7前後 円形	
	SB 2689	N4°15'W(東西棟)	3×4 (4.2)(6.6)	1.4+1.4+1.4 4.5尺等間	1.65+1.65+1.65+1.65 5.5尺等間	0.5前後 円形	
	SB 2693	N1°15'W(南北棟)	2×5 (4.5)(10.2)	2.25+2.25 7.5尺等間	2.04+2.04+2.04+2.04+2.04 7尺等間	0.5前後 長方形、円形	
	SB 2660						II a 期から存続
II b	SB 2570	N1°30'W(南北棟)	2×2 (4.2)(4.8)	2.1+2.1 7尺等間	2.4+2.4 8尺等間	0.5前後 円形	
	SB 2575	N3°15'W(東西棟)	2×3以上 (3.6)(6.75)	1.8+1.8 6尺等間	2.25+2.25+2.25 7.5尺等間	0.5前後 円形	
	SB 2580	N2°0'W(東西棟)	3×5 (5.85)(7.2)	2.1+2.1+1.65 身倉7尺等間 廂5.5尺	2.25+2.25+1.65+1.65+1.65 東2間7.5尺、他6.5尺	0.4前後 円形	南面に廂
	SB 2694	N4°45'W(南北棟)	2×2 (3.6)(4.2)	1.8+1.8 6尺等間	2.1+2.1 7尺等間	0.4前後 円形	
	SB 2695	N4°45'W(南北棟)	2×2 (3.6)(4.2)	1.8+1.8 6尺等間	2.1+2.1 7尺等間	0.4前後 円形	SB 2694と同一建物の可能性あり。
	SB 2696	N1°45'W	2×4 (3.6)(9.6)	1.8+1.8 6尺等間	2.4+2.4+2.4+2.4 8尺等間	0.4前後 円形	
II c	SB 2585	N2°0'E(東西棟)	2×3以上 (4.0)(4.95)	2.0+2.0 7尺等間	北1.65+1.8+1.5 南1.65+1.5+1.8(5.5尺等間)	0.4前後 円形	さらに西へのびる可能性もある
	SB 2590	N2°30'E(東西棟)	2×6以上 (4.2)(12.9)	2.4+1.8 8尺6尺	1.8+2.4+2.1+2.1+2.1+2.4 6尺8尺7尺7尺7尺8尺	0.4前後 円形	
III	SB 2555	N7°15'W(南北棟)	4×(II) (7.8)(23.8)	1.95+1.95+1.95 +1.95(6.5尺等間)	2.4+2.1+2.1+2.1+2.1+2.1+2.2 +2.1+2.1+2.1+(2.4)両端8尺、他7尺等間	0.5前後 円形	東西二面廂
	SB 2665	N1°15'E(南北棟)	2×3 (4.2)(6.6)	2.0+2.2 7尺等間	2.2+2.2+2.2 7尺等間	0.4前後 円形	総柱、敷石を残す
	SB 2691	N6°0'W(東西棟)	2×2 (4.1)(4.2)	2.0+2.1 7尺等間	2.1+2.1 7尺等間	0.3~0.4 円形	総柱建物
時期不明	SB 2595	N8°15'W(東西棟)	2×3 (3.9)(4.95)	2.1+1.8 7尺6尺	1.65+1.65+1.65 5.5尺等間	0.3~0.4 円形	
	SB 2630	N1°45'E	2×2 (3.9)(3.9)	1.95+1.95 6.5尺等間	2.1+1.8 7尺6尺	0.3~0.7 方形、円形	
	SB 2691	N9°15'W(南北棟)	2×2 (4.2)(4.5)	2.1+2.1 7尺等間	2.1+2.4 7尺8尺	0.5 方形、円形	
	SB 2692	N1°45'W(南北棟)	2×2 (3.9)(4.6)	2.4+1.5 8尺5尺	2.8+1.8 9尺6尺	0.3~0.4 円形	総柱

時 期	遺構番号	形 態	型 式	時 期	遺構番号	形 態	型 式
I a	S E 2621	方形縦板組	II A a	II b	S E 2622	方形縦板組	II A
I b	S E 2552	曲 物 組	III		S E 2624	方形縦板組(有柱)	II A
II a	S E 2551	方形縦板組(有柱)	II A a	II c	S E 2553	方形横板組	I
II b	S E 2556	方形縦板組(有柱)	II A b		S E 2554	方形縦板組	II A b
	S E 2557				S E 2623	瓦 組	
	S E 2558	曲 物 組		不明	S E 2562	素 掘(?)	
	S E 2559	方形縦板組	II A b		S E 2563	方形縦板組	II A b
S E 2561	方形縦板組(有柱)	II A a					

※形態分類は横田賢次郎氏の分類に従う。九州歴史資料館研究論集(三)

ところで、大宰府の中枢部である政庁ではこの時期に第III期の建物群が造営されている。官人居住域に仮定したこの区域が、政庁建物群に呼応して整備が行なわれた形跡はなく、むしろ空白地の様相をA区では指摘できる。井戸周辺のピット群が建物としてまとまる可能性は大きい、他の時期に見られる大規模の建物が配置されていた可能性は少ない。

III期(11世紀)

建物は3棟検出しているが、この時期の井戸は見当らない。

A区では、北側に2間×3間の総柱建物S B 2665と、2間×2間の規模をもつS B 2691が建つ。棟方位は不統一である。S B 2691は倉庫と考えられ、北側に柵S A 2685を伴う。棟方位はどれも不統一で、柱間寸法にも計画性はみられない。この南は、前段階と同様、建物が認められない。

B区の南半部では桁行11間、東西両面に廂を付けた長大な南北棟建物S B 2555が存在する。昨年度の報告時では9世紀後半代の所産としておいたが、その後、柱穴出土土器が11世紀代までの幅を持っていることが判明した為、IV期とした。しかしながら、棟方位、掘形の形状、規模は、II a期のS B 2560・S B 2565と強い類似性を示唆するものである。出土土器による年代決定に従うならば、この区域が衰退に向かう中で、連続性を持たず突如として出現することになる。したがってII a期に遡る可能性も一応考えられる。

以下、いくつかの要点をまとめると、この大楠地区では8世紀中頃に建物群の造営が開始され、当初から整然とした計画的配置をとっている。この傾向はII b期の段階まで踏襲されるが、棟方位、掘形規模、柱筋の通りなどに現れるように、I期とII期の間に建物構築に際しての技術上の画期を見出しうる。これはI b期からII a期にかけて同一場所で建て替えた建物においても認めうる様相である。西限を区画する溝S D 2680が、S D 2700に変更される要因と大きい関連を持つものかもしれない。建物群は位置関係から数ブロックに分けられる。I b期からII a期にかけて3ブロックに細分できるが、その後大きく2ブロックに分けることが可能である。今後、未掘区の調査が進めばさらに数ブロックふえることを予想できる。これら建物群の構成は、同規模2棟を中心にまとまる一群と、1棟の主屋を中心に井戸、倉庫を従えてまとま

る一群に大きく分けられる。これらは時期的に並存しているが、後者のタイプがB区に顕著なあり方であることを指摘できる。また建物配置にはL字型、雁行型、並列型がみられるが同様に混在しており、先後関係をそれらのうちで把えることはできない。ところで、前述した各ブロックの南北面は、区画施設としてS D 2582の一例を10世紀段階で認めうるが、全時期を通して掘立柱塼をも含めた区画施設を、それぞれの各ブロックが伴っていたかどうかは今後の検討とする。

註1 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和56年度発掘調査概報』1982

〃 『大宰府史跡—昭和57年度発掘調査概報』1983

〃 『大宰府史跡—昭和58年度発掘調査概報』1984

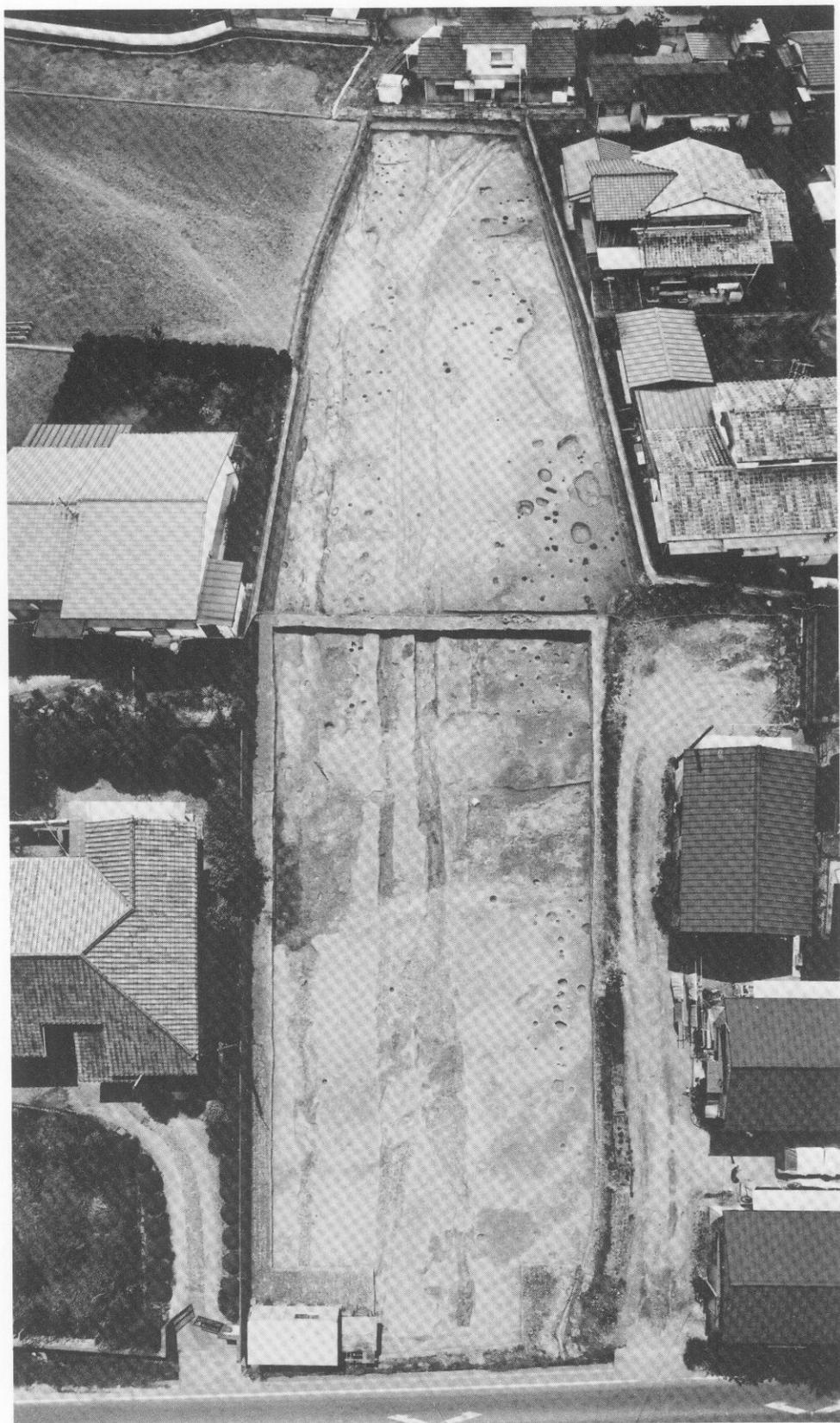
〃 『大宰府史跡—昭和59年度発掘調査概報』1985

註2 石松好雄「大宰府庁域考」『大宰府古文化論叢上巻(九州歴史資料館開館十周年記念)』1984

註3 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI』1982

註4 黒崎直「平城京における宅地の構造」狩野久編『日本古代の都城と国家』1984

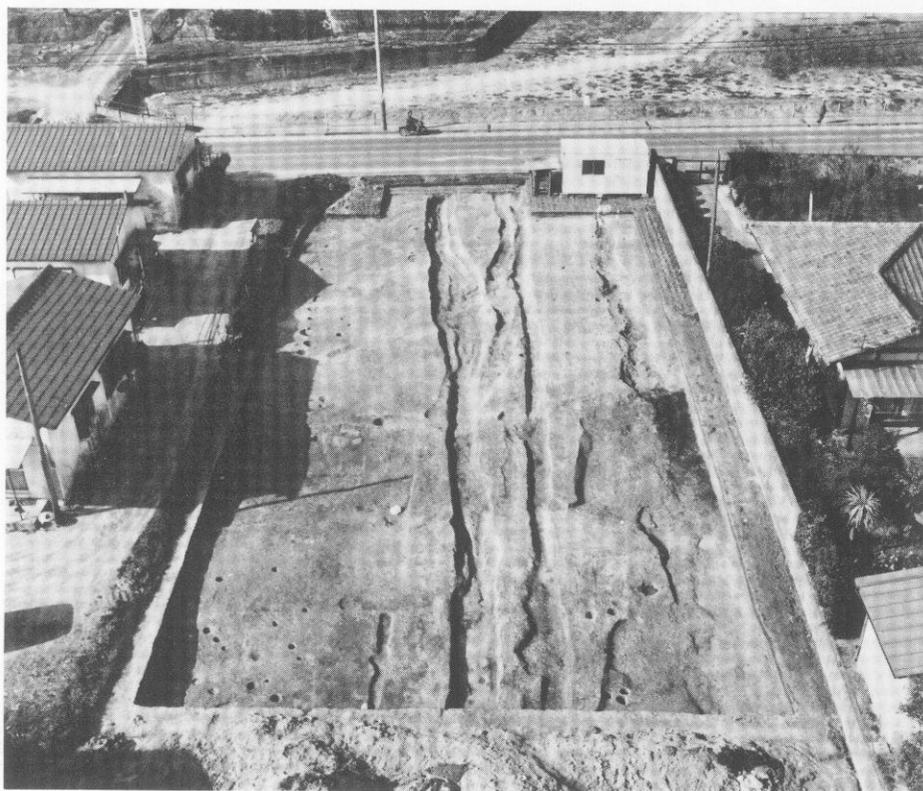
圖 版



第94次調査区全景(北から、空中写真)



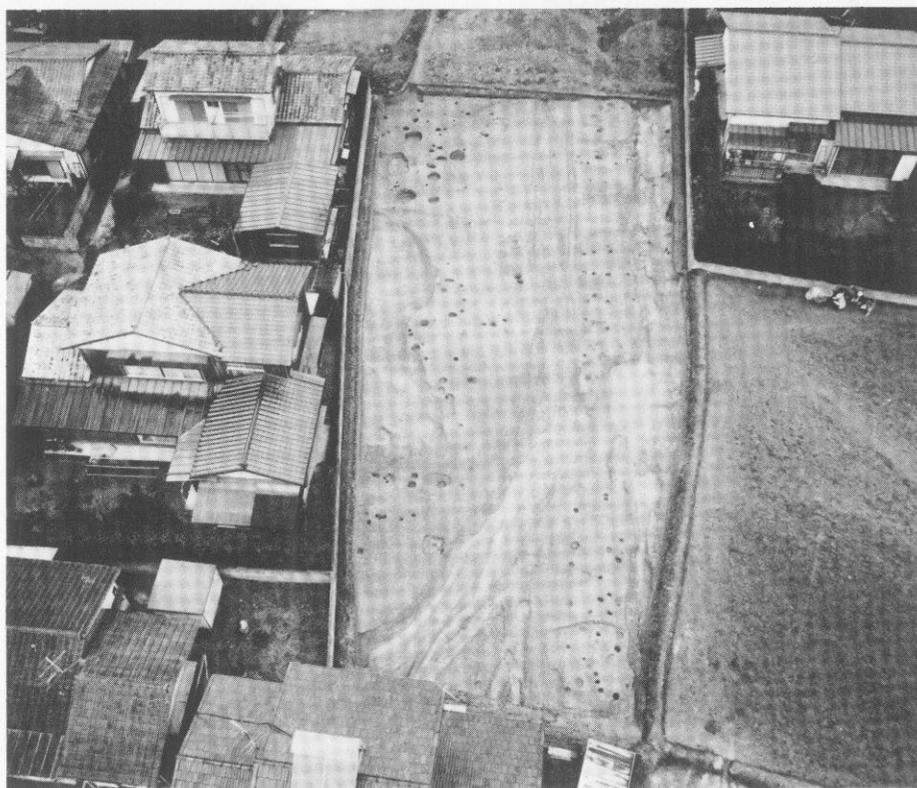
第94次調査区北半部全景(南から)



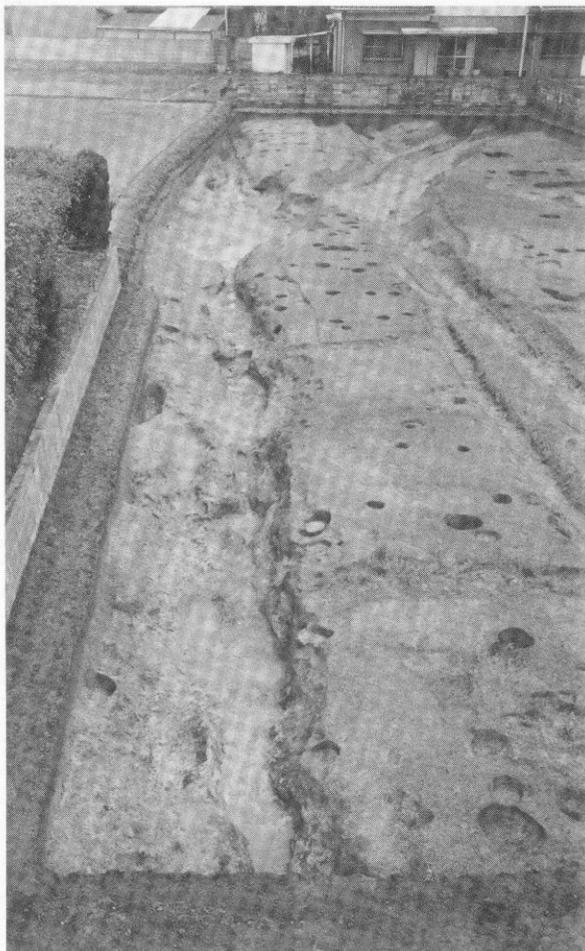
第94次調査区北半部全景(空中写真)



第94次調査区南半部全景(北から)



第94次調査区南半部全景(空中写真)



溝SD2680(北から、南半部)



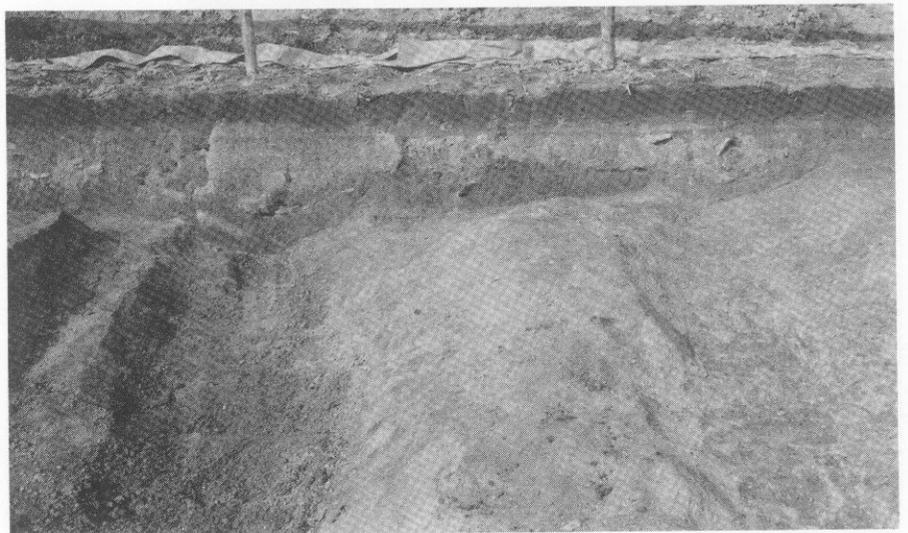
溝SD2680(北から、北半部)



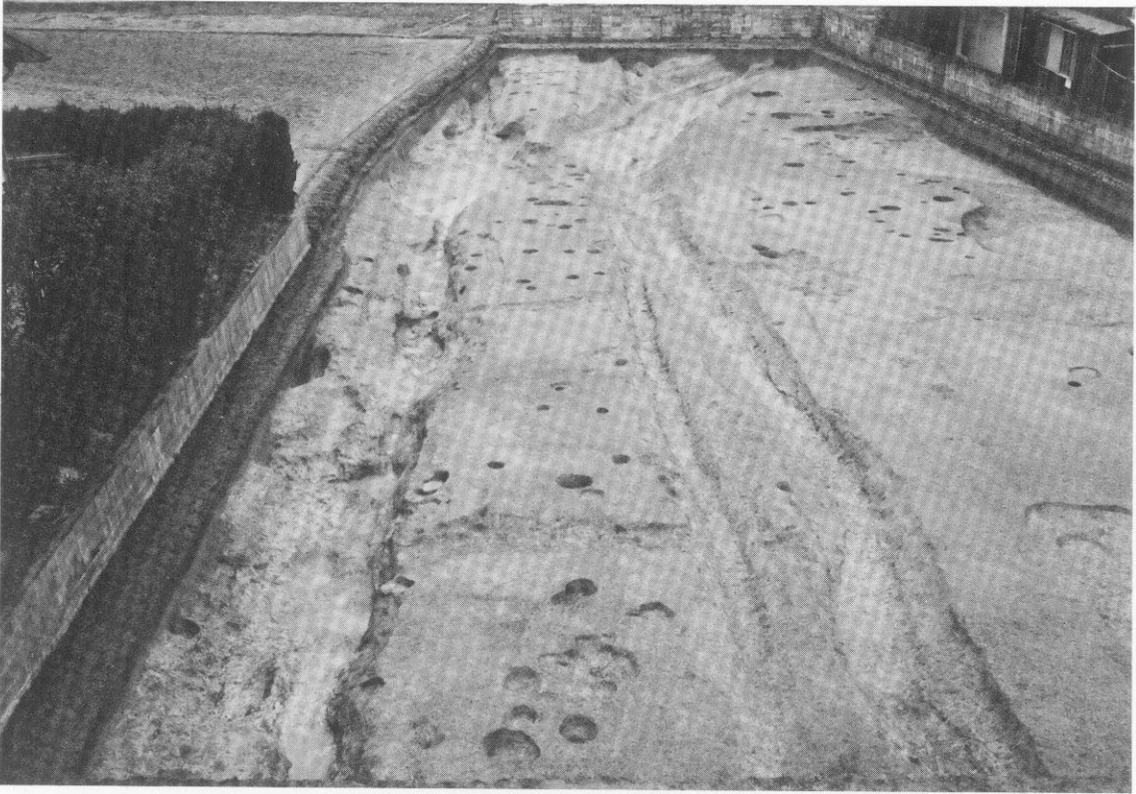
溝SD2680土層(南から)



溝SD2700(右)・2705(左)(南から)



溝SD2700(右)・2705(左)土層(南から)



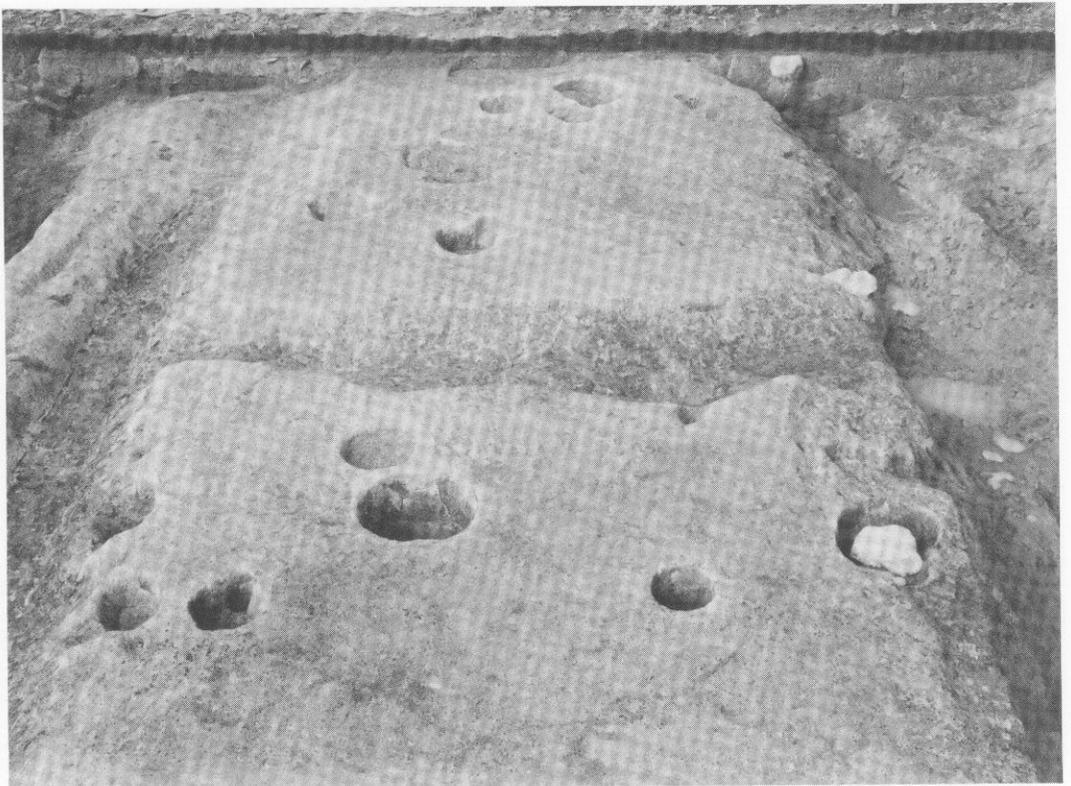
溝SD2680・2700間の遺構(北から)



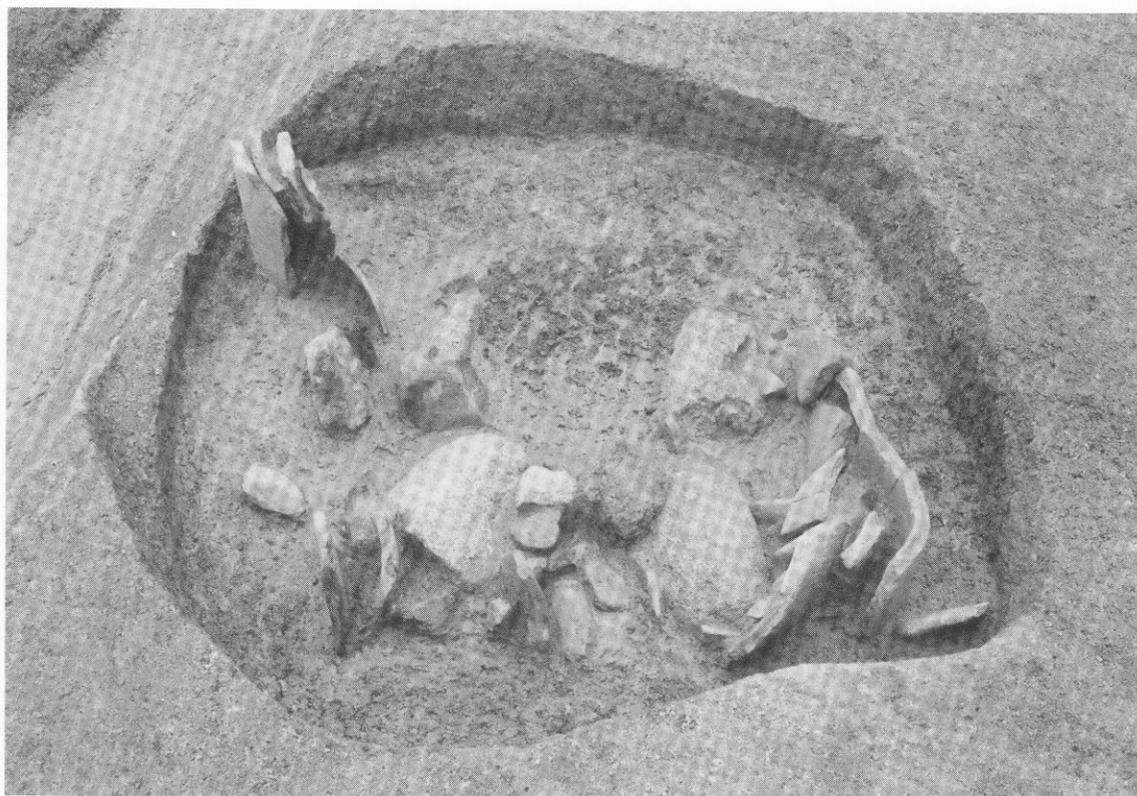
柵状遺構SX2701・2703(北から)



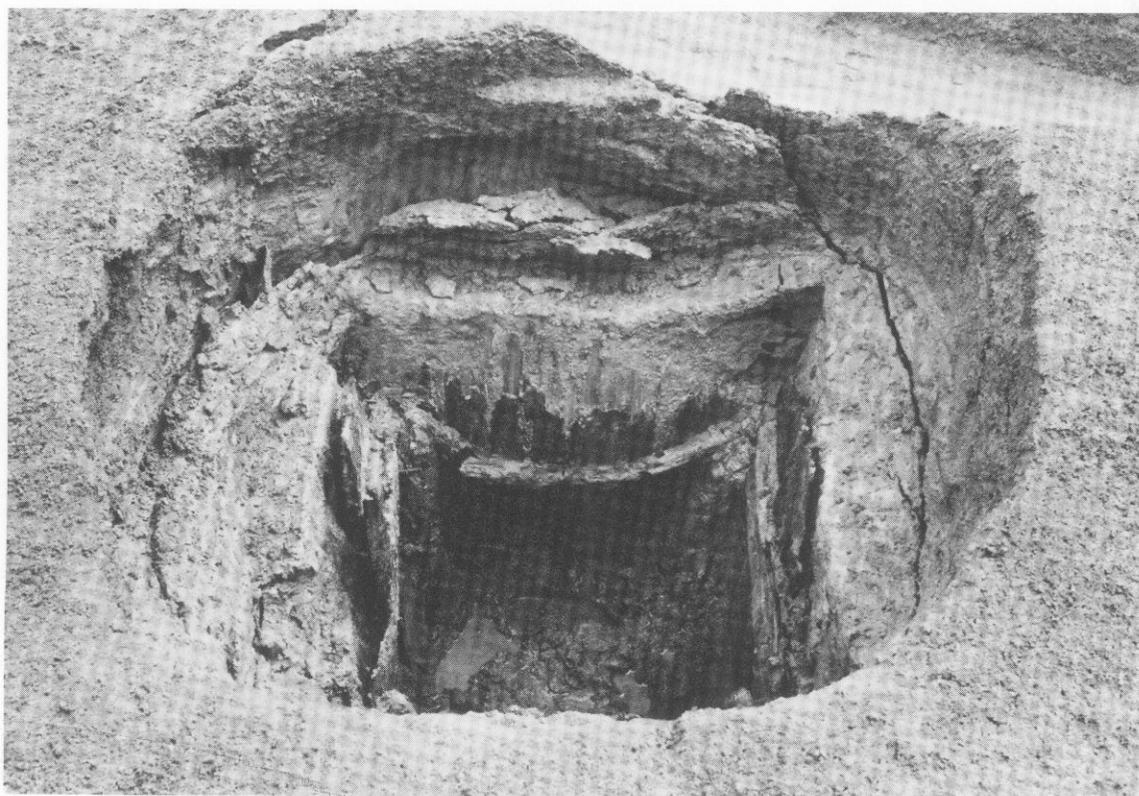
柵状遺構SX2714(北から)



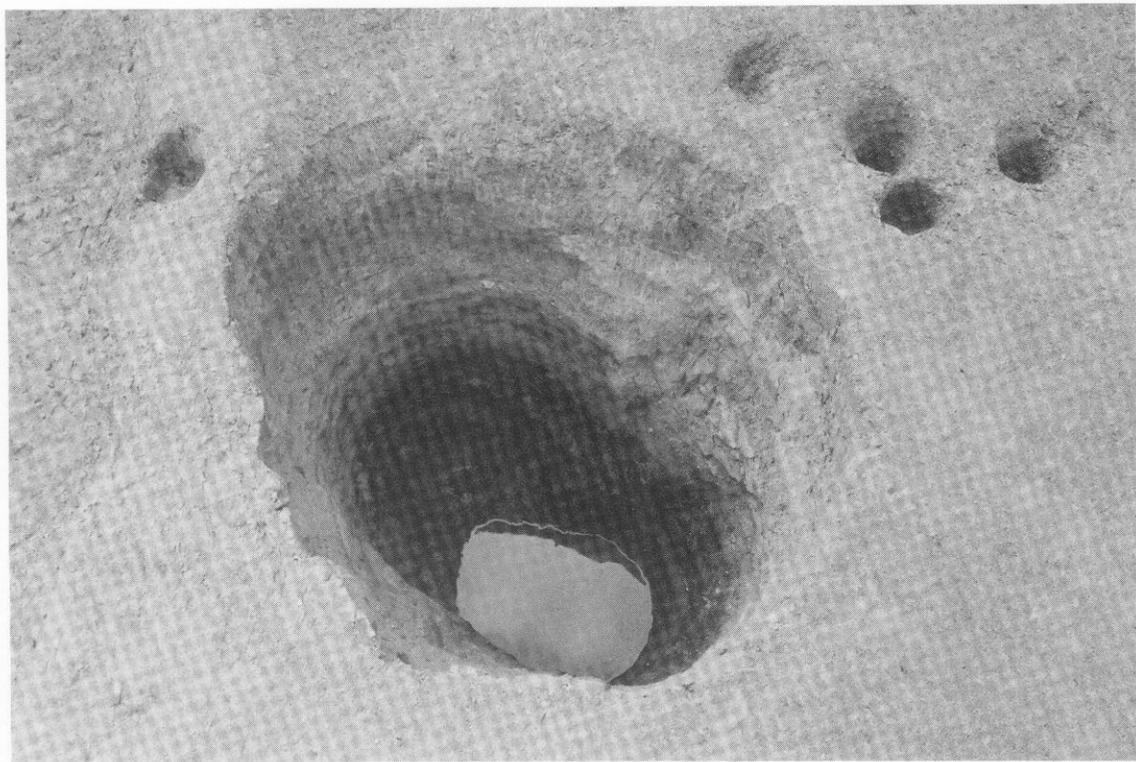
掘立柱建物状遺構SX2735(南から)



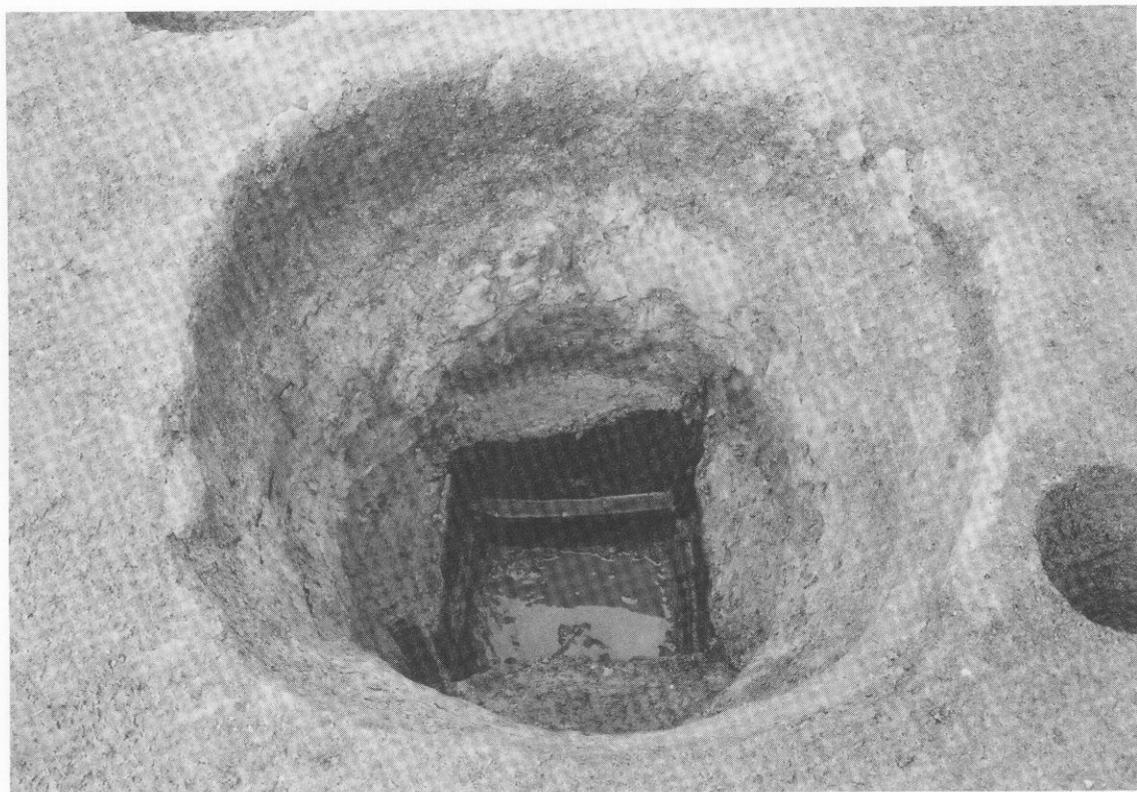
井戸SE2715(北から)



井戸SE2715(西から)



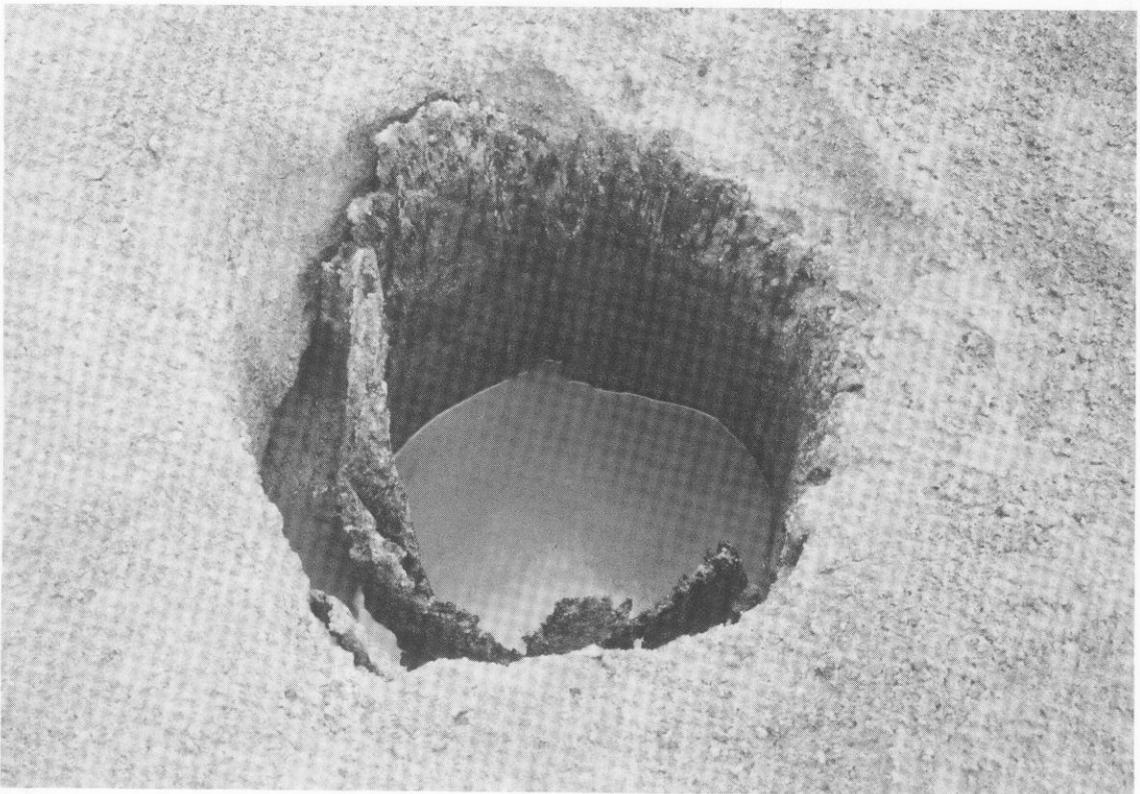
井戸SE2720・2725(東から)



井戸SE2730(東から)



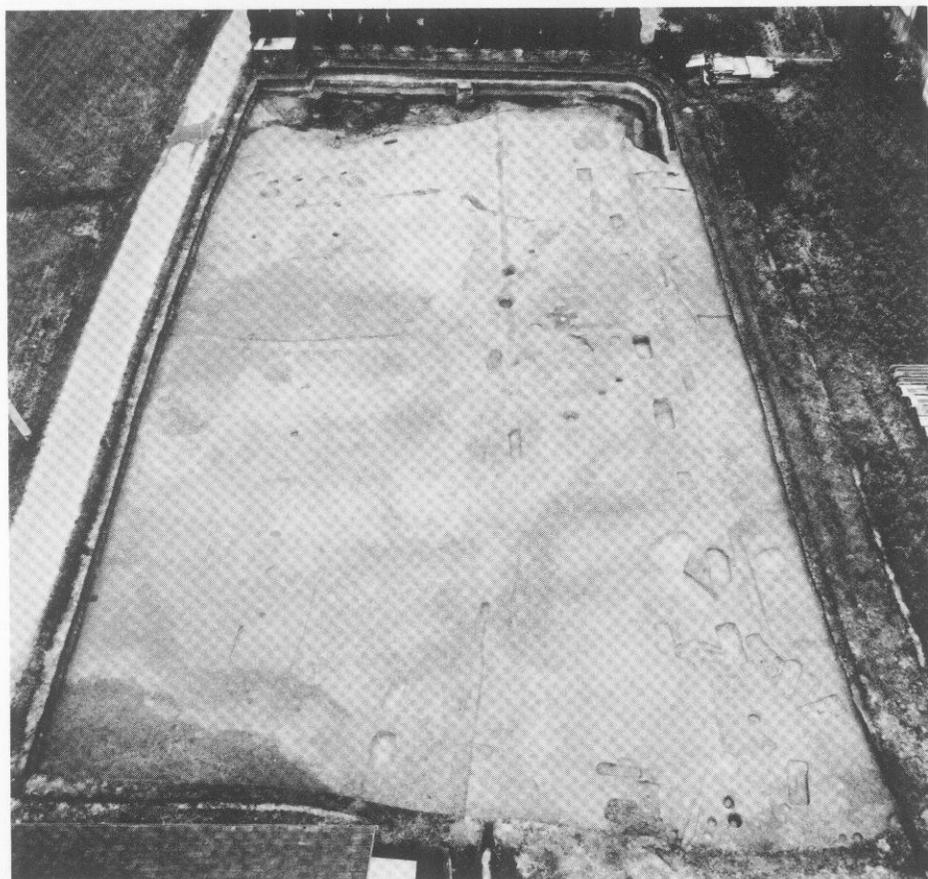
井戸SE2735(東から)



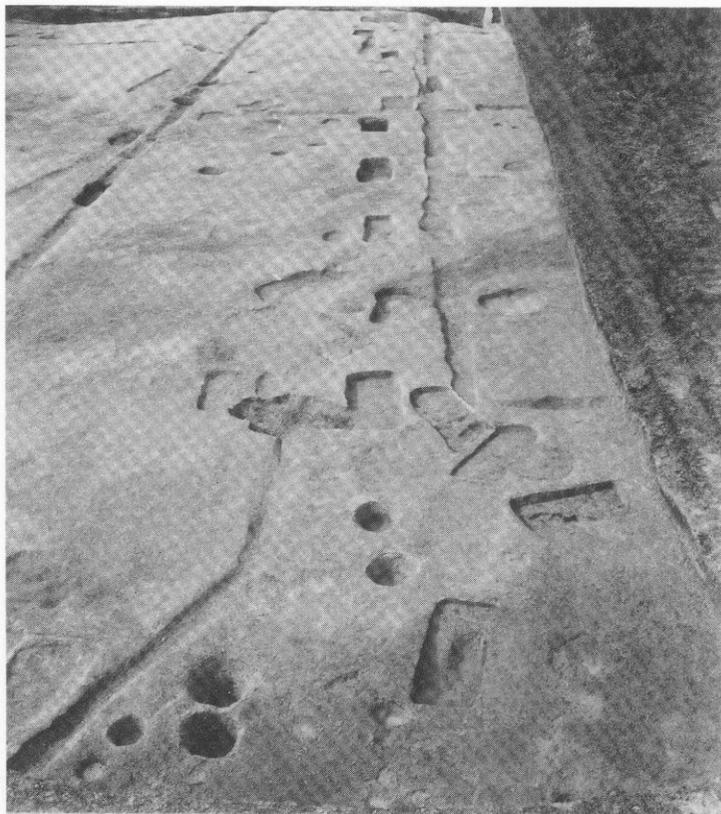
井戸SE2740(南から)



第95次調査区全景(南から)



第95次調査区全景(空中写真)

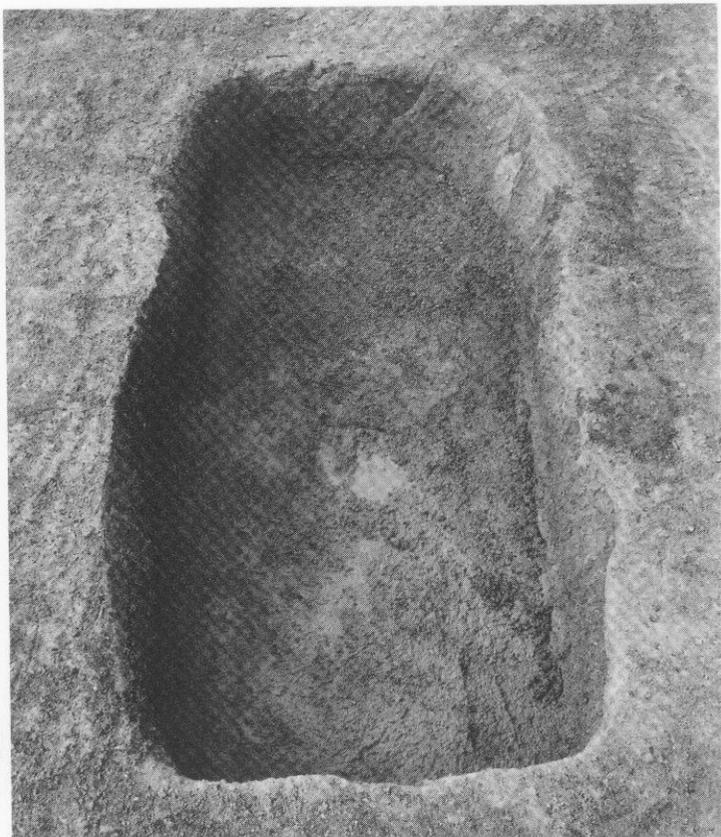


第95次調査区土壤群(南から)

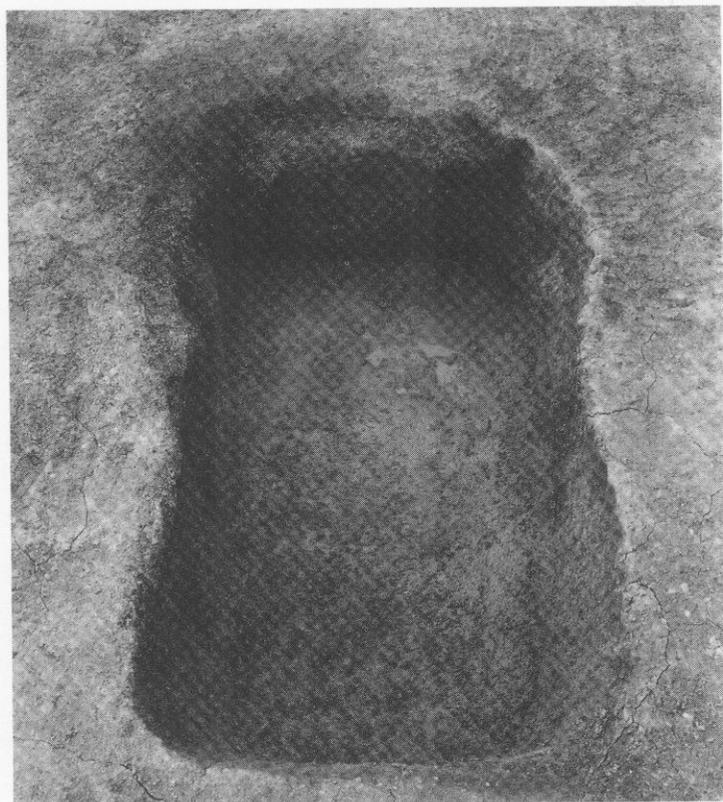


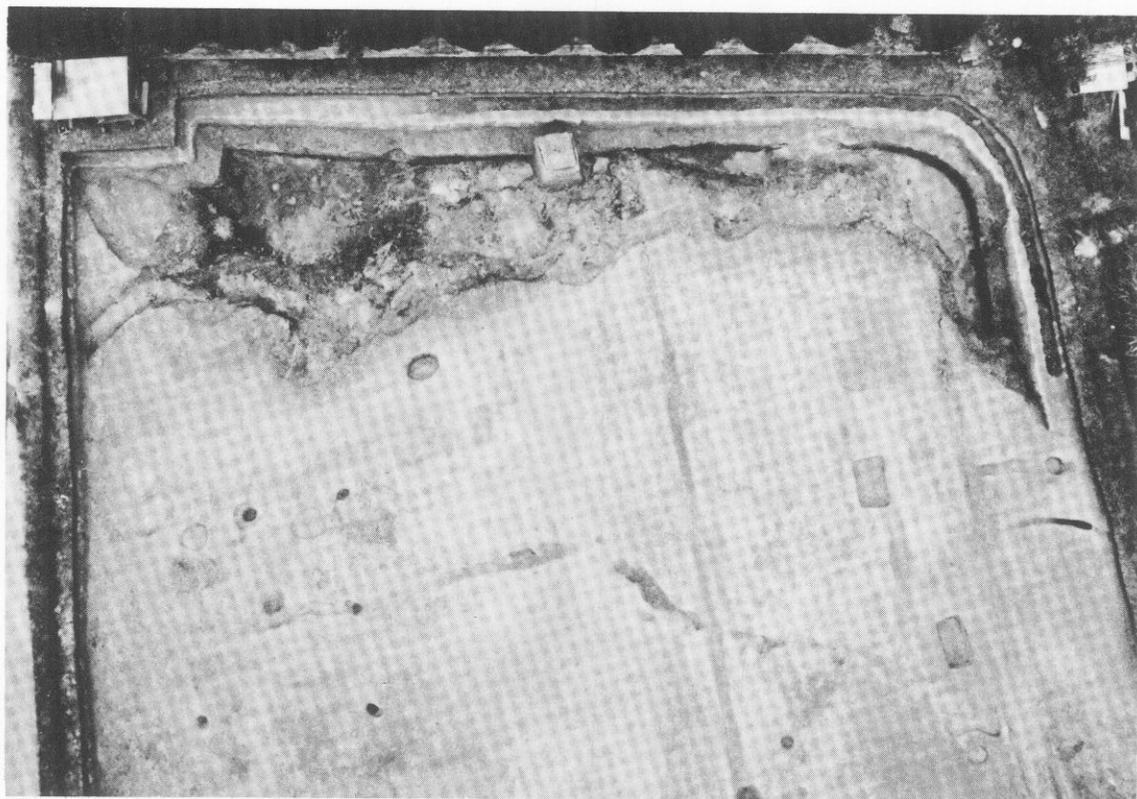
第95次調査区土壤群(空中写真)

土壙SK2773(南から)



土壙SK2774(南から)

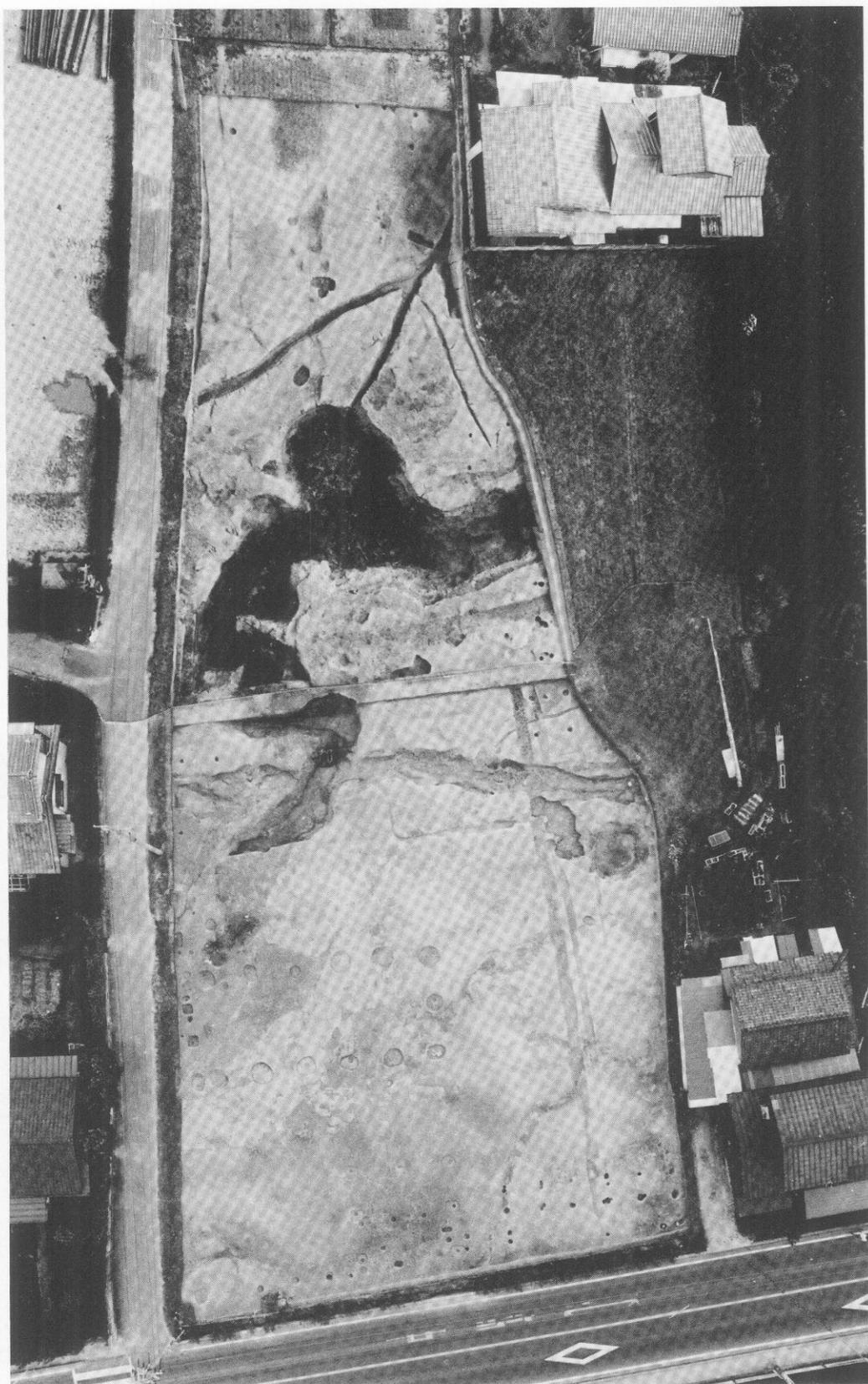




溝SD2760(空中写真)



溝SD2760(東から)



第96次調査区全景(北から、空中写真)



第96次調査区北半部全景(南から)



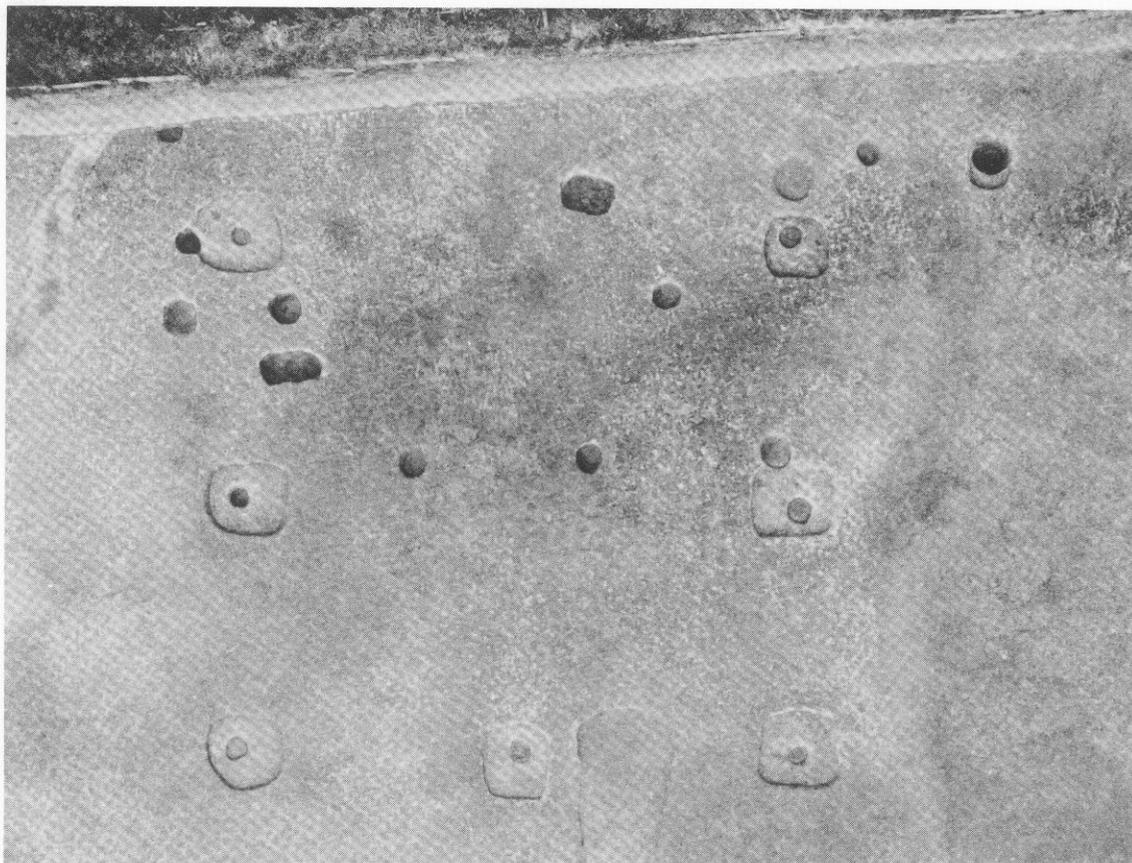
第96次調査区南半部全景(南から)



掘立柱建物SB2825・2820(右端) (空中写真)



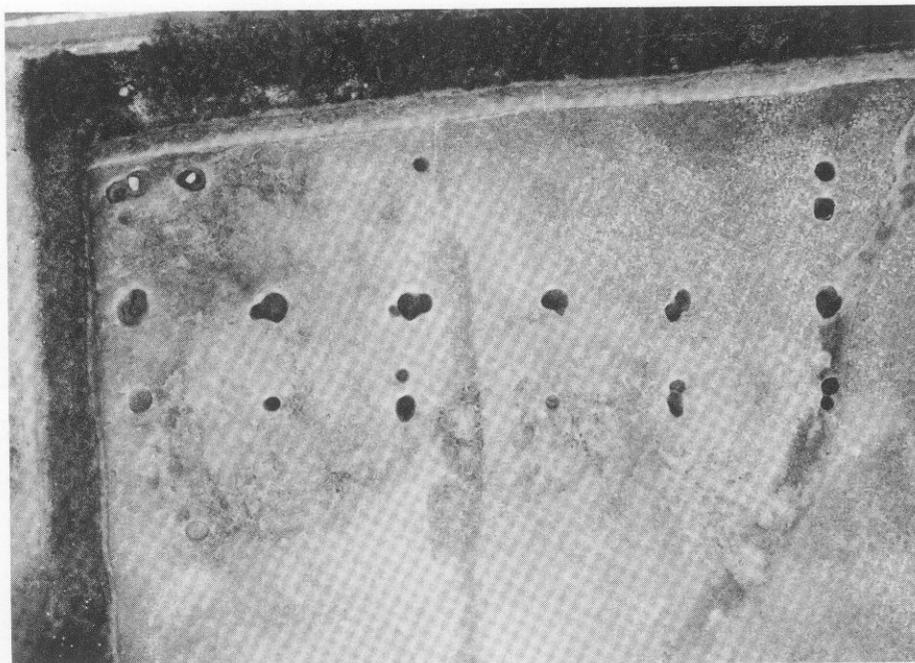
掘立柱建物SB2825・2820(西から)



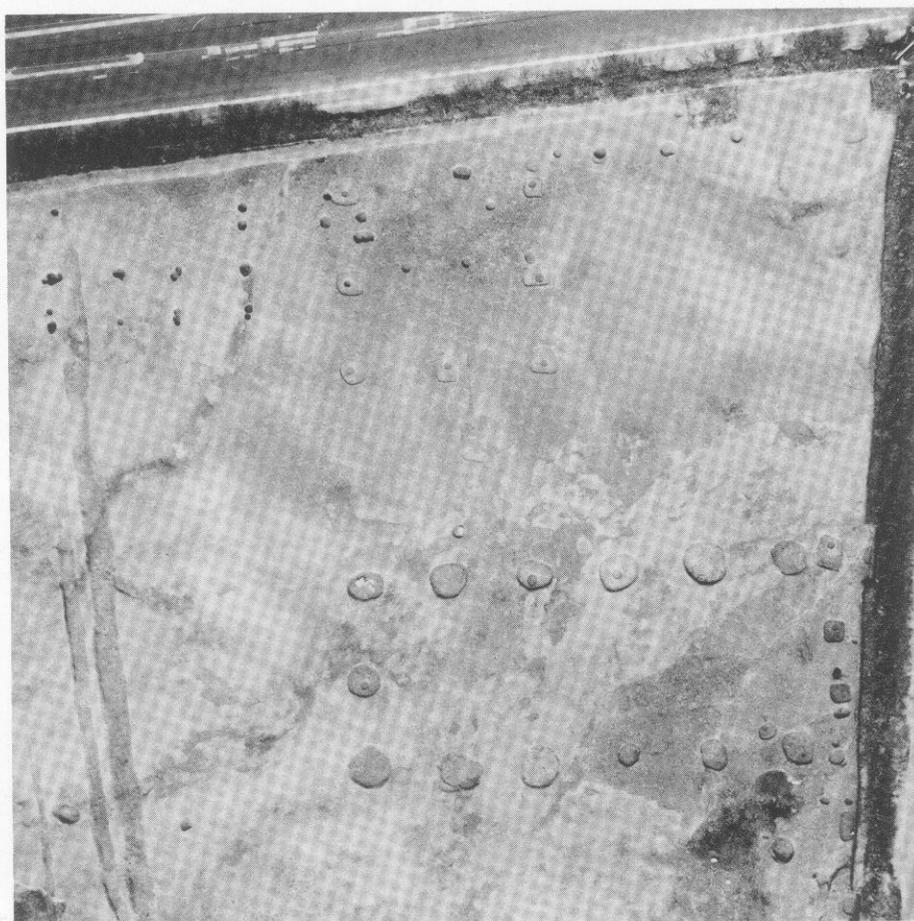
掘立柱建物SB2830・柵SA2831(空中写真)



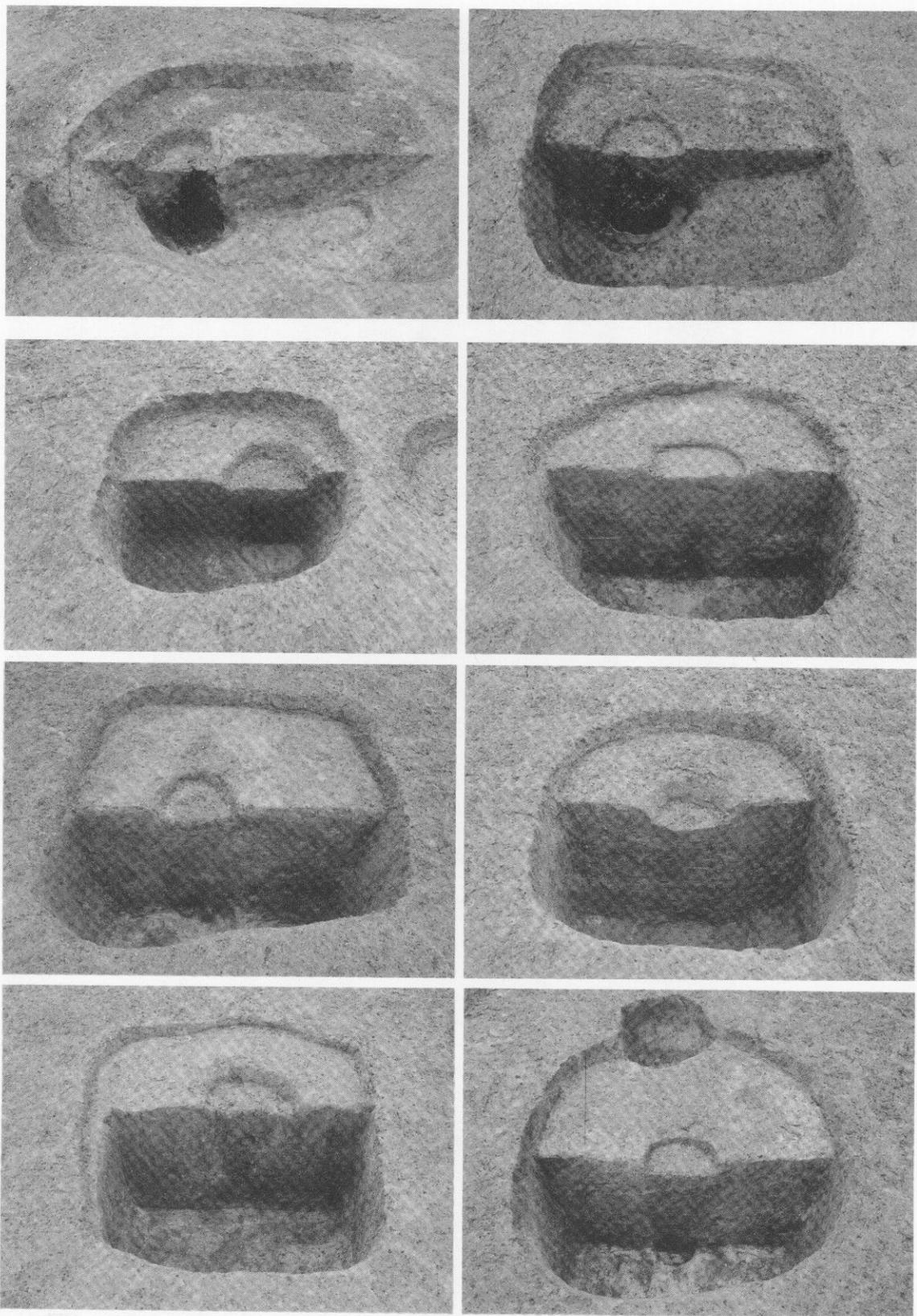
掘立柱建物SB2830・柵SA2831(南から)



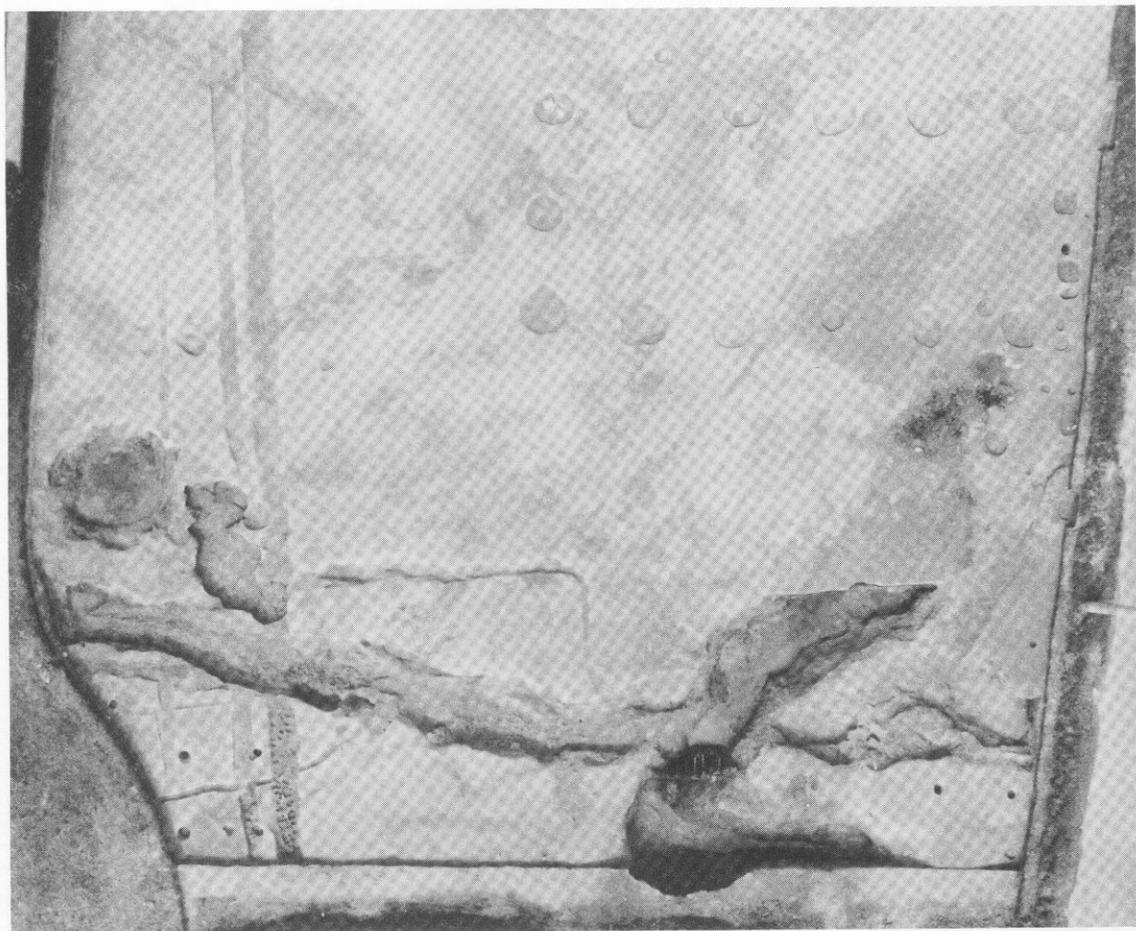
掘立柱建物SB2835(空中写真)



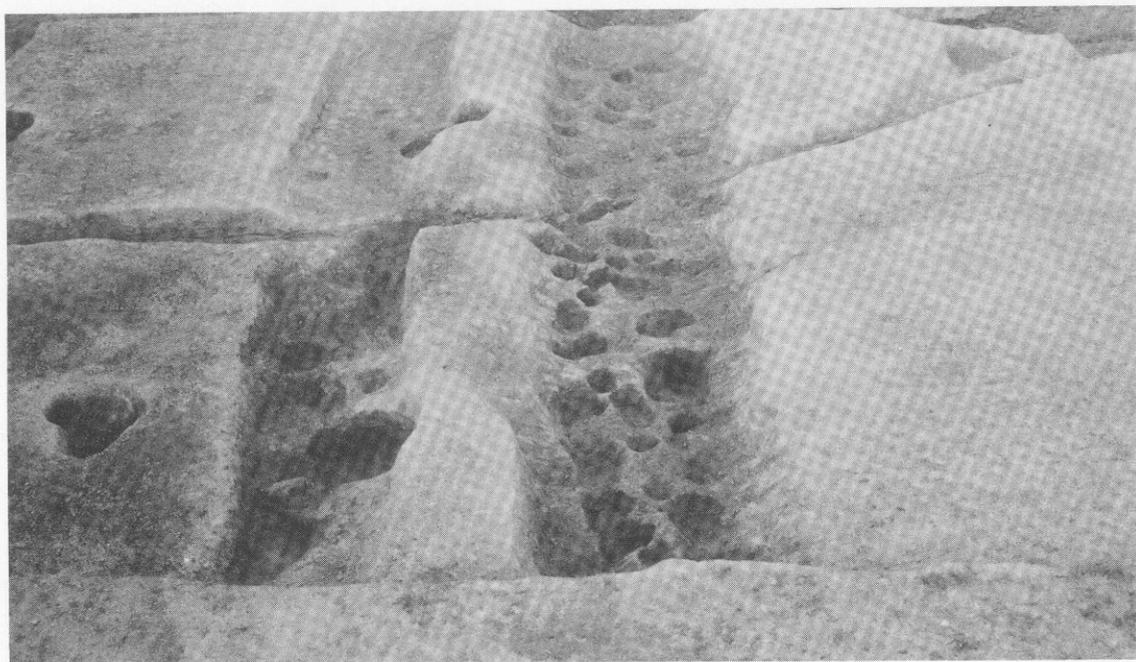
掘立柱建物の配置(空中写真)



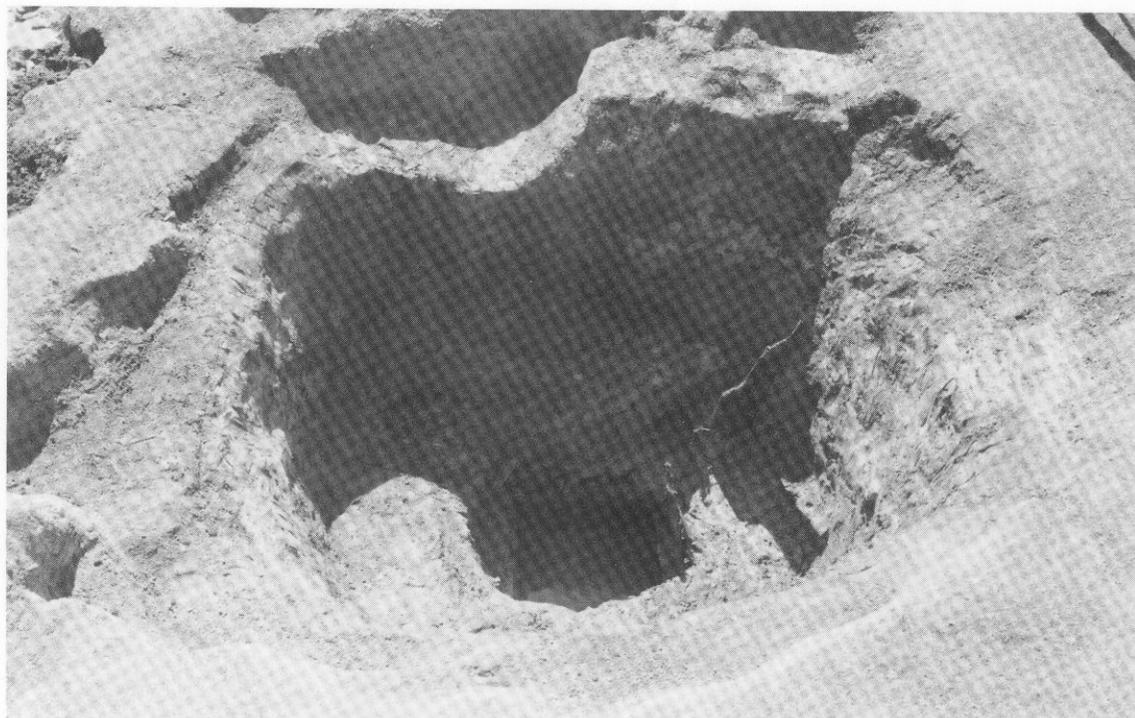
掘立柱建物SB2820・2830柱掘形



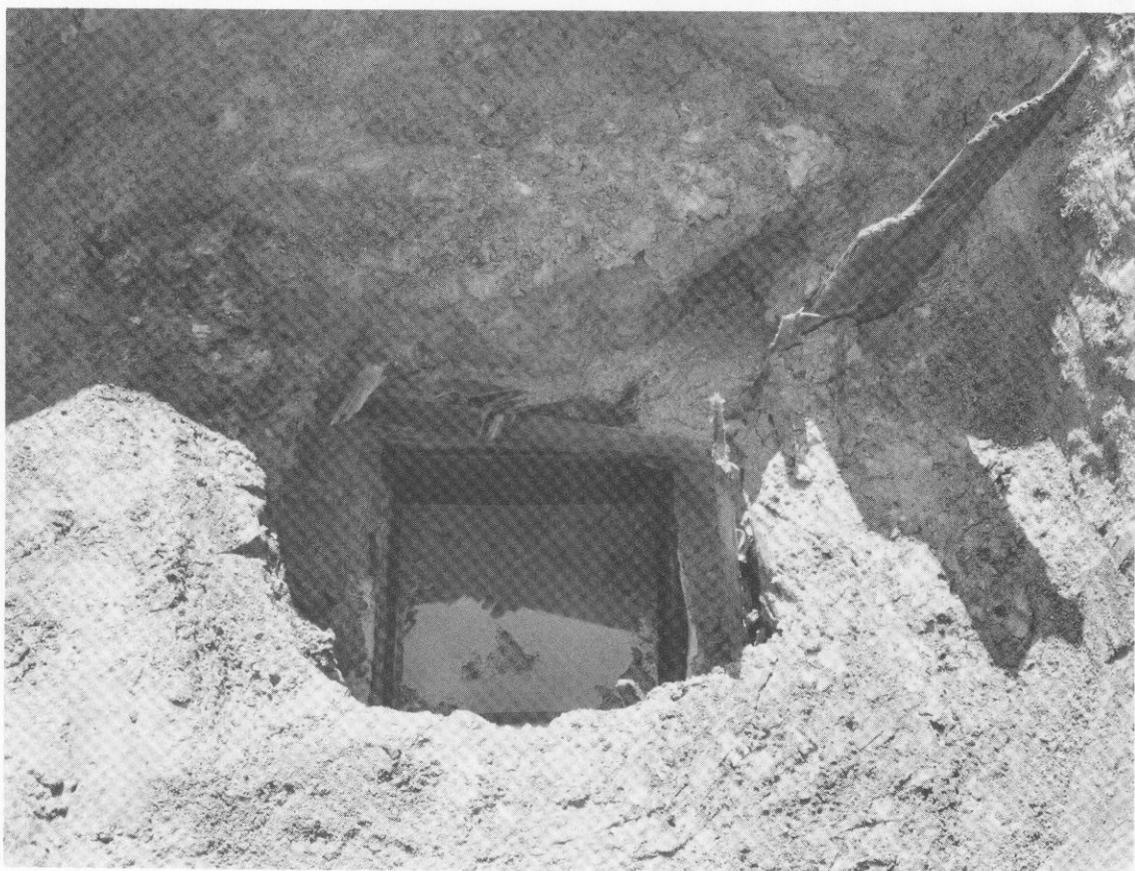
溝SD2840・2817・2760など(空中写真)



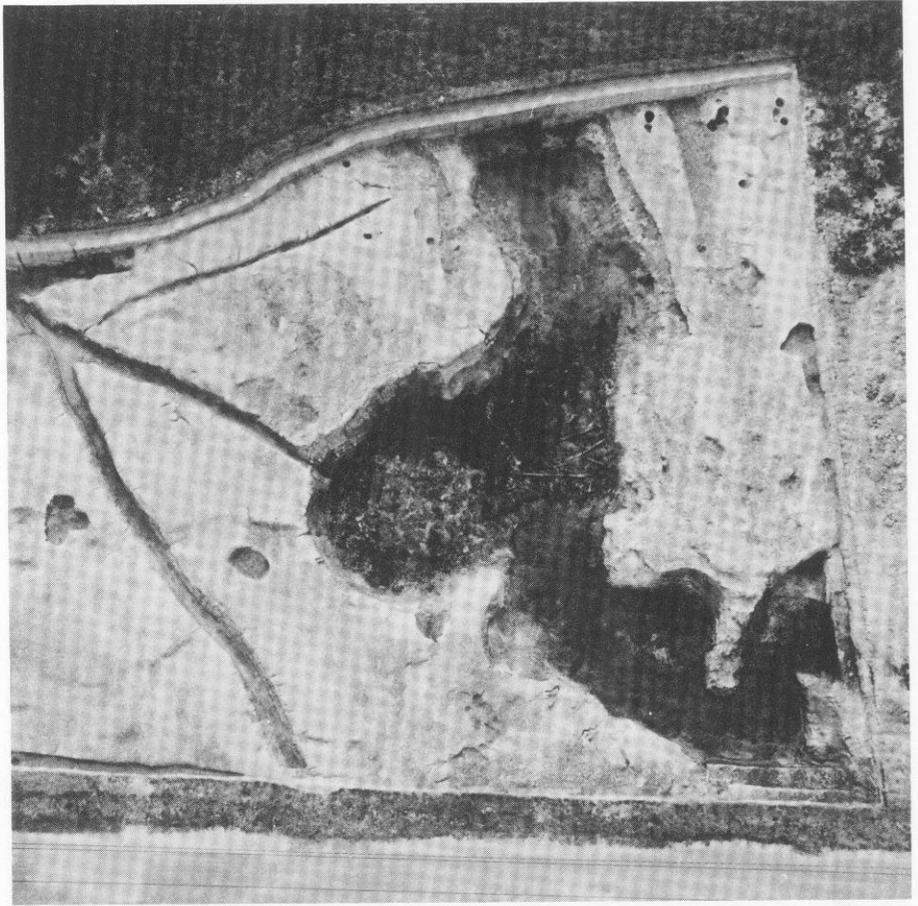
溝SD2840の石組抜き取り痕(南から)



井戸SE2845(北から)



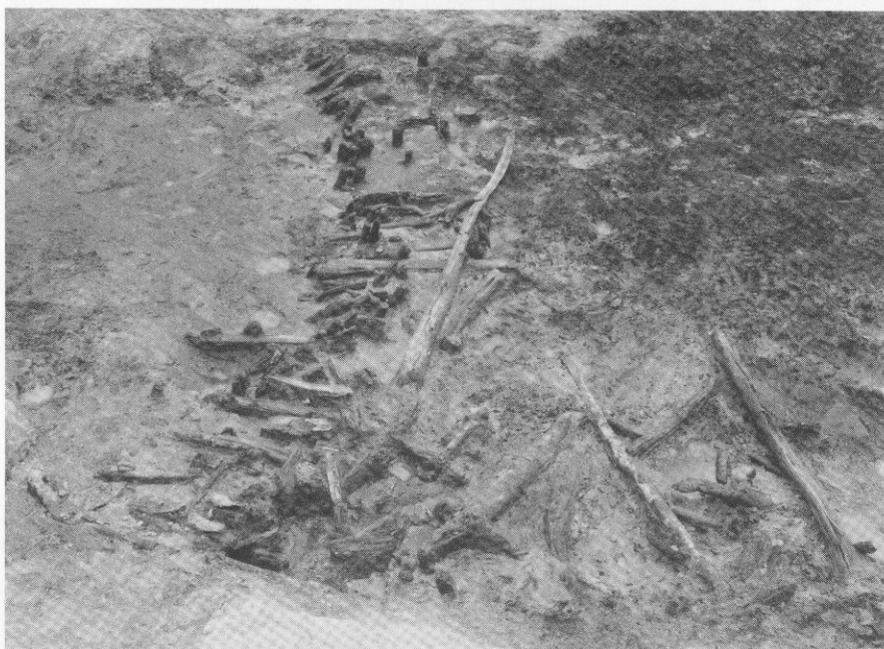
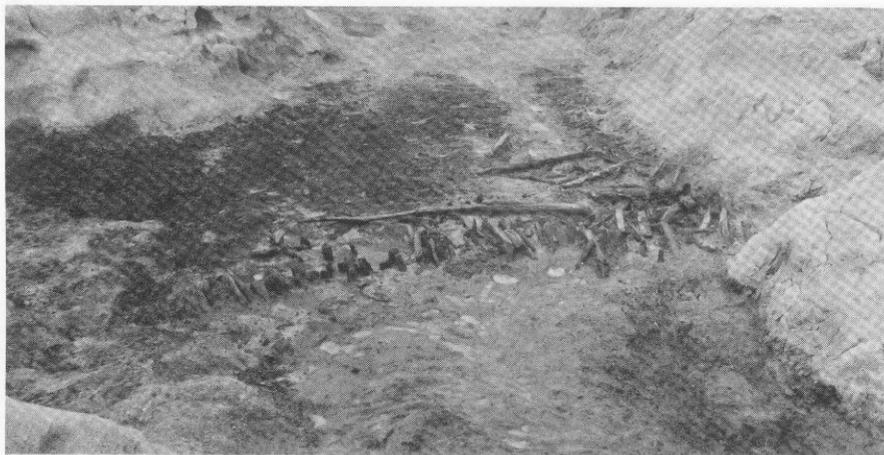
井戸SE2845拡大(北から)



溝SD2760(空中写真)



溝SD2760(東から)



堰SX2815(上:東から, 下:北から)



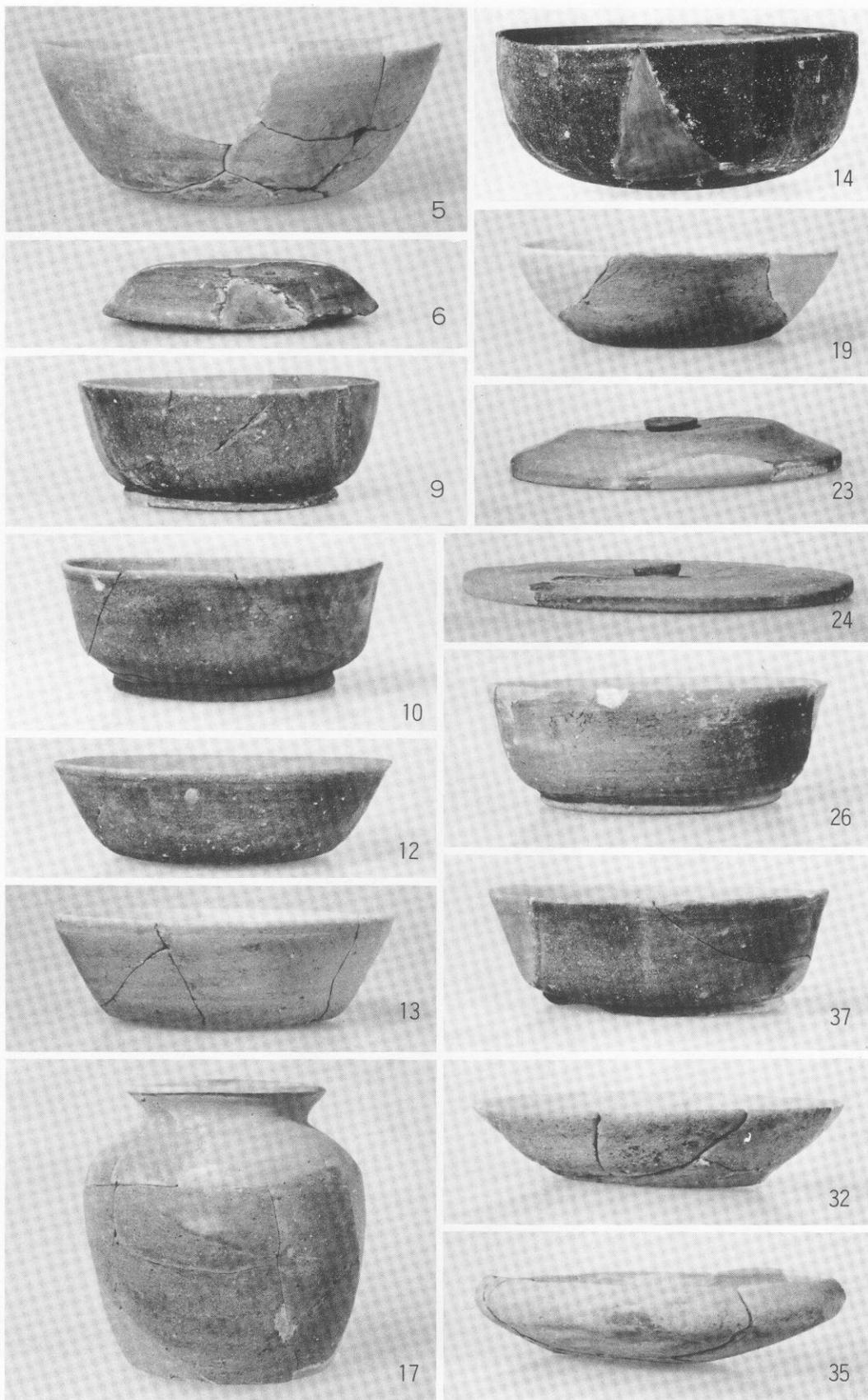
護岸施設SX2816(北から)

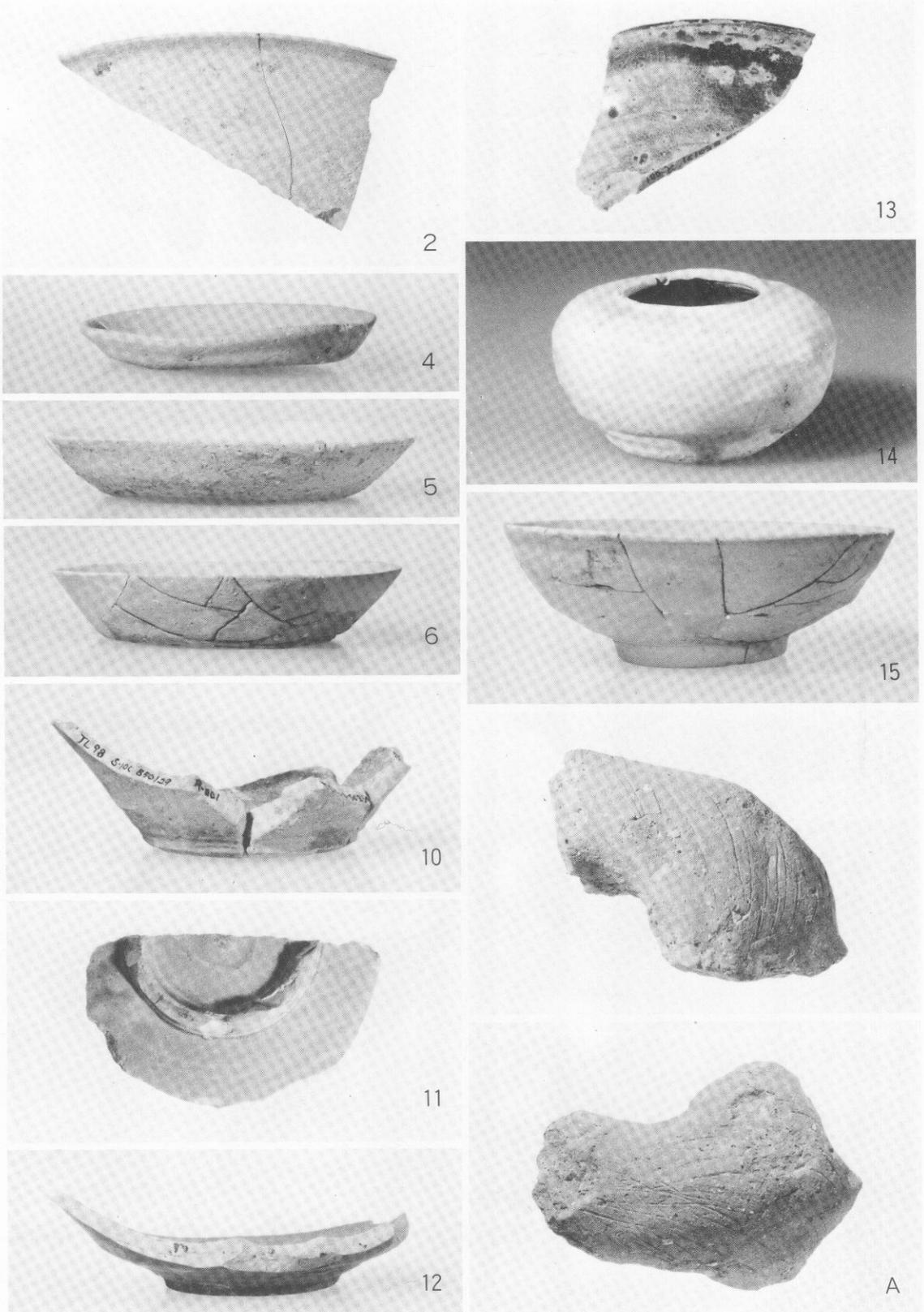
溝SD2817(西から)



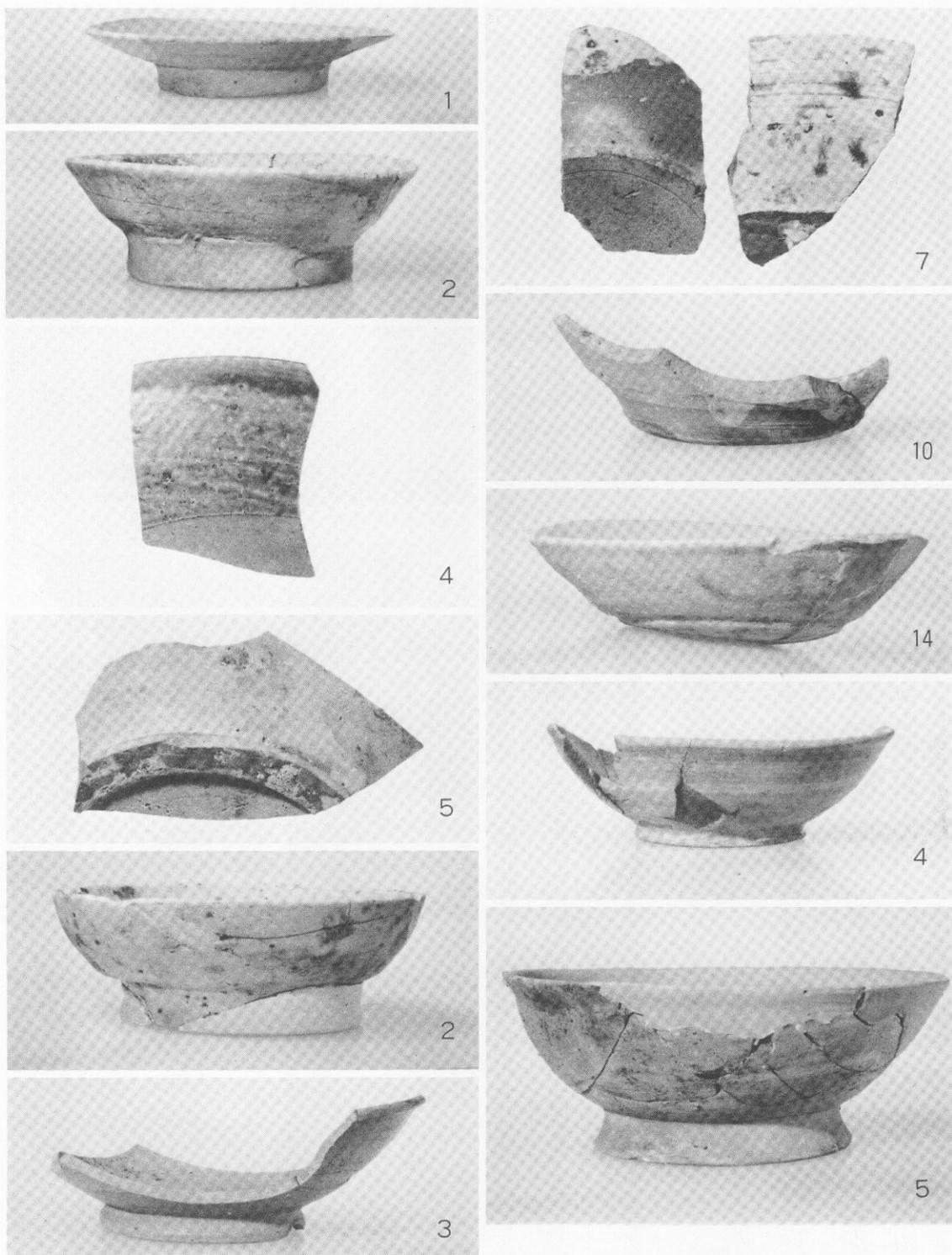
溝SD2817(東から)



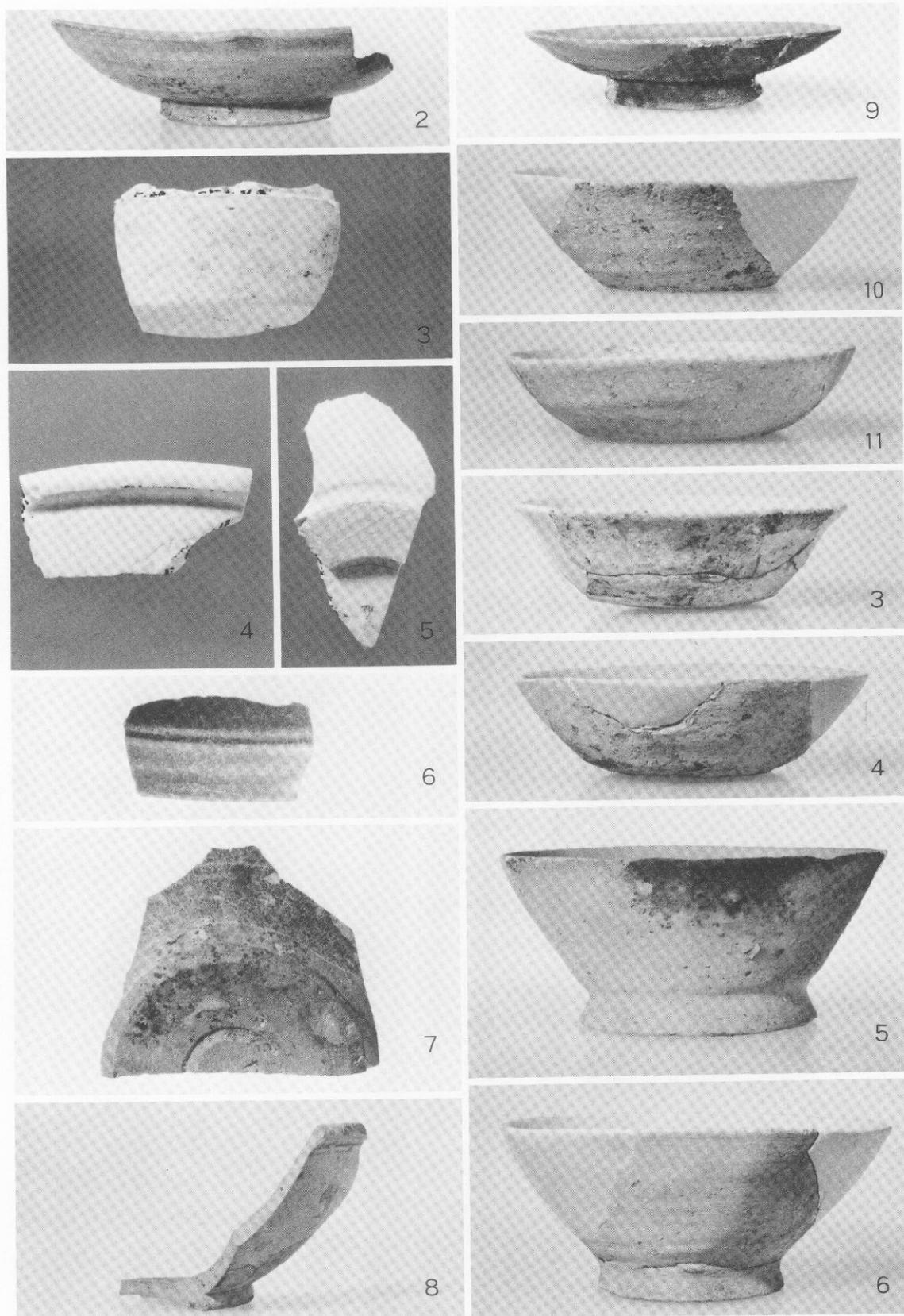




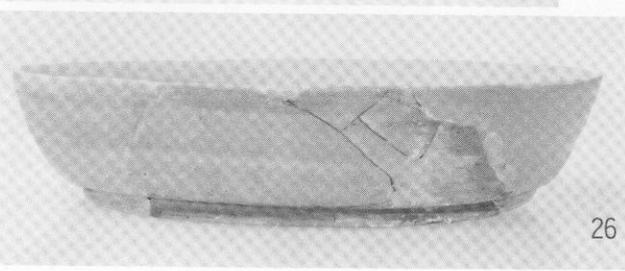
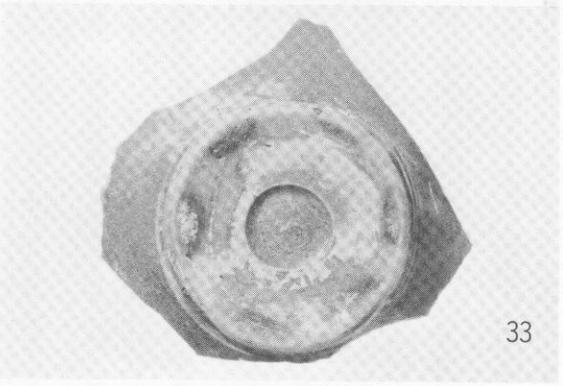
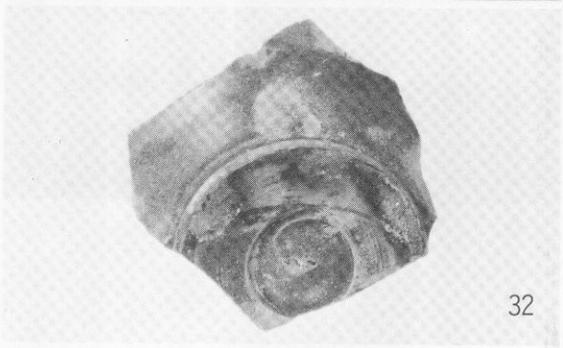
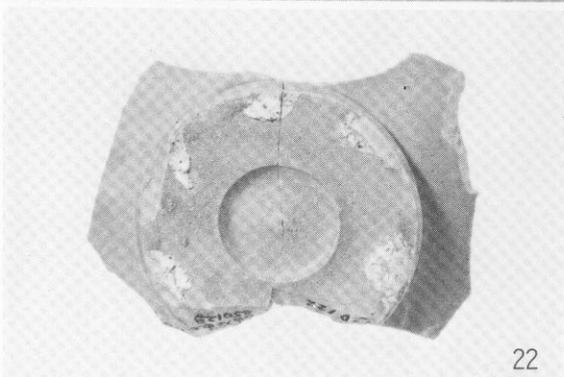
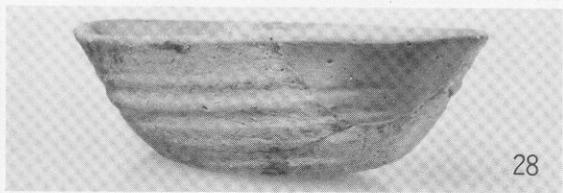
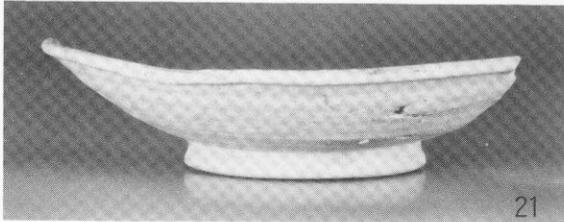
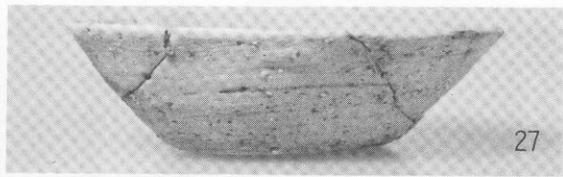
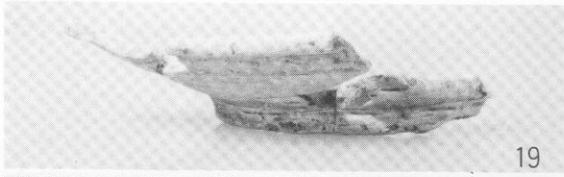
第94次調査 SD2700・2705・2710出土土器・陶磁器

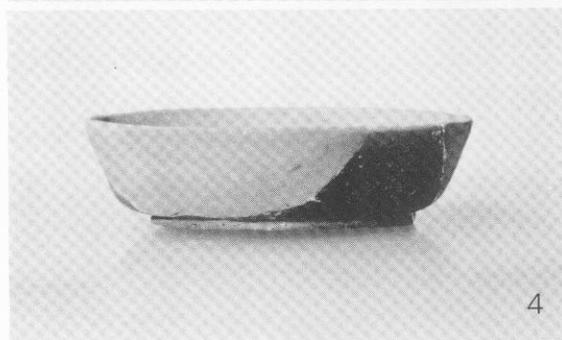
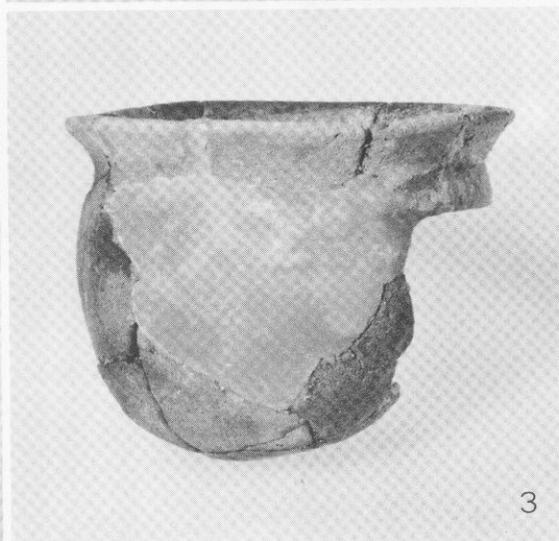


第94次調査 SE2715・2720・2730・2735・2740、SK2723、SX2747出土土器・陶磁器

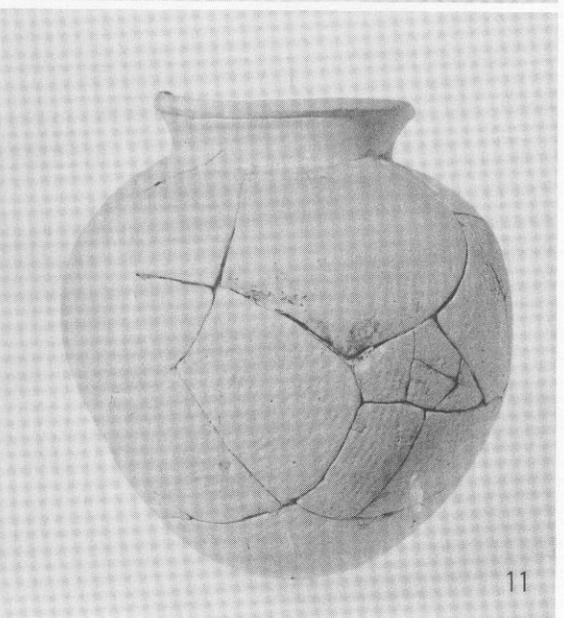
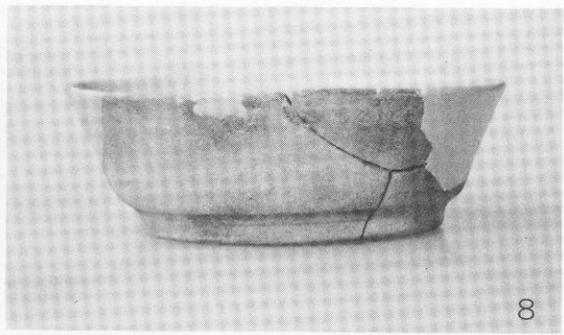
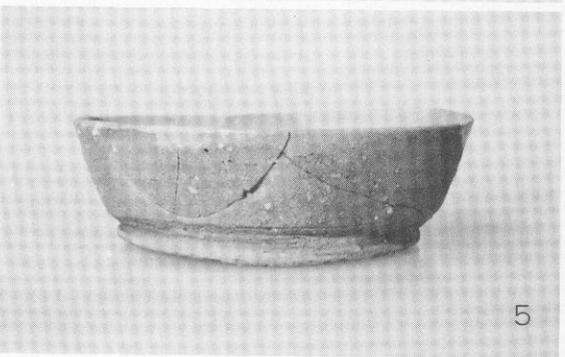
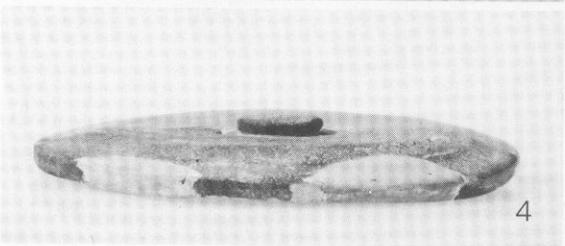
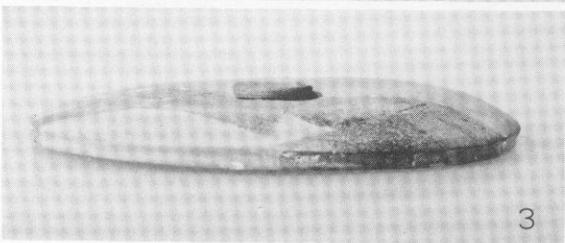
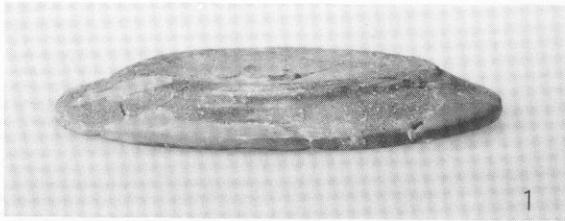


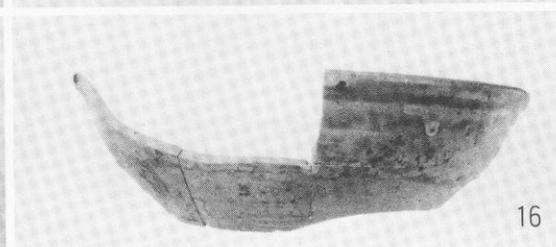
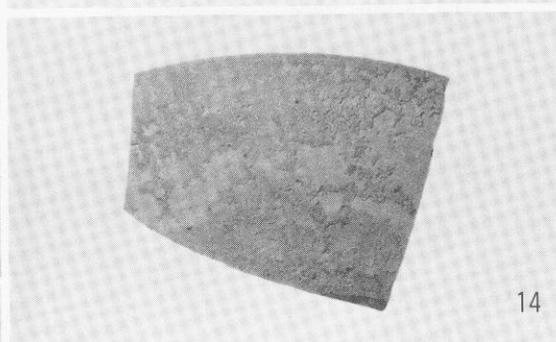
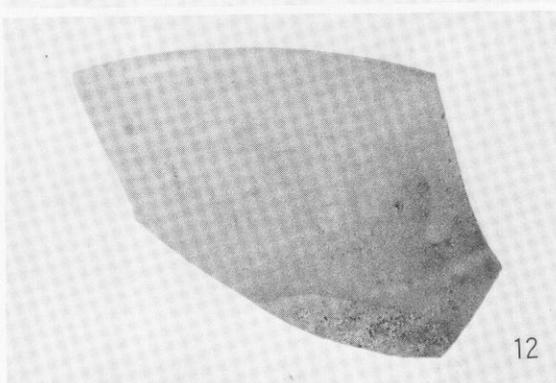
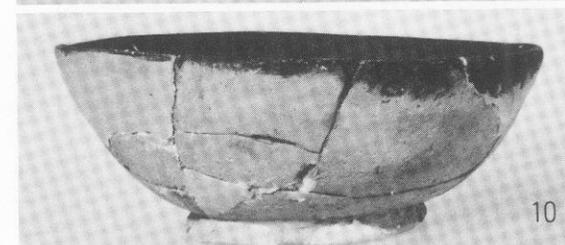
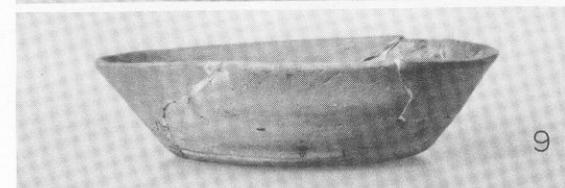
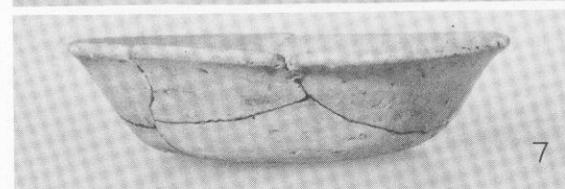
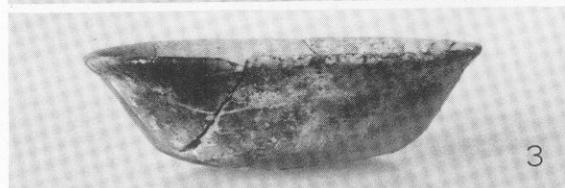
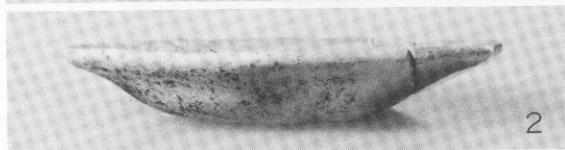
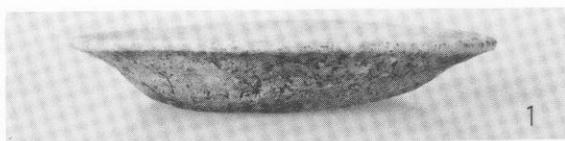
第94次調査 灰褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器

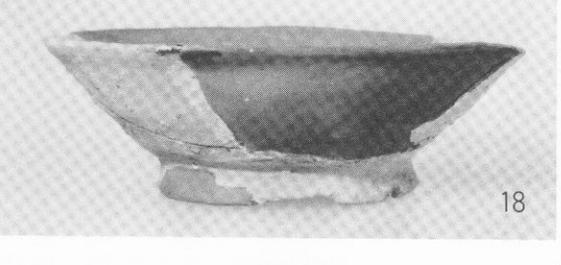
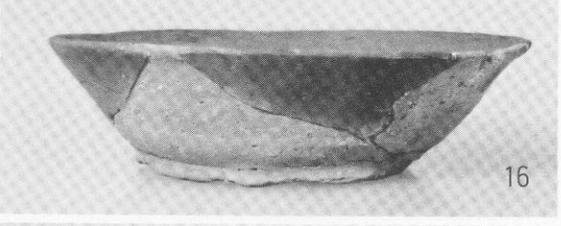
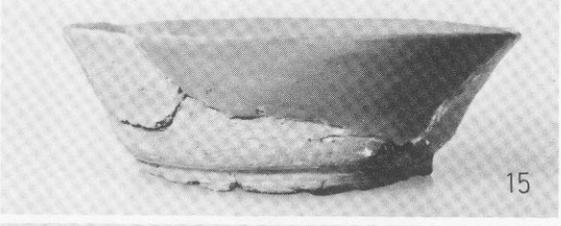
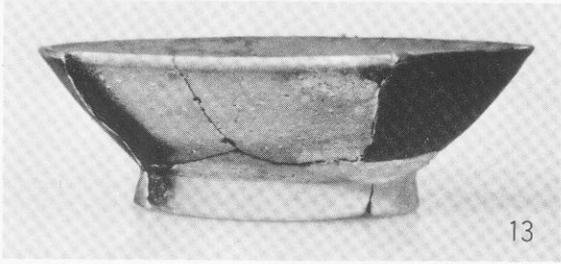
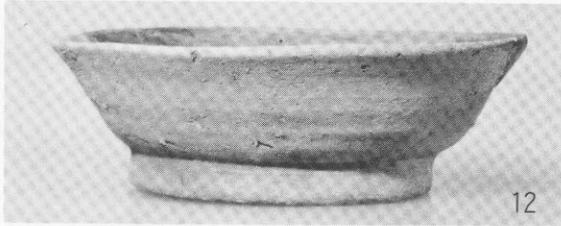
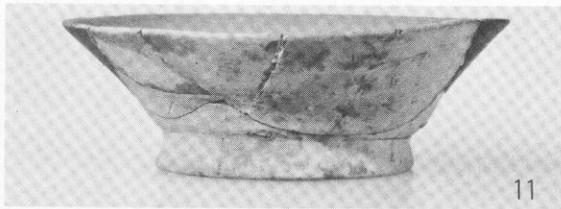
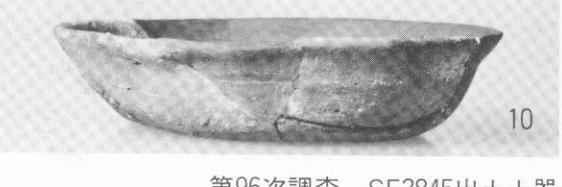
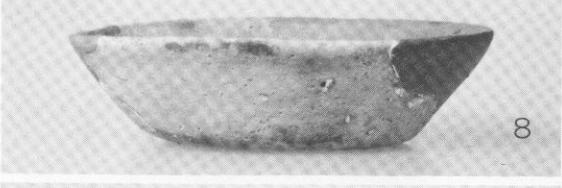
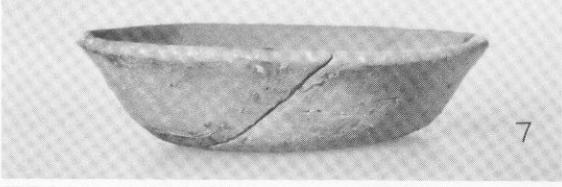
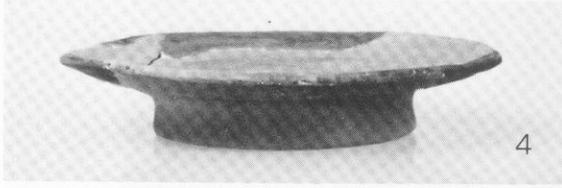
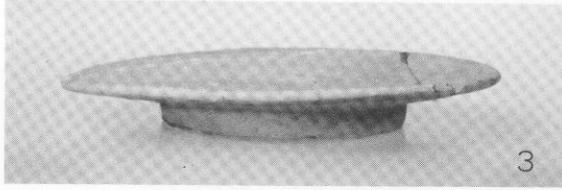
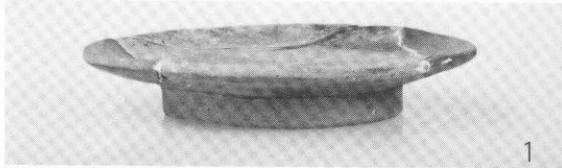




第95次調査 SD2760上層・SK2774・SK2780・SD2760下層出土土器





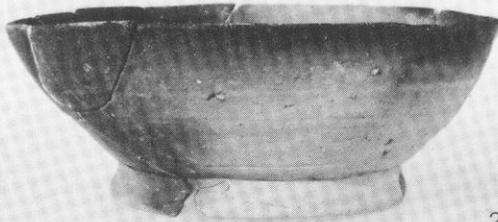




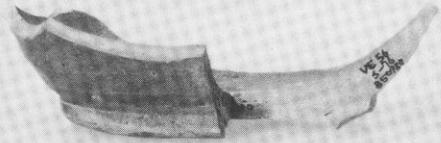
20



21



22



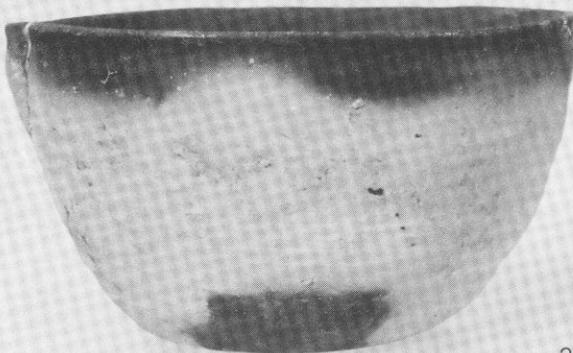
24



25



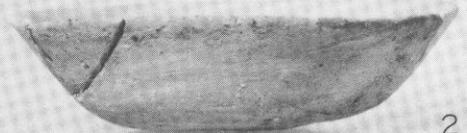
26



23



1



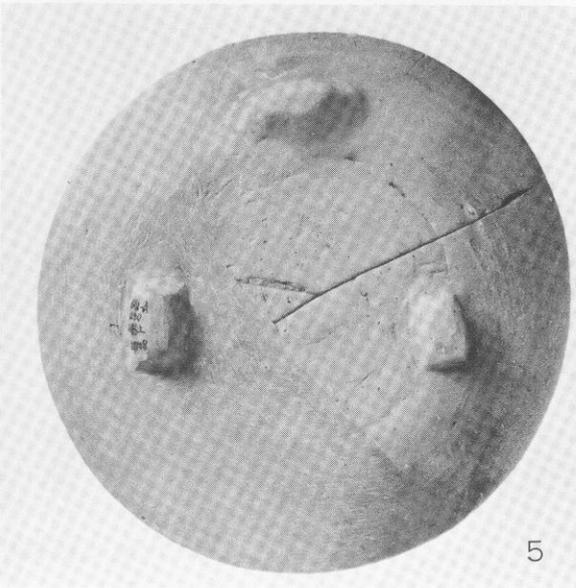
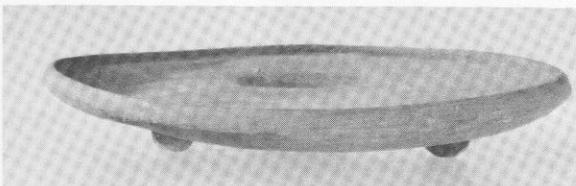
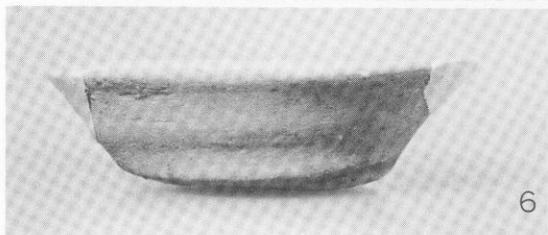
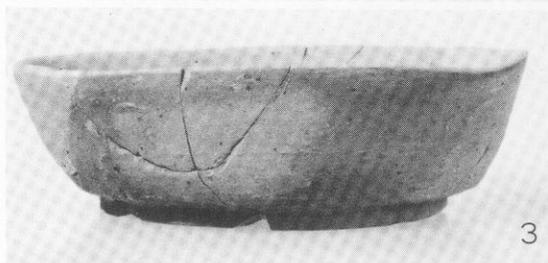
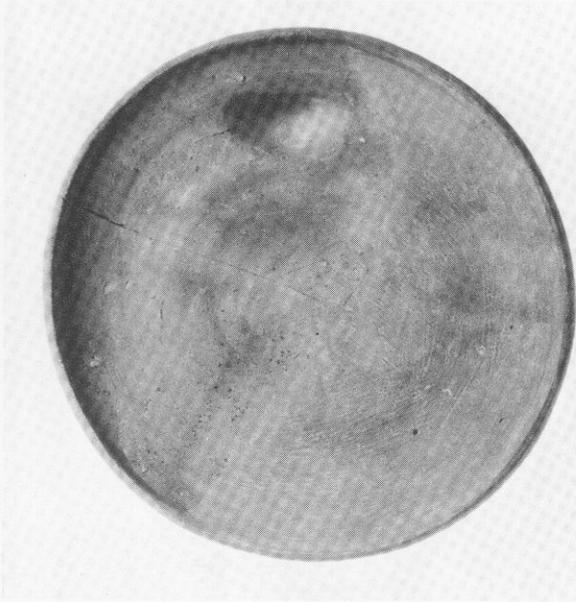
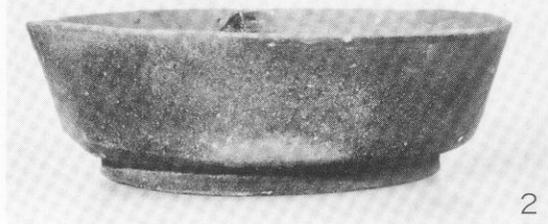
2

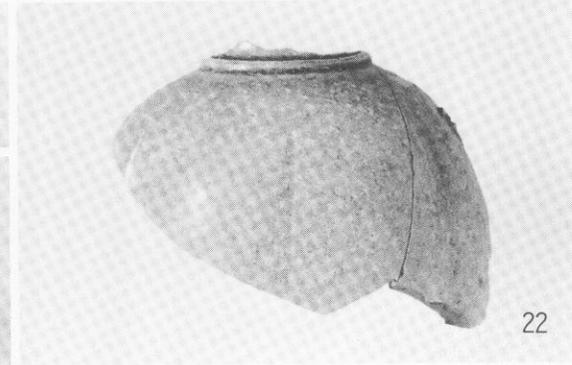
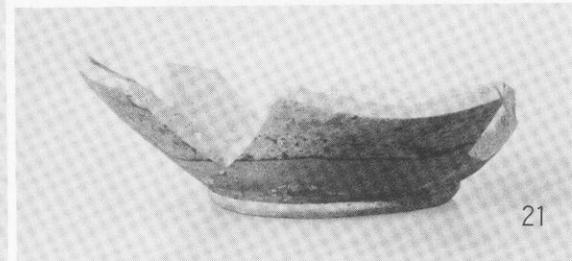
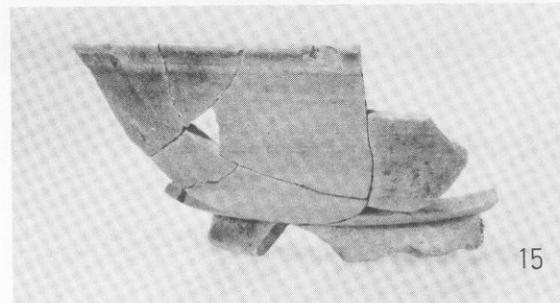
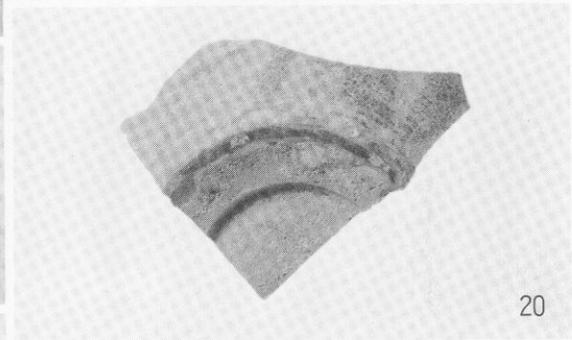
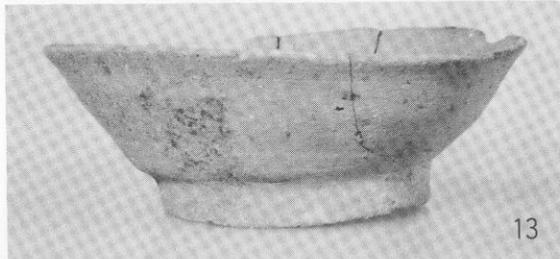
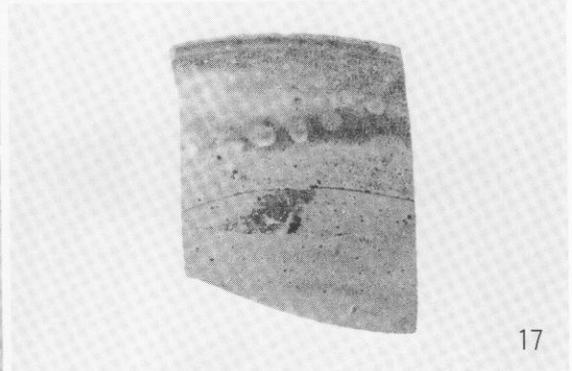
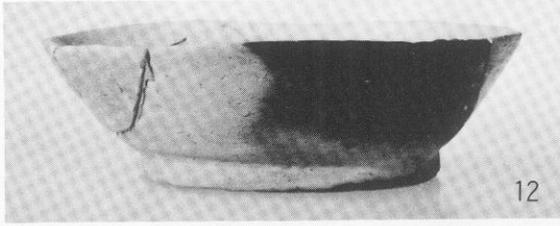
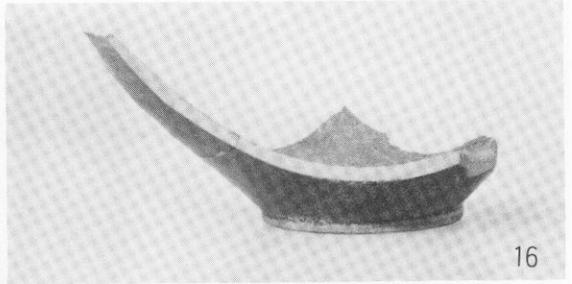
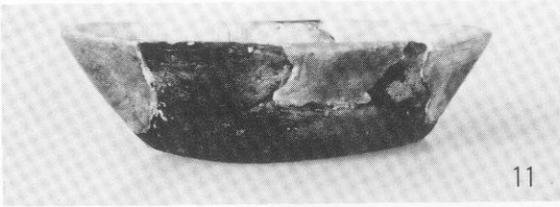


3



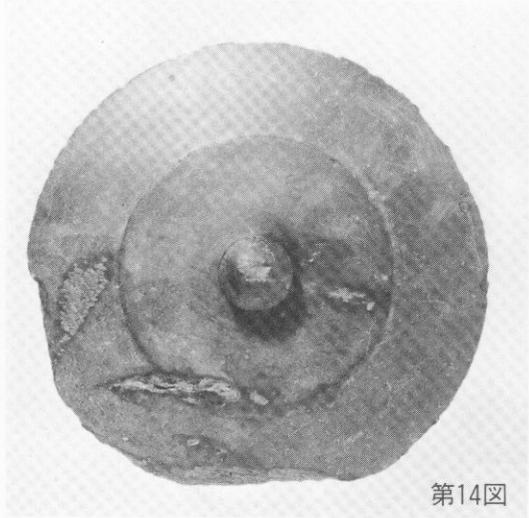
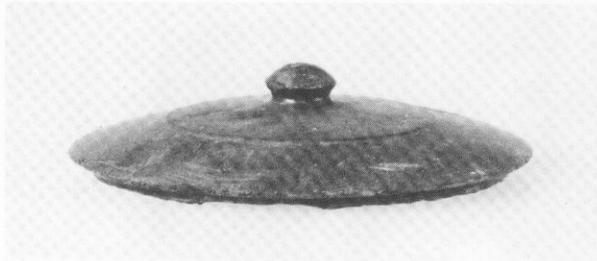
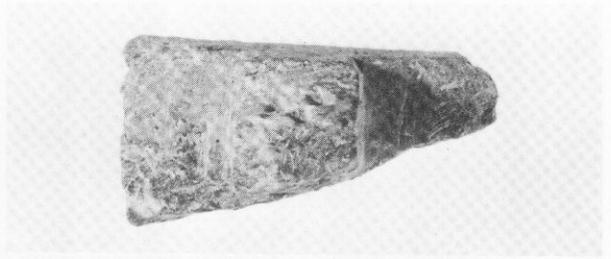
7



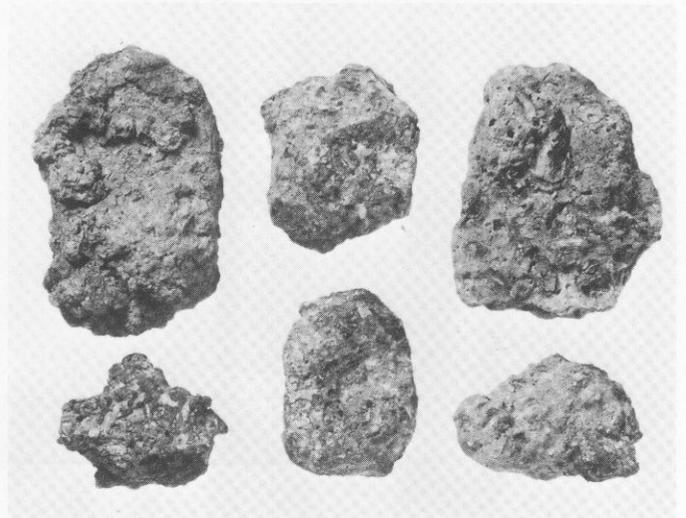




第13図



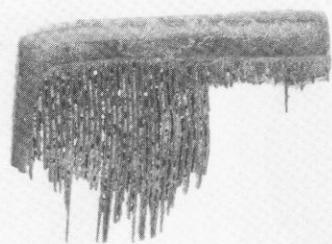
第14図



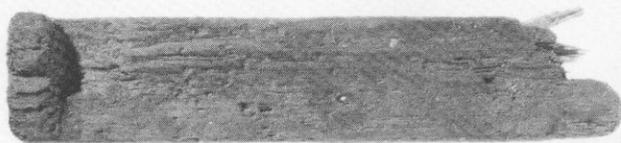
第94次調査 出土軒平瓦・木製漆塗蓋・滑石製品・鉄滓



1



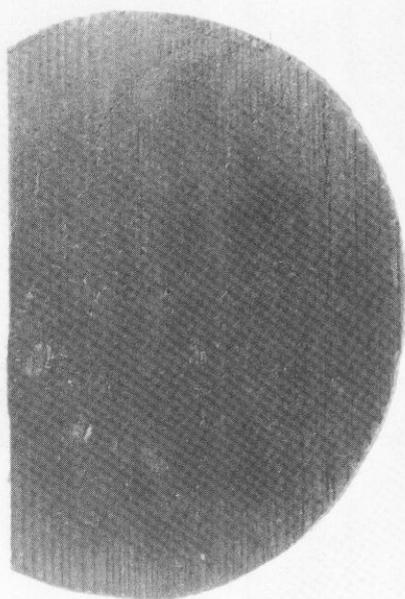
A



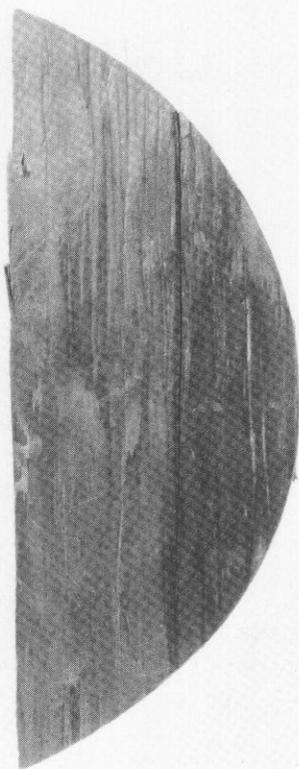
3



2

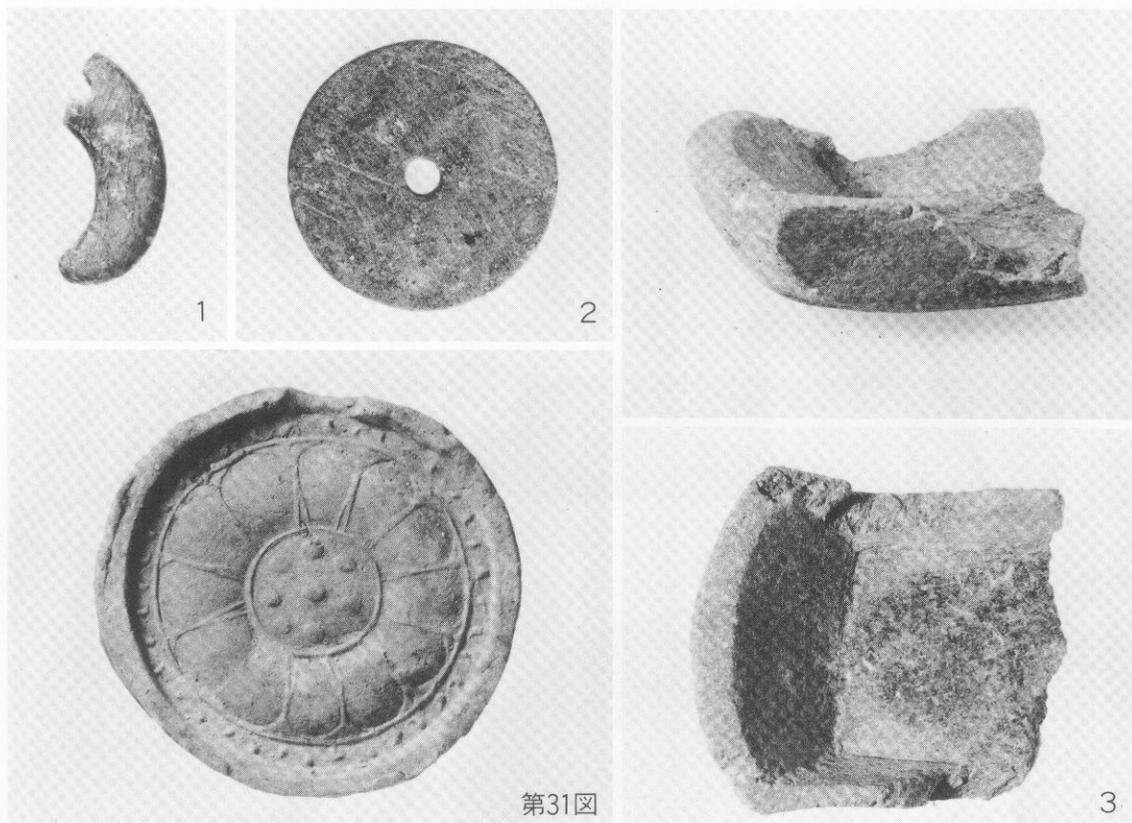


4



5

第96次調査 SE2845出土木製品



第96次調査 出土軒丸瓦・石製品

大 宰 府 史 跡

昭和60年度発掘調査概報

昭和 61 年 3 月

発 行 九州歴史資料館資料普及会
太宰府市大字太宰府 1 0 2 5

印 刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門 1 丁目 8 - 34